

恋姫バサラ 蜀編 大陸
に呼ばれし老鬼と御遣
い

双龍

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

恋姫の世界にバサラの島津のじつちゃんが送られる、他のバサラ者達も巻き込みなが
らじつちゃんの恋姫世界の冒険が始まる

目

1
2
話
1
1
話
1
0
話
9
話
8
話
7
話
6
話
5
話
4
話
3
話
2
話
1
話

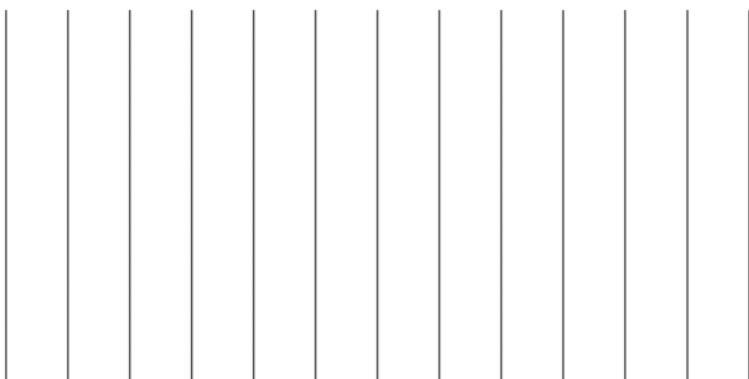
次

43 39 35 32 27 23 19 14 10 7 4 1

2
5
話
2
4
話
2
3
話
2
2
話
2
1
話
2
0
話
1
9
話
1
8
話
1
7
話
1
6
話
1
5
話
1
4
話
1
3
話

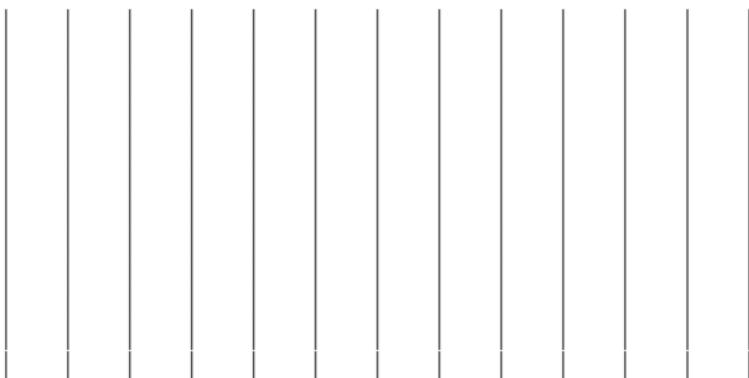
99 96 91 87 82 78 73 69 64 58 54 49 46

3 3 3 3 3 3 3 3 2 3 1 3 0 2 2 2 2
8 7 6 5 4 3 3 2 1 0 9 8 7 6 7 6
話 話 話 話 話 話 話 話 話 話 話 話 話 話



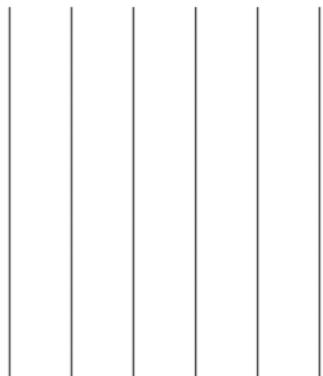
179 172 166 160 155 151 144 140 132 123 116 111 104

5 5 4 4 4 4 4 4 4 4 4 4 3
1 0 9 8 7 6 5 4 3 2 1 0 9
話 話 話 話 話 話 話 話 話 話 話 話



268 260 254 250 243 238 231 225 218 210 204 195 189

5 5 5 5 5
7 6 5 4 3
話 話 話 話 話



323 316 311 304 289 273

1話

関ヶ原の戦いが終わり日ノ本には一時の平和が訪れていた、そんなある日のこと九州は薩摩に一人の鬼が自前の焼酎を片手に酒を飲んでいた。

「かあー、うまかねーやっぱり酒は焼酎に限るのぉー」

その鬼の名を島津義弘と言った、彼は日ノ本の父と徳川家康に呼ばれ、武も戦国最強の異名を持つ本多忠勝と互角に打ち合えるほどの実力を持ち日ノ本の武人たちに尊敬を集める男である。

「天下分け目の戦が終わり、光成どんも生きとる、取り合えずはこれでいいんじやが、暇になつてしまふたわ、まあ慶次どんや軍神どん達と酒を酌み交わす、こんな世も悪かねえー、ん？」

義弘が酒を飲んでいると、自分に近づいてくる足音が聞こえた、義弘は野盗か何かだと思い、愛刀の青嵐を静かに構えた。

「そこのもん出てきんしやい、隠れどるのはわかっとるよ」

義弘は構えを崩さず岩陰に隠れてる奴に聞こえるように言つた。

「さすがは鬼島津ですね」

すると岩陰から出てきたのは年端もいかない少女だった。

「ん？おまはんただの娘つ子じやなかね」

「出てきたのが少女でも構えを崩さないとは、さすが歴戦の武人ですね」とすると少女はどこからか銅鏡を取り出し義弘に向けた。

「なんじや・・・うお!」

すると銅鏡から自分を包み込むほどの光が発せられた、光が消えると義弘は消えていた。

「申し訳ありません、今は、話す時間も惜しいのです」

そう言い残すと少女は消えた。

「いつたい何があつたんじや」

義弘はうつすらと目を開けるとそこには自分の治める薩摩の地ではなかつた、硫黄泉も火山もないただの荒野が広がつていた。

「ここはどこなんじや、薩摩じやなかね」

義弘が愛刀の青嵐を地面に刺しここがどこか考へていると近くから人の悲鳴が聞こえた、すると義弘は悲鳴のする方へ走つた、少し走ると小さな村が野盗に襲われていた。

「村が襲われとるの、ここがどこだかは分からんが悲鳴を聞いては黙つてはおれんのー」

斬られるところだつた。

「悪く思うなよこれも俺たちが生きていくためだ」

野盗の刃が振り下ろされようとしたその時。

「喝」

義弘は気合と殺氣を込めて野盗たちにだけ届くように大喝を響かせた、すると刃は振り下ろされずに地面に落ち、野盗たちが全員足がすくんで立てなくなつてしまつた。

「おまんらこれ以上罪もない村人を斬るというならこの鬼島津が相手をしもす」

すると義弘は村人と野盗の間に立ち、示現流の基本の構え上段の構えをしながらジリと野盗たちに迫つた、その気迫は正しく鬼そのものだつた。

「ひ——野郎ども逃げるぞ——」

逃げていく野盗達を見ながら青嵐を地面に突き刺した、

ここに恋姫の世界に鬼が下り立つた瞬間だつた。

今日ノ本のバサラ者たちが恋姫の世界に激震をもたらす。

2話

「お武家様、危ない所を救つていただきありがとうございました」

義弘の後ろには先ほど斬られそうになつてた老人が深々とお辞儀をしていた。

「いやいや、おいらもたまたま悲鳴が聞こえたから来ただけね、おまはんの運が良かつたのよ」

義弘は豪快に笑いながら言つた。

「ところで、ここは一体どこだか、あんたわかんね？」

「は？ ここは幽州の外れの村でござります」

「幽州？ （ここは大陸ちゅうことか？ 一体どうしたことね）」

義弘は驚いた、薩摩にいたはずの自分がどうやつて海の向こうの大陸まで来てしまつたのか。

（やつぱり、あの光が原因と見て間違いかね）

「あのーお武家様大丈夫ですか？」

義弘が考えていると老人が心配しながら言つた。

「ん？ ああ大丈夫じや問題なかよ、ところで、もうひとつ聞きたいんじやが今この幽州を

治めどるのは誰ね？」

次に義弘は時代を調べようと統治している人物の名前を聞いた。

「公孫贊様ですが？」

「おお白馬長史か（何と!? 時代までがおいがいたのとわ違うのか、公孫贊ちゅうことは、後漢末期頃か）」

義弘は自分が場所だけではなく時間まで飛び越えてしまったのがわかつた。

「教えてくれて助かつたわ、礼がわりと言つてはなんじやがさつきの賊の根城分かつかね？」

「この先に山がありましてその山の中腹にある洞窟でございますが、何故そんなことを聞かれるのですか？」

「いや、賊の根城を叩きに行くんじゃ、じゃないとまたこの村を襲いに来るからの」

義弘は自分に色々教えてくれた村人の村を助けたいと思い賊を退治しようと思つた。

「!しかし、それではあまりにもお武家様に迷惑では?」

「いやいや、あんな奴らおいにとつては朝飯前よ」

老人はあまりにも義弘に頼りすぎだと思い義弘にちょっと待つてくださいと言うと、

村の奥に入つていつた、少しすると老人が馬を一頭連れてきた。

「この馬はこの村で一番の駿馬でござります、どうかこいつを連れて行つてください、先

ほどのお礼と思つてどうか」

また老人は深々と頭を下げた。

「しかしのー、おいはまたここに戻つてこられるかわからんし」
義弘が言いかけるとその村の村人たちが、ぜひ連れて行つてくれと全員が言つた。

「おまはんらがそこまで言つてくれんなら無下にはできんね、ありがたくこいつを連れ
ていかせてもらうぞ」

義弘がそう言うと村人全員が喜んだ。

「名前あるかね？」

「いえどうかお武家様が名付けてください」

「そうかなら、来鬼にしようおまはんの名前は来鬼じや」

義弘は自分は鬼島津と呼ばれているのでその鬼が来ることから来鬼と命名した。

「それじや、おいは行く、世話になつたの」

「旅の無事を祈つております」

老人がそう言うと義弘は馬に乗り出発した。

これから鬼に何が待ち受けているのか次回を待て

3 話

義弘は村を出ると馬を走らせた。

「しかしこの来鬼は村人達が言つたようにかなりの駿馬じやな」

義弘が来鬼の走りを試していると前方に村人が言つていた山が見えてきた。

「ここが村人が言つとつた賊の根城じやな、すまんがここで待つとつてくれんね」

義弘は来鬼を手近な木につないだ。

「さてこの洞窟の中から声がしよる奴等はこの中じやなきて、まずは他に出口がないか探してみるかの」

義弘は中に入る前に他に出口がないか探した。

「ここだけのようじやなじやあ入るとすつかね」

義弘が洞窟の中に入ると奥から声が聞こえてきた。

「全く、さつきのじじいは何だったんだ？スゲー気迫だつたぞ」

「でもお頭あの村を諦めるのは惜しいですぜ」

「誰が諦めるつつたあのジジイは旅の者だ、あいつがいなくなつた後村の奴らを皆殺

しにして金目の物を頂けばいいのよ」

賊たちはそう言うと高笑いをした。

「いつの世もこういうやつらの考えは変わらんな」

義弘は青嵐を強く握りしめ一歩一歩と賊たちの方に歩いて行つた。

「ん？ てめえはさつきのジジイこんなところまで追いかけてきたのか、だがさつきとは状況が違うぜ爺さん」

賊の頭は最初は驚いていたがすぐに笑いながら手を挙げた、すると100人近くの賊が義弘の前に現れた。

「どうだジジイ、これでもさつきみたいな気迫が出せるか？ あんたもこんなところまで来なければまだ長生きできたのにな」

「わかつとらんの」

「あ？」

「おまはんらは何もわかつとらんといったのよ、おまはんらはただの餓鬼よ地獄の門の前で死体を貪るだけの餓鬼」

「わけわかんねえこと言いやがつて野郎どもさつさとこのジジイ殺してあの村に行くぞ」

賊の頭がそういうと全員が武器を構えた。

「今からおまはんらには鬼を見せてやる」

義弘は示現の構えをするとさつきとは比べ物にならないほどの殺気を賊たちに向かって放つた。

「ぐ、かは！」

野盗たちはあまりの恐怖に呼吸ができなくなつた。

「どうしたね？息もできんぐらいに恐ろしいとか、じやがなおまはんらが襲つた村の者たちはもつと怖い思いをしたんじや、餓鬼ども少しあがすぎたの、鬼の一刀しかとみんしやい」

義弘は高く上げた青嵐を一気に振り下ろし、地面を割つた、すると賊たちは全員剣の風圧だけで地面や壁にたたきつけられた。

「安心せい剣圧で吹き飛ばしただけじや」

義弘は振り下ろした青嵐を地面に突き刺し自家製の焼酎の入つたどぶろくを一気に飲んだ。

賊の頭が意識を失う前に見たのは紛れもない鬼の姿だつた

4
話

「ふん、情けなかー」

義弘は吹き飛ばした野盗たちを見て言つた、すると入り口のほうから話声が聞こえてきた。

「今のはなんだ!? 者共急げ」

声が段々近づいてくる、それも一人や二人じやない、義弘は野盗の残りだと思い青嵐を構えた。

(ま、物足りん思つとつたとこね)

義弘がそう思つていると入り口のほうから来たのは青い髪をした美しい女性だつた。

「貴殿はどなたかな?」

青い髪の女性は義弘のほうに近づいて來た。

(この娘つ子、できる)

義弘は長年多くの武人を見てきたのでその女性の佇まいからただ者ではないことがわかつた。

「おまはん礼儀を知らんようだの、人んこと聞く前にまづはおまはんが名乗つたらどう

ね？」

義弘は青嵐を肩に担いだ。

「これは失礼しました、私は趙子龍と申します」

(な、なんとこの娘っ子が趙子龍とね!? 薄々は感じとったがここはやはりおいの知つとする三国時代じやなかね)

趙子龍は義弘の世界でも知らない人はいない蜀の猛将の一人だが義弘が知つている趙子龍は男なのである。

「おいは島津義弘じや」

「姓が島津名が義弘か?」

「そうじや、おいには字がなくての」

この三国志の時代には姓と名だけではなく字が存在するが未来から来た義弘には字がないので疑問視していた趙雲にそう答えた。

「なら島津殿と呼ばせてもらおう、時に島津殿、後の賊たちは島津殿が倒したのか?」

趙雲は義弘の後をのぞくと100人はいる賊が全員気絶しているのを見た。

「そうね、この青嵐の一太刀の剣圧だけでぶつ飛ばしてやつたど」

(なんと!? 剣圧だけで100人全員を吹き飛ばして気絶させるとは、しかも一人も死んでいない)

趙雲は一太刀の剣圧だけで吹き飛ばした義弘の強さに驚きを隠せなかつた。

「島津殿、私達はこの賊を退治しに来たのだが連行しても構わないかな？」

そう趙雲は最近出てきたこの賊を退治するためになつて來たのだ。

「おいは全然かまわんよ」

そして趙雲は連れて來た兵達に賊を連行するように命じた。

兵達はすぐさま賊を縛り上げて洞窟の外に連れて行つた、そして洞窟の中には趙雲と義弘のみが残つていた。

「島津殿もうひとつ頼みを聞いてはくれないか？」

「ほう、なんね？」

「さつき賊を一太刀の剣圧で吹き飛ばしたと聞いてから武人の血が騒いで仕方がない頼む島津殿、私と戦つてくれ」

「おう、おいもおまはんと戦いたい思つとつたどこね、それを趙雲どんのほうから言つてくれるとは武人冥利につきるね」

趙雲も義弘も互いに武人の血が騒いでいた。

(我ながら自分からふつかけるとは珍しい、そして間違いない島津殿は今の私よりも確実に強い、自分よりも強い相手に向かうこの高揚感久し振りだ)

趙雲は自分よりも強い義弘を前に槍を構えた。

「我が名は常山の登り龍の趙子龍我が槍さばきとくと見よ」

「かあー、武人の心をわかつとるのさすがじや、だがおいも負けんね、おいは島津義弘、島津の魂はこの太刀じや、さあ若き武人よこのおいを越えてみせい」
義弘も負けじと武人の名乗りをあげて青嵐を構えた。

今、鬼と龍の戦いが始まろうとしていた。

5話

(剣をあんなに上に掲げると、見たこともない構えだがこれがどうして、隙がない、どこに打ち込んでも反撃される自分が見える)

趙雲ほどの武人ともなると先を読みながら戦うのだが、義弘には隙がなく趙雲の槍がどこに打ち込まれても義弘の反撃がわかつてしまい迂闊に手がだせないでいた。

「趙雲どんから来んのならおいからいくどー」

義弘は走りながら趙雲に向けて剣を降り下ろした。

「ふつ、甘い」

趙雲は義弘の一太刀を右にステップを踏むようにかわしたと同時に義弘に向って槍でついた。

「ふつ、まだまだじや」

義弘は降り下ろした剣を蹴り上げて趙雲の槍を防いだ。

「これを防ぐとは、その構えもなかなか独特ですね」

「おいの使う流派は示現流、掲げる信念は一刀必殺、示現の太刀に二太刀はいらん」「示現流、なるほど敵を一刀の元に斬り伏せる流派か、ますます面白い」

趙雲はくすりと笑うとまた槍を構えた。

(さすが、天下にその名も知れた趙子龍じや、なかなかの槍さばきよ、この若さでここまで出来るとは、これからが楽しみな逸材じやな)

義弘もくすりと笑い剣を構えた。

「もう一発いくどー、示現流瞬激」

「同じ攻撃は通じない」

趙雲はまた右にステップを踏んでかわした。

「甘いぞ趙雲どん、浮舟、せりや、どつせい」

「な!?くつ」

義弘は降り下ろした剣を瞬時に斬りあげ右なぎ左なぎと連撃を放った、さすがの趙雲もかわしきる前に右なぎが来たので槍で防ぐのが精一杯で剣圧に耐えきれず趙雲は吹き飛ばされた。

「ふつ、流石だな島津殿」

趙雲は上手く地面に着地すると槍を地面にさして踏ん張った。

「今の技を耐えきるとは、さすが趙雲どんたいしたもんじや、じやが勝負はここまでね」

義弘は青嵐を地面に刺して趙雲に歩み寄ると趙雲の手を掴んだ。

「くつ、ああさつきの攻撃で手が痺れてしまつた、島津殿の言うとおりここまでだな、私

の敗けだ」

「ああ、今回はおいの勝ちじやが次はどうなるかわからん、また戦わんね趙雲どん」

「ああ次こそは必ず貴殿に勝つ」

義弘と趙雲は握手をしながら笑っていた。

「ところで島津殿、貴殿は別の世界から来たのではないのかな?」

「何で分かつたとね?」

義弘は驚いた、趙雲にはまだ自分が異世界から来たことを言っていないからだ。

「実は今私は公孫贊殿のところで客将をしているんだが、そこに同じく異世界から来たという男が二人同じく客将をしている」

「な、なんと!? そのもんたち名前はなんちゅうね」

「一人の名前は北郷一刀殿、もう一人は立花宗茂殿と申される御仁だ」

「なんと宗茂どんもこの世界に来ておったとは、じやが北郷一刀ちゅう名前には心当た
りがないの?」

そう宗茂は義弘と同じく九州の武将で義弘とは友人だった。

「多分北郷殿は貴殿たちとは別のところから來たのでしよう、実は管路という占い師が
この世界に天の遣いが降りて來ると予言しましてな、それが北郷殿ではないかと思つて
います」

「天の遣い、なんとも胡散臭い話じやなその男は宣教師とかじやなかとね?」

「この三国の世界ではこれから頭に黄色い布を巻いた宣教師張角率いる黄巾党と名乗る者たちが争いを起こすため義弘は疑っていた。」

「いや、宣教師ではありませんな、私はかなり面白い男と思っています」

「趙雲どんがそこまで言うなら大丈夫そうだの、北郷一刀か一度会つてみたいの、そうじゃ、趙雲どん頼みがあるんじやがおいで公孫賛どんの城まで連れてつてくれんね?」「ええ、構いませんよその方が宗茂殿も喜ぶでしよう、さて長くなつてしましましたがそろそろ兵達が焦れる頃でしよう、行きましょうか」

「趙雲どんおまはん、酒はいける口ね?」

義弘は自分の腰に付いているでかい徳利を外し趙雲の前に出した。

「私もその徳利が気になつていました、酒は大好物なので」

「それはよか、おいたちが会つた記念に一杯どげんね?」

「そうですな、良き出会いに感謝を込めて一杯いただきましょう」

義弘は豪快に笑うと自家製と書かれた徳利を飲んだ。

「ゴクゴク、ふはあ一勝負の後のはこれはたまらんの、ほれ趙雲どんも飲まんね」

「豪快ですな、では私も失礼して、ゴクゴク、ほう、こんなにうまい酒は始めてだ、自家製ということは島津殿が作られたのか?」

「そうよ、おいの特製焼酎ね、さてじやあいくかね」

義弘が歩き始めると趙雲が呼び止めた。

「義弘殿そなたに預けたい名があるのだが預かつて貰えるか？」

「おお、もちろんじや」

「我が名は姓は趙、名は雲、字は子龍、そして真名は星だ、わが真名を貴殿に預けよう」

星は真名について説明した、この世界には真名という心を許した者にしか呼ばせない大切な名前がある、もし本人の許しなく呼べば殺されても文句は言えないほどの重い名前である。

「そんなに大事な名をおいに預けてくれるとは嬉か、ならおいも改めて、姓は島津名は義弘、おいの国では鬼島津言われとるよろしく頼む」

義弘と星は硬い握手をした。

鬼と龍は友となつた。

6 話

「着きましたぞ、ここが公孫贊殿の城です」

義弘と星は一日かけて公孫贊の納める城に着いた、義弘は歩きながら自分が異世界から來たことや自分の故郷について星に話した。

「島津殿のことは先に早馬で公孫贊殿に知らせてあります、このまま城に向かいましょう」

義弘は賑やかな城下町を過ぎながら城に向かつて歩いた。

(城下が賑やかじやな、城下を見ればその城の城主がどんなもんかわかる、こここの城主は・・・普通じやな)

そう義弘が考えていると城門が見えてきた。

「趙子龍だ、賊を連行してお客人もお連れした、門を開けてくれ」

星は警備兵に伝えると城門がゆっくり開いた。

「趙雲様、賊は我々が連行します、趙雲様はお客人と共に玉座の間へどうぞ」

警備兵はそう言うと賊を連行して行つた。

義弘と星が玉座の間に着くと公孫贊たちが待つていた、そこには懐かしい友人立花宗

茂の姿もあつた。

「これはこれは島津殿、よくぞ来てくださつた、私は姓は公孫名は贊字は伯珪と言うよろしく」

「おお、丁寧な挨拶痛み入る、おいは島津義弘こちらこそよろしくの」

ふたりは固く握手をした、すると控えていた男が義弘に向かつて歩いて來た。

「島津殿・・・お会い出来て嬉しいです」

「おいもよ宗茂どん、しかしおまほんまでこの世界に来とつたとわの、そうじや宗麟どんはどげんしたとね？」

宗茂はいつも宗麟に付いていたので義弘は当然一緒にいると思つていた。

「私は気づいたら荒野のど真ん中にいまして、我が君はどこにもおられませんでした、そして飲まず食わずで5日間探し回りましたがおられず、公孫贊殿の城の近くの森で倒れていた所を北郷殿に助けていただき、公孫贊殿の城に御厄介になつた次第でして」

それを聞くと義弘は一刀に近づいた。

「おまはんが天の御遣い呼ばれてる男ね？」

義弘は一刀の目を見て言つた。

「あ、はい北郷一刀です」

一刀も怖じることなく義弘の目を見た。

「おまはん良い目をしとるのー、星どんの言うとつたとおり面白か男ね、宗茂どんを助けてくれて礼を言うありがとう」

「いえ、俺も尊敬していた島津さんにお会いできて光榮です」

「尊敬？ おいをかね？」

「はい俺は島津さんよりももつと先の未来から来ましたでも、宗茂さんに聞いた話では俺と島津さん達とは同じ日本でも違う世界から来たんだと思います」
それから一刀は自分の世界の戦国時代の話をしたが、やはり義弘のいた世界とは歴史が違つた。

「ややこしいのー、じゃがこん世界は面白か、星どんに会えたし、一刀どんとも会えた」

義弘はそう言うとガハハと笑つた。

「いや、俺はそんな大層な人物じやないですよ」

「一刀は頭をかきながら照れた。

「いや、おいにはわかる、おまはんは何かすごい事をやつてくれる、それは多分この大陸に必要な事じやろう」

笑つていた義弘が一刀の頭に手をおいて優しく言つた。

「やつぱり、同じ九州の人だなじいちゃんと同じ匂いがする」

「そうか、やはりおまはん九州の出かね、なんとなくじやがそんな気がしどつたよ、やは

りおまはんからも九州もんの匂いがすんね、じやがなまりがないのう」

「実家は鹿児島にあつて両親とじつちやんはそつちに住んでいるんですけど俺は東京、じやなくて昔で言うと・・・そう、江戸で学校という学問を教えてくれるところに通つています」

一刀は鹿児島を出て東京の聖フランチエスカという学校全寮制の学校に通つている。
「どうか、おまはんの時代では誰でも学問を学べるのかね、いい時代じや、願わくばおい達の世界もそういう未来を作りたいもんじや」

鬼と天の遣いの出会いである。

7 話

一刀との挨拶を終えると後ろの3人の女の子を義弘は見た。

「ご主人様ー、私たちも忘れないで」

すると3人の女の子の中からピンク色の髪をした女の子が一刀の隣に立つた。

「私も自己紹介しますね、姓は劉名は備字は玄徳ですよろしくお願ひします義弘さん」

劉備は満面の笑顔で義弘に手を差し出した。

「おまはんが劉備殿か、おいも会えて嬉しい」

(この娘っ子が仁君と言われとる劉備とは、確かに王の器を感じる)

義弘は劉備と握手をした。

「ほら、愛紗ちゃんと鈴々ちゃんもおいでよ」

劉備が他の2人を呼ぶと美しい黒髪の女の子が前に出てきた。

「私は姓は関名は羽字は雲長と申しますそれでこつちは」

「鈴々は姓は張名は飛字は翼徳なのだよろしくな、じいちゃん」

2人も劉備と同じようにてを出して自己紹介をした。

「よろしくの関羽どん張飛どん」

義弘は2人とも握手をすると最初に口を開いたのは張飛だった。

「じいちゃん強いなー」

「そうかの？ 張飛どんにそう言つてもらえるとは嬉かね」「ああ、身体から発せられる鬪気が尋常ではない」

続けて関羽がそう言うと義弘が身をうずうずさせて言つた。

「我慢しようと思つたがだめじや、関羽どん張飛どんおいと戦つてくれんね？」
「それは願つてもない申し入れだ、な鈴々」

「おうなのだ、受けてたつのだ」

3人はそう言うと庭に向うと一刀たちも義弘たちを追いかけた。

3人は庭に出るすると関羽と張飛はどちらが先に義弘と戦うか話し合い最初に関羽、次に張飛という順番になり義弘と関羽が武器を構えると張飛は後ろに下がつた。
「かーやっぱりすぐかね関羽どん」

「？ 何がだ」

「おいのいた世界にも関羽どんと同じ軍神の名を持つもんがおるが、おまはんはそん男と同じ匂いがすんね」

義弘は飲み友達でもある上杉謙信と関羽を重ねていた。

「ほう私に似た男がいるのか是非とも会つてみたいが今は義弘殿と戦うのが先だ」

「いざ尋常に勝負」

関羽と義弘がそう言うと2人の武器がぶつかりっぱぜり合いになつた。

(ぐつ、義弘殿なんという剛力)

すると義弘は関羽を吹き飛ばすが関羽はきれいに着地し義弘との空いた距離を一氣につめた。

「はあー、青龍連撃」

関羽は偃月刀を下から上に斬りあげて刃を返してさらに降り下ろした。

「威力を殺さずに連撃をすることはさすが関羽どん」

義弘は関羽の連撃を何とか防いだ。

(今の攻撃でかすりもしないとは、だが休ません)

すると関羽は義弘を休ませないよう斜め下からおもいつきり斬りあげた、すると義

弘も同時に剣を降り下ろしたが関羽の力に負けて弾かれた。

「今だ、青龍逆鱗斬」

関羽は振り上げた偃月刀を渾身の力で降り下ろした、試合を見ていた誰もが関羽の勝

利を確信したたつた1人義弘を除いて。

「甘か!! 示現流連獄」

義弘はわざと剣を弾かれて上に弾かれた剣を一気に降り下ろして青龍逆鱗斬を弾き

返し立て斬りの乱打を関羽に浴びせ最後に渾身の立て斬りを放つた、関羽は吹き飛ばされ倒れた。

「ぐつ、私はこんなところで負けるわけには」

関名は偃月刀を杖のようにして立ち上がったが力尽きて倒れてしまった。

「なかなか面白か勝負じやつた、関羽どん今回はおいの勝ちじやまた挑みにきんしやい」

義弘は気絶した関羽にそう言うと焼酎を飲んだ。

軍神対鬼の勝負は鬼に軍配が上がった。

8 話

倒れた関羽に劉備と張飛が駆け寄つた。

「愛紗ちゃん、愛紗ちゃん」

「愛紗、愛紗起きるのだ」

関羽の身体を2人が揺らしていると義弘が近づいて來た。

「劉備どん、張飛どん、安心しんしやい関羽どんは氣絶しとるだけじや」

2人は関羽を見ると息をしていたので一安心した。

「でもまさか愛紗ちゃんが負けるなんて、義弘さん強いですね」

劉備が義弘に言うと宗茂が近づいて來た。

「島津殿は某たちがいた日ノ本では武人の頂点に君臨している方なのです、某も負けてはいられませんな」

「宗茂どんおいを持ち上げても何も出んぞ、じゃどん関羽どんも中々のもんじやつた」

義弘が関羽を誉めていると関羽が目を覚ました。

「う、うん、鈴々かそーか、私は・・・負けたのだな、すまんが鈴々肩を貸してくれ」

関羽は張飛に支えられながら義弘の前に立つた。

「義弘殿、先ほどの勝負は私の完敗です、ですが次は負けません、私は幸運だ宗茂殿や義弘殿という越えるべき武人に出会えて、それから義弘殿私の真名を受け取つていただけますか？」

「おお、もちろんじやおまはんら若もんの越えるべき壁になるのは老兵の役目じやからの、喜んで真名を預からせてもらう」

「私は愛紗と言います義弘殿これからよろしくお願ひします」

義弘と愛紗は固く握手をした、すると張飛が自分の武器である蛇矛持ち義弘に近づいた。

「さあじいちゃん、今度は鈴々の番なのだ」

「おお、張飛どん、もちろんじや」

張飛と義弘は愛紗たちから離れて武器を構えた。

「行くのだー、てりやー」

張飛は全身の力を込めて蛇矛を降り下ろした、義弘はそれを正面から防御した。

(なんちゅう力じや、単純に力だけなら愛紗どん以上じやな)

「やるなーじいちゃん、だけど鈴々の本気はこつからなのだ、うりやりやりや

張飛は蛇矛での連続突きをしたがこれも義弘には通じなかつた。

「やるのー張飛どん」

「全部防いでおいてよく言うのだ」

「いや、かなり重いわ一撃一撃がの」

「鈴々の蛇矛には、みんなの夢と希望と、平和を願う心がこもつてゐるのだ！重くて当然！力のある人間が弱い人たち守る！当たり前のことが出来ない奴が多いから、鈴々たちがみんなを背負つて戦うのだ！ずっと・・・死ぬまでずっと！鈴々はみんなのために戦うのだ！それが鈴々の生き様なのだ」

「重いの張飛どんの生き様は・・・」

「重いと思うから重いのだ。軽いと思えば簡単に背負えてしまうぐらい軽いのだ。・・・それが逆に悲しいけど・・・でも、鈴々は背負つていくのだ！ずっと！ずっと！鈴々が死ぬときまで！」

（なんちゅう覚悟の強さじや）

「張飛どん見事じや、その強い覚悟には本氣でいかねば失礼にあたる、張飛どん・・・覚悟せい」

「島津義弘は鬪気を放つた、義弘は顔をさらりと険しくした、見ていたみんなの目に映るのは島津義弘ではなく鬼島津の姿だつた。
 （これがじいちゃんの本気、とてつもないのだ）

張飛は蛇矛を強く握りしめて構えた。

「示現流天雷」

義弘がそう言うと剣を掲げたすると空が曇り落雷が義弘の剣に落ちた。

「義弘殿に落雷が!?」

愛紗が心配したが宗茂が愛紗を止めた。

「今はいってはなりません、島津殿は大丈夫です」

宗茂の目を見て大丈夫だと愛紗は確信し戦に目を戻した。

「いくど、張飛どんしかと受けてみんしゃい、示現流撃昌」

義弘は張飛に向かって走り張飛の少し手前で前方宙返りして雷を纏つた強烈な回転切りを叩き込んだ。

「鈴々も負けられないのだー、うりやあああ!!」

張飛も渾身の一振りを義弘の剣に当てた。

「チエストーーー」

「うりやーーー」

2つの武器がぶつかり合い爆発が起き土煙が起きた、見ていたものたちは伏せた。

「くつ、鈴々、義弘殿!!」

愛紗が叫ぶと段々土煙が晴れてきた、するとボロボロの張飛と義弘は肩当ての繩が切れて落ちていて身体が少し傷つき、二人は爆発で飛ばされ離れて立っていた。

「・・・鈴々は・・・絶対負けられないのだ」

すると張飛はその場で武器を持ったまま倒れた、今度は劉備と愛紗が張飛に駆け寄つた。

「張飛どん見事よ、おまはんの覚悟の強さこの島津義弘感服しもした」

すると義弘は張飛に近いた。

「張飛どんまた勝負しよう」

氣絶した張飛にそう言うと宗茂の方に歩いた。

「良い勝負でしたな島津殿、鈴々殿の覚悟には心が打たれましたな」

「ああ宗茂どん、こん世界は面白かね、星どん、愛紗どん、そして張飛どん良い若もんのが揃つとるわ、おいはこの若もんたちが天下を取るのを見てみたいんじや」

「そうですな奇妙な縁で会いましたが、某も同じ気持ちです」

義弘と宗茂は張飛を介抱している劉備たちを見て言つた。

鬼と張飛の試合は鬼の勝ちで終わつた。

9話

義弘が宗茂と話していると公孫贊が話に入ってきた。

「星から聞いていたが義弘殿は強いな、どうだろう宗茂殿と一緒に客将としてここにいないか？」

「そうじやな行くあてもないし、先を見たい若もんにも会えたしの、公孫贊どんよろしく頼む」

「そうか、よかつた義弘殿私の真名は白蓮だ、こちらこそよろしく頼む」

義弘と白蓮は再度硬い握手をした、その日から義弘は公孫贊軍の客将として迎えられた、そして義弘が公孫贊軍に身をおいて一月がたつた、その間に義弘はこちらの世界の言葉を理解し字も書けるようになっていた、そしてその日の朝白蓮は義弘を玉座の間に呼び出した、そこには一刀たちや宗茂の姿もあった。

「おお義弘殿、さあ義弘殿も来たことだし緊急の軍議を始める、義弘殿が最初に立ち寄られた村が攻撃を受けている」

白蓮が村が攻められたと話すと皆の顔つきが変わった。

「何と、あん村が襲われるとの、白蓮どん攻めてる賊の数はどれくらいね？」

「伝令の話によれば5千だそうだ」

白蓮が賊の数を言う、すると最初に口を開いたのは義弘だった。

「白蓮どんおいに行かせてくれんねあの村には世話になつたもんもおる、だから頼む」

「そうだな義弘殿頼む、後はそうだな愛紗と一刀一緒に行つてくれ兵は八千連れていつてくれ、桃香と鈴々と星と宗茂殿は本城で私と待機だ」

「いや、白蓮どん三千じや、それだけおれば十分、後はおいたちが何とかする」

「な!? 義弘殿相手よりも多くのへいを集めるのは兵法の基本だぞ三千じや足りないだろ」

「いや、大丈夫だよ、三千で」

義弘の後からその声は聞こえて来た、義弘は後を振り返った。

「何と!? おまはんは慶次どんじやなかね」

そこにいたのは友の前田慶次の姿だった。

「よつ、島津のじつちゃん、じつちゃんもこの世界に来てたんだな」

「島津殿 前田殿はその村から援軍の要請をしに來たのです」

宗茂が言うと劉備が口を挟んだ。

「あの〜義弘さんこの方はどなたですか?」

「俺かい? 俺は天下御免の傾奇者、前田慶次! よろしくな」

慶次は劉備に手を差し出し劉備と握手をして劉備たちは自己紹介をすませた。

「いや、まさかあんたがあの劉備さんとは思わなかつたな」

「話を戻すが、慶次殿何故三千でいいのだ？」

「ああ、あの村には俺の仲間が一人いるんだその仲間もじつちやんと同じぐらい強いか
ら兵は三千で大丈夫だよそれにじつちやんや関羽さんたちも一緒に来てくれしね」

「そうかわかつた、そこまで言うなら三千で大丈夫だろう、たがこちらも準備はしておく
から、伝令してくれれば何時でも援軍を出せるようにしておく」

「すまんの白蓮どん、それにしても慶次どん仲間とは誰ね？」

「じつちやんもよく知つてゐやつだよ」

すると義弘の頭にはある男が思い浮かんだ、その男とは酒を酌み交わし勝負も何度と
なくした、その男のことを考えていた義弘は笑つていた。

「成る程あん男ならおいたちが着くまで村を守れるじやろう、よし急いで村までいくぞ」

義弘が玉座の間から走つて出ると慶次や一刀たちもそれに続いた。

鬼の戦が始まる。

10 話

義弘たちは馬に乗り戦場に急いでいた、すると愛紗が義弘に聞いた。

「義弘殿、村にいるという義弘殿の知り合いとはどんな方なのですか？」

「愛紗どんには一度話したことがあるの軍神と呼ばれとる男・・・上杉謙信よ、そしてもう一人は軍神の剣と言われとるかすがちゅうオナゴよ」

愛紗は自分に似ている男に会うことが楽しみになつていた。

その頃村では防衛の為に柵が建てられていて村の門の前には軍神とその剣が賊を村に通さないように陣取つっていた。

「謙信様もどうか中へお入り下さいここは私一人で大丈夫です」

「いえ私もここにいます、胸騒ぎがするのです、それにうつくしきつるぎ、おまえを置いてはいけません」

「ああ、謙信様」

そうしてみると目の前から一人の男がすごい速さで走つて來た。

「うへえすくぎけんしんさん又兵衛様がお前を処刑しに來たぞ」

目の前に現れたのは後藤又兵衛だつた、彼は謙信のことを殺したいほど憎んでおり、

さらに彼は恨みをかつたものを又兵衛闇魔帳という本に書いている、ちなみに謙信は第二位である。

「き、貴様は!? 何時いかなる世界でもお前を謙信様には近づけさせない」

「あ～んお前はお呼びじゃないんだよ・・・いや、までよくお前を殺せば上杉は苦しむかな～、無理かお前程度じや」

「貴様！」

かすがが又兵衛に飛び掛からうとしたとき謙信がかすがの前に出て制した。

「おまえはもはや人であることをやめたのですね」

「う～ざ～い～な～もう殺しちゃおうかな～・・・よし殺そ」

又兵衛は一瞬で謙信との間合いをつめて自身の武器執行刃で下から上へ切り上げたが謙信は鞘から少しだけ剣を出してそれを止めた。

「謙信様!!」

「来てはなりません、おまえは村を守りなさい」

かすがは割つて入ろうとしたが謙信はかすがを止めると刀の鞘で又兵衛を振り払つた。

「上杉～今まで順位繰り上げにすんぞ」

義弘たちはもう少しで村が見えてくる所まで来ていたすると赤い狼煙が村の方から

上がっているのが義弘たちには見えた。

「赤い狼煙？・・・まさか！？慶次どん愛紗どん一刀どん兵士たちは任せるね」

そう言うと義弘は来鬼を全速力で走らせた。

「義弘殿！？慶次殿あの赤い狼煙は何ですか」

「きっと謙信たちに何かあつたんだ、関羽さん行軍速度を速めよう」

「了解した、皆の者村で何かがあつた速足だー」

愛紗がそういうと兵士たちは士気を上げて駆けた、村の門の前では謙信が又兵衛と戦っていた。

「上杉く、死ね」

又兵衛は右から左へ執行刃で脚払いをすると謙信は飛んでそれを交わした、すると待っていたと言わんばかりに又兵衛は刃を返して謙信の首を狙つたが謙信はそれを剣で払い又兵衛を吹き飛ばし又兵衛と距離をとつた。

「ちつ、速く殺さねうといけないから・・・な」

又兵衛は執行刃を謙信に向かつて縦に飛ばしたが謙信はそれを避けた。

「ふくん、避けていいんだあ？」

謙信はその言葉を聞くとすぐ後ろを見たそこにはかすが村人たちに指示を出していて後を向いていた、謙信はかすがに向かつて全速力で駆けたがとても間に合わない、彼

女が前を向くと目の前には執行刃が迫っていた。

「せりやー」

執行刃はかすがを斬ることなく又兵衛の手に戻った、それを止めたのは謙信でもかすがでもなく義弘がかすがの前に立っていた。

「間に合つた、ようじやの」

鬼は不敵に笑つていた。

一一話

「お、鬼島津!」

かすがは目の前の義弘の登場に驚いていた。

「軍神どんこのとおりおまはんの剣は無事じや、後は存分にやらんね」

「島津殿に感謝を、さあ続けましょか」

謙信は居合いの構えをして又兵衛の方を向いた。

「ちつ、鬼島津お前も閻魔帳に載せてやるからなく、ん?ちつ、上杉くお前の処刑はまた今度だ」

すると又兵衛は謙信たちの目の前から消えた、義弘も謙信も気配をつかめなかつた。

「あん男が殺しを途中で止めて消えるとは、誰かの命令で動いとるのか?いや、官兵衛どんの所からも出ていったあん男が誰かに仕えるとは思えんが」

又兵衛は長く仕官していた黒田官兵衛の所から出ていきどこにも仕官せず又兵衛閻魔帳に書いてある人間を殺して回つていた、その又兵衛が誰かに従うとは義弘も謙信も思わなかつた。

「島津殿先程は助かりました、この世界で貴方に会えるとは思いませんでした」

謙信は義弘に近づいて礼を言つた。

「いや、軍神どん別に大したことはしとらん」

義弘と謙信が話していると一刀たちが兵士たちを連れて來た。

「義弘殿ご無事ですか!？」

愛紗は義弘の事を気遣つたが傷一つない姿を見て安心した。

「義弘さんこの方は?」

一刀が言うと義弘は謙信を紹介した。

「こん男はおいの友の上杉謙信、そしてその横にいるのは軍神の剣のかすがどん、軍神どんにも紹介しよう黒髪のおなごが関羽どん、そしてこん少年は北郷一刀どんおいが認めた男じや」

義弘は謙信たちを一刀たちに紹介すると一刀たちを謙信たちに紹介した、すると謙信が一刀をじつと見つめた。

「あの〜何か?」

「成る程、島津殿が認めるだけの器を持つてているようですね、よろしくお願ひします北郷殿」

一刀は恐縮しながらも謙信と握手した、すると次は愛紗の方を見た。
(何という眼だ心をじっくりみられてるみたいだ)

愛紗は軍神の眼からものすごい気迫を感じ取った。

「成る程、眼を見ただけでわかりますお強いですね、関羽殿、上杉謙信です、よろしくお願ひいたします」

「貴方が義弘殿が言っていた軍神殿・・・関雲長ですこちらこそよろしくお願ひします」
紹介し終わると義弘は一刀が別の世界の未来の日本から来たことを謙信たちに話すと以外にも謙信たちは信じてくれた。

「そういえば軍神どん賊はどこね?」

義弘は紹介も終わったので本来の目的の賊の討伐をしようと思つた。

「実は後藤又兵衛が来た方角に賊の砦があります」

義弘は謙信が指を指した方角に行くことにして慶次とかすがを村に残して兵を連れて賊の砦に向かつた、賊の砦の前に着くと義弘たちが疑問に思つた。

「中には賊がわんさか居るはずなのに何て静かな感じや」

そう、大勢の賊が居るとは思えないほど砦は静かだった、義弘と謙信は嫌な予感がしたので砦の門の前に近づいた。

「おかしいですね人の気配がしません」

愛紗も人の気配を探つたが砦からは気配が感じられなかつた。
「入つてみるか」

義弘はそういうと剣で扉を斬った、義弘たちが砦に入ると賊たちは全員惨殺されていた。

「これは酷い、いつたい誰がこんなことを？」

一刀が賊に近寄ろうとしたとき砦の奥から物音がしたので全員は武器を構えた。

「誰じやそこに居るのは!?」

「くっくつ、これはこれは鬼島津と軍神、卿らもこの世界に来ていたのか

「お、おまはんは!? 松永・・・久秀」

目の前に現れたのは乱世の梶雄、松永久秀だつた。

鬼と梶雄が出会つた。

12話

(この人が松永久秀)

一刀が考えていると久秀が一刀を見た。

「卿は知らない顔だな名は何というのかな?」

「ほ、北郷一刀」

名を聞くと久秀は一刀に近づこうとしたが義弘と謙信が一刀を守るように前に出たので久秀は動かなかつた。

「一刀どんこん男は危険じや」

「鬼島津と軍神、卿らが守るほどの男かふつふつ面白いな、そう身構えずともいい何もないよ・・・今はね」

そう言い残すと久秀も又兵衛と同じように消えた。

(また消えたかあん男も誰かに従うことはないんじやがな)

義弘はそう考えていると、かすが現れた。

「おお、かすがどん、どげんしたとね?」

「大変だ!公孫贊殿の城が袁紹軍の攻撃を受けていると伝令があつた」

「白蓮の城が!? 義弘さん直ぐに戻りましょう」

一刀が言うと義弘は頷いた。

「島津殿私も行きましょう、剣よ一足早く慶次のいる村に帰り、村に残った慶次に支度をさせなさい」

かすがは頷くと一足早く村に走つた。

場所は代わり白蓮の城では攻めてきた袁紹軍への対策が話し合われていた。

「袁紹軍の規模は一万だ、うちの軍は七千、籠城して義弘殿が戻つたと同時に挾撃するのでどうだろう?」

白蓮が言うと宗茂が反論した。

「しかし島津殿も討伐の後で兵たちも疲労しているでしょう、ここは野戦をしかけてはいかがでしよう? 手前が最前線に立ち敵を倒しましよう」

「し?!しかし宗茂殿それでは宗茂殿に負担がかかり過ぎてしまう」

白蓮の言うことはもつともで簡単に計算しても三千の兵を相手にすることになる。

「手前を信じて下さい(宗麟様にはもつと無理難題吹っ掛けられてるからな)、儂この程度なら大丈夫!」

「待つのだ宗茂のおつちやんだけに行かせないのだ・・・鈴々も行くのだ」

宗茂は最前線で一人で戦おうとしていたが鈴々も一緒に戦うことを決意した。

「鈴々殿・・・（大友でこんな事言つたら、宗茂一人で行つてきなさい、て宗麟様に言わ
れるのに儂と一緒に行つてくれるなんて、儂泣きそう）」

宗茂の仕えている大友宗麟は人の事を考へない子どもで宗茂も手をやいていた。

「どうしたのだ、おっちゃん？」

「い、いえ何でもありません、一騎当万の張飛殿と共に戦えるとは手前は幸せ者です」

宗茂がそう言うと鈴々は照れた。

「白蓮ちゃん、鈴々ちゃんと宗茂さんにまかせてみよう、私たちも精一杯頑張れば絶対大
丈夫だよ」

桃香は真剣な表情で白蓮に言つた。

「何故かな桃香にそう言われると出来る気がしてきました、よし麗羽の軍を迎撃とう、最前
線は宗茂殿と鈴々に任せたぞ！」

白蓮が言うと宗茂が雷切を鈴々が丈八蛇矛を持つて応えた。

「西天の立花宗茂の名と父から譲り受けた雷切にかけて必ず袁紹軍を退けましょう（き、
決まつた）」

「応なのだ、鈴々たちに任せとくのだ！」

今雷神と張翼徳二人の武が轟く。

13話

「白蓮さんの軍なんて簡単に蹴散らしてやりますわ」

袁紹陣営では袁紹が得意の高笑いをしていた。

「でも姫、白蓮さんの所にはこの頃すごく強い人たちが入つたていう噂ですよ、大丈夫何ですか？」

「心配すんなよ、斗詩と姫はあたいが守つてやるからさそれにこつちもたよりになる人ならいるだろ」

この二人は袁紹軍の二枚看板の顏良と文醜で顏良は白蓮の城を攻めるのを心配していたが文醜の方は何故か楽観視していた。

「あの人頼りになるかな？ 私は凄く心配だよ～」

「斗詩くん心配はいらぬよ、我輩と袁紹軍の力があれば敵うものはいないよ～」

袁紹陣営に現れたのは羽州の狐と言われる最上義光だった。

その頃義弘たちは謙信たちを連れて白蓮の居城に戻るため馬を走らせていた。

「軍神どん先に言つとくがおいたちが行つてもやることは無いかもしねん」

「何ゆえそう思うのですか島津殿？」

「宗茂どんと鈴いや、張飛どんもおるからの、それに最近袁紹軍の様子がおかしかったからの、だから兵は出来るだけ置いてきたんじや」

義弘は鈴々との戦いの後鈴々と桃香から真名を預かっていたが謙信たちに真名を教えては不味いと思い、真名を言わなかつた。

「さすがは島津殿ですね、確かに立ち切り花殿と張翼徳殿がいるなら負ける事はないでしよう、ですが万が一の事もあります急ぎましょう」

「そうじやな（松永たちのこともあるしの）」

義弘たちは馬の速度を速めた。

その頃宗茂と鈴々は戦場に立つていた。

「それでは鈴々殿行きましょうか（実力は分かつてるけど何かあつたら儂が守らないと）」

「応、宗茂のおっちゃん暴れまくつてやるのだ」

目の前には一万の袁紹軍が並んで立つていた。

「おやおや戦場に子供とは場違いだね～、手加減してあげてもいいよ～、何せ我輩は素敵紳士だからね～」

袁紹軍の兵を搔き分けて義光が出てきた。

「最上殿!? あなたもこの世界に?」

「ん？ おや君は髭が5点の男じやないか、えつーと名前は・・・そう、伏せ花くん！」

義光は興味のない人間の名前は覚えないでの的外れな名前を言つてしまつた。

「立花です（まあこの人とあまり接点ないからな）でも名前覚えられてないのは傷つくな」

「おい、髭の変なおつちゃん、鈴々を子ども扱いは許さないのどうりやー」

鈴々が力一杯蛇矛を振り下ろすと20人の袁紹軍が一気にやられた。

「す、す、ご、い力だね、我輩の下で働くかないかね？ 三食玄米茶を飲ませてあげるよー」

「ん？ お茶じや腹の足しにならないのだ、それにお姉ちゃんを裏切る事は出来ないのだ」「そうか、それは残念だね、それでは我輩はこれでおさらばするよー」

義光はあつという間に走つて兵の中に消えた。

「素早い髭なのだ、あいつもおつちゃんの知り合いか？」

「まあ一応あまり接点はありませんが（儂あの人苦手なんだよな）若とも話があつてたし、若と話が合う人は大抵変な人が多いからな」

そんな事を言つてるうちに袁紹軍の第一陣が突撃をしてきた。

「よし行くのだおつちゃん」

「はい、共にこの死地を戦い抜きましょう」

鈴々と宗茂も袁紹軍に突撃を仕掛けた、今戦の火蓋が切つておとされた。

14 話

「おりやー、さあ強い奴出てこいー」

文醜は斬馬刀を振り回して兵たちを倒しながら進んでいた、すると同じく戦っている宗茂と会った。

「あんたが白蓮様のところにいるつていう強い奴だな」

「手前はそう呼ばれているのですか？ 手前の名は立花宗茂と申します強いかどうかはこの、雷切で示しましょう」

宗茂は雷切を構えると文醜も斬馬刀を構えた。

「あたいは文醜だよろしくな」

「なるほど袁紹軍の一枚看板のお一人ですか、相手に不足はありません（こんな戦い久しうりだな）何時もは布教から入るからかなり警戒されるからな（）」

二人はジリジリと構えながら少しづつ横に摺り足をした、先に動いたのは文醜だった。

「あたいからいかせてもらうぜ、おりやー」

文醜は斬馬刀を振り下ろした、宗茂は雷切をクロスさせて防御した。

「中々の剛剣ですが、ですが手前はもつと強い剛剣と戦ったことがあります」

宗茂は雷切の刃を回転させて文醜の斬馬刀を弾いたが文醜も素早く斬馬刀を構え直した。

「あたいよりも強い奴か、あんたとどつちが強い?」

「手前等よりも強い方です、日ノ本の武人の頂点に立つ方ですから」

「あたいからしたらあんたも充分強いぜ、でもそうか会つてみたいな、でも今はあんたと勝負がしたいそろそろいくぞ、おりやー」

文醜は斬馬刀を横に一文字に切るが、宗茂はそれを正面から雷切で受け止めて弾いた。

「それでは手前も全力を出しましよう、はあー、伏雷震電!」

宗茂は身構えて力をためた、すると雷切に雷がたまり雷切を地面にさした、すると広範囲に電流を流して攻撃した、文醜はそれを正面から受けて吹き飛ばされた。
「体が痺れて動けない、こりやあたいの敗けだな、もう少しやれると思つたけどな、なあ宗茂頼みがあるんだけど斗詩と姫は許してやつてくれないか?あたいの命、あげるからさ」

文醜はそう言うと眼を閉じて雷切が振り下ろされるのを待つた。

「手前の目的は迫り来る袁紹軍を追い返すこと無益な殺生は好みません、それにあなた

も悪い人には見えないので、それでは失礼して先に進ませていただきます」

宗茂はそう言うと文醜を置いて先に向かつた。

「敵わないな、おい肩を貸してくれ」

近くにいた自軍の兵士に言つて肩を貸してもらつた。

「麗羽様の所まで連れてつてくれ」

文醜と兵士は袁紹の待つ本陣に戻つて行つた、その頃別の場所では鈴々と義光が対峙していた。

「髭狐やつと見つけたのだ」

鈴々は蛇矛を構えたが義光は玄米茶をすすつていた。

「こちら我輩の事は素敵紳士と呼んでくれたまえ」

「さあ髭狐さつさと構えるのだ」

義光は首を横に振りながら仕方なしに自身の武器である羽州武勇伝を構えた。

「行くのだー」

鈴々が義光に走つて近づくと義光は土下座した。

「いや、申し訳ない我輩が間違つて、いやしないのだよ」

義光は土下座の体制から跳躍してくるくる回りながら鈴々を切ろうとしたが間一髪のところで防御した。

「くそー、汚い髭狐なのだ」

「我輩は素敵紳士だよそりやそりやそりやそりやそりやそりやー」
飛び上がった義光はその体制から連續突きをしたがこれも鈴々は防御し逆に蛇矛を一振りして義光を吹き飛ばした。

「コーソン」

「どうだ、髭狐、鈴々の強さ思い知つたかなのだ！」

義光は倒れた場所から動かなかつた鈴々は恐る恐る近づこうとした時、鈴々は野生の勘が働き、義光の少し手前で蛇矛を地面上に刺すと義光に土をかけた、すると凄い勢いで義光は飛び起きた。

「君君なんてことをするんだね！我輩を埋めても紳士の木は生えてこないよー」「やつぱり死んだ振りだつたのだ、本当に汚い髭狐なのだ」

すると袁紹軍の兵士が義光に近づいて伝令を伝えた。

「義光様、袁紹様から退却命令が出ています」

「それは本當かい!? 袁紹殿の頼みじやしようがないねーそれでは、我輩はこれで失礼するよー」

そう言うと義光は凄い速さで逃げた、回りの袁紹軍も退却を始めた、何故かといふと文醜が怪我をして帰つたのを見て袁紹は退却をする事に決めたのだ。

「待つのだー髭狐、鈴々は暴れたりないのだー」

鈴々が怒つて、いると宗茂が近づいて來た。

「鈴々殿敵方は退却を始めました、我々も退きましょう」

「おっちゃん、髭狐もまともに戦わなかつたし鈴々は暴れたりないのだー」

「手前で良ければ帰つたら一勝負しましようか（髭狐かー、儂はおっちゃんとで良かつたなー）」

「本当に！勝負してくれるのかー？」

「ええ、手前で良ければいくらでも、さあ帰りましょう」

鈴々は宗茂と戦えることで何とか機嫌をなおして、二人は城に向かつて帰つて行つた。

この戦は雷神と張翼徳の勝利で幕を閉じた。

15話

宗茂と鈴々が城に着くと白蓮たちが城の前で待っていた。

「鈴々ちやーん」

「おねーちゃん」

鈴々が桃香に抱きついた、その光景を微笑ましく見ていた宗茂の元に白蓮と星が近づいた。

「宗茂殿のお陰で兵を損なわずに勝利する事ができたありがとう」

「いえ、手前に出来ることをしただけですから（戦の後に勞つてもらうなんてほんと何年

ぶりかな～）」

「さすが宗茂殿だ、また私と勝負していただこう」

「星殿、何時でもお相手いたしましょう」

白蓮と星が宗茂と話していると遠くから砂塵が見えた、義弘たちが戻つて來たのである。

「おお、義弘殿たちも戻られたようだな」

白蓮はそう言うと義弘たちを出迎えた。

「おお白蓮どん攻められたと聞いて急いで戻つたんじやが遅かつたようだの」

「だが宗茂殿と鈴々と星もいたからな大丈夫だ、ところで後ろの方たちは誰だ?」

白蓮は義弘の後ろを覗くと謙信、かすがが馬から降りていて宗茂が駆け寄つて来た。

「け、謙信公、貴方もこの世界に来ていたんですか!」

「立ち切り花殿会うのは始めてですね、上杉謙信です、なるほど島津殿の言うとおり中々の剛の者ですね」

「軍神と謳われた謙信公にそう言つて頂けるとは光栄です」

「私は上杉謙信このものは私の剣のかすがです」

宗茂と話終ると謙信は白蓮の前に行き自己紹介をした、すると白蓮や桃香たちも近づいて自己紹介をした、すると桃香は謙信の前に立ち目を見つめた。

「私の顔に何かついていますか?」

「謙信さん何でそんな寂しそうな目をしてるんですか?」

「?・?・なるほどさすがは仁君と称された劉玄徳殿隠せませんね、私には宿敵と呼べる方がいました、ですがその方が病に倒れ私は世の中に興味が無くなつてしまつたのです」

そう謙信には武田信玄という宿敵がいたが信玄が病に倒れたと聞くと謙信は越後の山に閉じ籠り天下分け目の戦いにも興味が無かつた。

「その方は謙信さんにとってとても大事な方だつたんですね、でもその人は謙信さんが宿敵つていうくらいだから強い人なんですよね、だつたら病なんか吹き飛ばしちゃいますよ」

桃香は謙信の手をとつてニコッと笑いながら言つた。

すると戦国から來た者たちはある男のことが頭に浮かんだ、長きの苦痛に耐えて全てのものと絆を結びたいと言つた男が。

(慈愛に満ちた眼、そしてこの暖かさ懷かしの甲斐の虎の暖かさに似ていますね)

謙信は桃香の眼に自分の信玄と同じ暖かさを感じた。

「ありがとうございます劉備殿、だいぶ楽になりました」

「そうですか？良かつたー後私の事は桃香と呼んでください」

「劉備殿・・・分かりました貴方の真名を預かりましよう」

桃香がそう言うと皆も真名を謙信たちに預けた、すると謙信は桃香に向かつて膝をついた。

「お願いがあります桃香殿、私と剣そして慶次の三人を元の世界に帰るまで仕えさせてはもらえませんか？私は貴方の作る世を見てみたい」

謙信の言葉に慶次やかすがは驚いたが謙信が決めたことならと思い二人とも桃香に向かつて膝をついた。

「そ、そんな頭を上げてください謙信さん」

桃香は三人を立たせた。

「仕えるとかじやなくて私と友だちになつてください」

桃香は三人に最高の笑顔を見せ手を差し出した。

「がははは、さすが桃香どんね、軍神どん一本とられたの」

義弘が豪快に笑うと謙信もクスリと笑いその手を取り握手をした。

仁君と軍神が手を結んだ。

16話

謙信たちが仲間に加わり公孫賛軍はよけいに賑やかになつた、そして巷では頭に黄色い布を巻いた黄巾党と呼ばれるものたちが各地で争いを起こしていた、白蓮の城では玉座の間に全ての武将たちが集まつており話し合いをしていた、すると最後の一人の一刀が慌てて入つてきた。

「遅れてごめん」

「全くお前は慶次と同じでだらしない男だな」

「ひどいねえ、かすがちゃん、ほら一刀も早く入つてこいよ」

慶次に言われて一刀は頭を下げながら桃香の横に立つた。

「それで白蓮何でみんなを集めたの？」

「実はな北郷私のところに黄巾党討伐軍への参戦要請があつてな、私は参戦することを決めたんだがこれは桃香やお前たちにとつて好機じやないかと思つたんだ独立のな、黄巾党鎮圧で手柄をあげれば朝廷より恩賞を賜る、桃香たちがその気になればそれなりの地位になれるはずだ、私もこの乱世を静めたいと思うが今すぐには無理だそんな私に桃香を付き合わせる訳にはいかない、時は金では買えないからな」

「そうだな、そろそろ自分達で頑張つてみようか、今までありがとう白蓮」

「一刀は今まで休む場所を与えてくれた白蓮に感謝の言葉を言うと義弘たちの方を向いた。

「義弘さんたちはどうするですか？」

「おいは一刀どんおまはんの天下が見てみたいからのおまはんたちについて行くぞ、白蓮どん今まで世話になつたありがとう」

義弘も一刀に着いていくことを決め一刀は謙信たちの方を向いた。

「私も一刀殿たちと共に行きましょう、剣も慶次もそれでいいですね」

「はつ謙信様のお心のままに」

「俺も謙信がそう決めたのなら構わないよ」

「白蓮殿、今までどうもありがとうございました」

謙信はかすがたちの了解をとると白蓮に向かつてお辞儀をした。

「宗茂どんおまはんはどうするんじゃ?」

「私は白蓮殿のところに残ります」

「そうか・・・また会おう宗茂どん」

「はい、必ず」

義弘と宗茂は固く握手をすると後ろから星が出てきた。

「義弘殿、私ももう少し白蓮殿のところにいます」

「そうかなら星どんも元気での」

義弘は星とも固い握手を交わした。

「しかし主人様、我々は手勢というものがいい、それが問題です」

そう愛紗が言つたとおりいままでは白蓮の軍の兵士を使つていたが一刀たちには自分達の兵士はいなかつた。

「手勢なら町で集めたらよい、な、白蓮殿」

「お、おい無茶言うなよ私だつて討伐で兵を集めんんだぞ」

「白蓮殿、今こそ器量の見せどころですぞ？」

「うつ・・・」

「それに白蓮殿の兵士たちは皆勇猛ではありませんか、友の門出に義勇兵の五百人や千人、贈つてやればいいのです」

「無茶言うなよ・・・」

「私も勇を奮つて働きましよう、どうですか白蓮殿」

「むう・・・ま、まあんまり集めないでくれると助かる・・・」

星は一刀たちのために白蓮と交渉し町で兵を集めることを白蓮は許可してくれた。
「じゃあ遠慮なく集めさせてもらおう桃香と愛紗と頼むよ」

「まつかせなさい」

「御意、早速行動しましよう」

「それと謙信さんと義弘さんも桃香について行つてもらえますか」

「おお大役、任せられたど」

「了解しました、北郷殿」

「はあ仕方ないこうなつた以上私も出来る限りの協力をしよう」

一刀は普段から町の民と仲良くしている義弘と謙信にも兵集めを頼み、白蓮も兵を集めのに協力すると言つてくれた。

「ありがと白蓮、この恩はいつか頑張つて返せるようにするから」

「ふふ、期待しないで待つておこう星、兵站部に手配して武具と兵糧を提供してやつてくれ」

「了解した、では北郷殿一緒に参らうか」

「一刀俺も一緒に行くよ」

「ああ慶次頼むよ」

星と兵站部に行く途中一刀は少し先を歩く星に話しかけた。

「そういえばさつきはありがとう」

「別段、礼を言われるようなことはしておりませぬよ」

「でも白蓮を上手く乗せて俺たちに便宜を図つてくれたろう」

「ふふ、何の事やら」

星は悪戯っぽく笑つた後真剣な表情をして一刀に聞いた。

「それよりも北郷殿、討伐に際して何か策のようなものはお有りか?」「実は無かつたりするんだよな、慶次は何かある?」

「俺もそういうのは謙信に任せてるからな~」

予想通りの答えに一刀は苦笑した。

「とにかく義勇兵が何人集まってくれるかだな、それに相手の情報も不足してるしそちらを集めてから行動を開始すると思う」

一刀も真剣な表情で星に言つた。

「しかし悠長な事をしていては功名の場がなくなるのでは?」

「義弘さんたちが兵を率いても俺たちはまだまだ弱小勢力には変わらない、功を焦つて全滅、なんて洒落にならないだろ、だからこそ最初の一歩はできるだけ慎重になつた方がいいと判断しているんだけど」

「なるほど中々考えてますな」

するといままで黙つていた慶次が星に聞いた。

「星姉さんはこのまま白蓮さんのところにいるのかい?」

「いや、私もいつかは白蓮殿のところから抜けるが今すぐというわけではない」

「ふーんま、何かあつたらうちに来いよ姉さん、なあ一刀」

「ああ、趙雲が良ければ来てくれるとうれしい」

「星でよろしい、私はあなたを気に入っているのですからな」

一刀と慶次がそう言うと星はまた悪戯つ子ぽく笑い言つた。

「そうですな、何かあれば一刀殿に最後まで面倒見てもらいましよう」

星は最後までという言葉を強調して笑いながら答えると先に歩いて行つた。

「やつぱり一刀の回りは面白いねえ、一刀、俺楽しみにしてるよ一刀の恋の行方』

「な、何言つてんだ慶次」

慶次と一刀は笑いながら廊下を走つて星を追いかけた、それから一週間後兵が集まり独立の日を迎えた。

17話

「これほどの兵士が集まるとは」

民に好かれている桃香に日頃から町の住民と酒を飲んでいる義弘と謙信この三人が兵を集めればかなりの数の兵士が集まると一刀は思っていたが目の前に集まつた兵士はこの街だけではなく他の村からも桃香たちの仁徳を聞き付けてやつて来ており七千人の兵士が集まり一刀は驚いた。

「さすが桃香どん民に愛されとるのー」

「これも桃香殿が真摯に民と接した結果ですね」

「いやー、義弘さんも謙信さんも照れちゃいますよー」
義弘と謙信に褒められて桃香は照れた。

「あのーすみません」

「ん?、声はすれども姿が見えず?」

「すみませんです」

「またじや、どこにおるんじや?」

桃香や義弘たちがキヨロキヨロしていると鈴々が怒った。

「もー皆チビをバカにするのはよくないのだ」

そう言わされたので義弘たちは下を向くと同じくらいの年の子供が目に涙を浮かべて義弘ズボンや桃香のスカートの裾を引いていた。

「おおこりやすまんの見えんかつたんじや」

「ご、ごめんね、どうしたのかな?」

義弘と桃香は腰をおとして目線を子供たちの高さまで合わせた。

(?、なんじやこの娘つ子たちの眼の霸気は)

義弘は彼女たちの眼の中にある霸気に気がついた。

「じ、実は私達を御遣い様の軍にいれていぢきゅ、はわわ」

ベレー帽を被つた女の子は途中で舌を噛んでしまいまた涙を浮かべた、すると今度は帽子を深く被つた女の子が話しかけてきた。

「じちゅあ、あわわ」

「二人ともまず落ち着こうか、深呼吸してごらん」

二人とも噛んでしまい落ち込んでいる二人に今度は一刀が優しく声をかけた、二人とも深呼吸した。

「二人とも落ち着いた?」

二人はコクリと頷くと涙を拭いて一刀の方を見た。

「実は私達は水鏡塾という私塾で勉強しているうちにこの世の中をもつと良くしたいと思ふ水鏡塾を出て自分たちと共に戦ってくれる人を探そうと旅に出ました」

ベレー帽の女の子が言い終わると今度は帽子を深く被つた女の子が話始めた。

「それで天の御遣い様が兵を集めていると聞いて、御遣い様の理想を聞いたら自分たちと同じで」

「それでここに着たのかい？」

二人は一刀の言葉に頷いた。

「名前を聞いてもいいかな」

「す、すいません名前も言わないで、私は姓は諸葛名は亮字は公明といいましゅ、また囁きやつた」

「あわわ、私は姓は鳳名は統字は士元でしゅ、あう」

彼女たちが名前を言うと未来から來た一刀や義弘たちは驚愕した。

(何とこの娘っ子たちがかの有名な諸葛亮と鳳統とは、じやどんこれであの霸氣のある眼の訳が分かつたわ)

(なるほど納得です、確かに小さい子供ですが眼の奥にはとんでもないものを感じます)
義弘と謙信は納得がいったような顔をしていた、また一刀もその二人の眼が嘘を言つていないと分かつた。

「ですから私達を戦列の端にお加えください」

諸葛亮と鳳統は大きな声で頭を下げる頬んだ。

「桃香俺は加えるべきだと思うな」

一刀はそう桃香に言うと愛紗が反論をした。

「しかしご主人様この二人は戦列に加えるにはまだ幼いのではありませんか？」

「でも鈴々だつてこんなもんじやないか、それに武力だけじゃ戦はできないよ」

「一刀どんの言うとおりじや愛紗どん、戦には知力も必要よ」

「ではこの娘たちにはその知力があると？」

愛紗の問いに一刀や戦国の面々は頷いた。

「そうか一人とも頭がいいんだね」

桃香はいつの間にか二人の頭を優しく撫でていた。

「あわわ・・・」

二人とも顔を真っ赤にして下を向いて照れた。

「分かりましたご主人様たちがそう言うならば信じましよう」

愛紗が了解すると一刀はまた腰をおとして諸葛亮たちの目を見た。

「それじや二人ともこれから俺達に力を貸してくれるかい？」

「は、はい」

二人とも照れて下を向いた顔を上げて一刀に向かつて力強く返事をした。

「あの皆さん私たちの真名も預かつて下さい、私の真名は朱里です」

諸葛亮が真名を言うと鳳統も続いた。

「私の真名は雛里でしゅ、いた」

雛里は囁んでしまつたが皆は微笑ましく二人を迎えた、そして一刀が未来から来たことや、義弘たちが異世界の住人であること、そして桃香たちも真名を朱里や雛里と交換しあつた。

ここに臥竜鳳雛が義弘たちと出会つた。

18話

「早速だけど朱里、雛里、俺たちはどうしたらいいかな?」

一刀はこれから始まる黄巾党討伐の作戦を早速聞いた。

「そうですね、公孫賛さんから頂いた糧食にも限りがあります、相手を選んで討伐していくのが得策だと思います」

「自分たちよりも少ない黄巾党を討伐しろという事か!」

愛紗は少し夜嫌な顔をしたが一刀が説得してしぶしぶ了承した、そうしてるうちに索敵をしていたかすがが戻つて来た。

「ここより数里先に黄巾党の一団が居たぞ、数は八千ぐらいだ」

「どうするかな」

一刀たちが考えていると朱里が考えを口にした。

「戦の基本は相手より多くの兵を集めることですがここは戦いましょう、私たちの力を合わせれば勝てると思います」

朱里の言葉に皆は頷くと桃香が地図を出した。

「あれ?この地図は市販のものじゃないですか?」

「え？ う、うん、町で売つてたやつだけど」

「じゃあそれは正確なものではありません、市販の物は商人や小隊などが使う道しか書いてありませんから」

そう市販されているものはほとんどが町の民が使うものであり正確な地理が要求される地図は官軍など一部のものしか持つていなかつた。

「幸い私と雛里ちゃんは正確な地図を見たことがありますから大丈夫です、この地図には平地となっていますがここは川が干上がつて窪地になっています」

「朱里どん、おいに策がありもす、じゃどんその前にこの窪地の近くには森があるじやなかね？」

「ええありますけど、それが何か？」

「部隊を二つに分けて一つをこの窪地に兵を伏せ近くにある森の木を切る、そしてもうひとつの中隊で敵をこの窪地に誘い、全員入つたら上から木を落として退路を断つ、そして伏兵とおとり部隊の両方で叩けばお仕舞いよ、これが島津軍の得意戦術釣り野伏せじゃ」

義弘が得意の戦術の釣り野伏せを話すと桃香たちは驚いた、義弘は武だけではなく知にも優れていることが分かつたからである。

「そうですね義弘さんの釣り野伏せの策で行きましょう、ところで誰がおとりの役をや

り」

「鈴々がやる!!」

朱里の言葉をさえぎり鈴々がおとり役をかつてでた。

「お、鈴々一人で暴れようとしてるね、よし!!、俺も一緒に行こう!!」

するとともう一人慶次が名乗りをあげた。

「にや!?、慶次兄ちゃんも来るのか?、鈴々一人で十分なのだ」

「そう言うなつて、俺もこの頃暴れてなくてうずうずしてるんだ、な、頼むよ鈴々」

「では私も一緒に行つて兵の指揮をします、そうすれば鈴々ちゃんと慶次さんは戦いに集中出来るでしよう」

「いいねえ、張翼徳、諸葛孔明と一緒に戦とは負ける気がしないねえ、善は急げと言うしそろそろ準備しようか」

鈴々、慶次、朱里の三人は兵を連れて黄巾党に向かう準備をした。

「慶次！」

「?、何だい愛紗姉さん」

「鈴々を、妹をよろしく頼む」

「鈴々は幸せだね♪」

「何がだ?」

「さつき桃香ちゃんも同じことを言いに来たよ、ま、まかせとけつてそれに鈴々を心配してるのは俺だけじゃないみたいだしな」

慶次は朱里の方に目をやつた。

「そうだな、慶次お前も気を付けていけよ」

「お、俺の事を心配してくれるのかい?、美人に心配されるとは嬉しいねえ」

「バ、バ力者私は本気で心配しているんだぞ」

愛紗が怒ると慶次は大きく笑つてこう言つた。

「まあ任せなつて俺もやるときはやるからさ」

(利と松姉ちゃん今頃何してるかね)

自分を心配してくれた愛紗を見て慶次は一人の事が頭をよぎつた。

「さあ、さつさと終わらせて来るとするか、行くぞ夢吉」

するとどこからか出てきた夢吉が慶次の肩の上に乗つた。

慶次たちは兵士二千を連れて黄巾党に向かつた。

「ならこっちも準備すつど」

義弘たちは残りの兵を連れて窪地に向かつた。

天下御免の傾奇者と夢想の姫たちの戦が始まる。

19話

慶次たちは数里進軍すると程なくして黄巾党の一団を発見した。

「居たぜ朱里黄巾党だ」

「よーしなら突撃なのだ」

「分かりました、今私たちは黄巾党の真横に居ますこれを利用して、まず鈴々ちゃんと慶次さんは兵士を連れて横から突撃します、そして機を見計らつて退却して窪地に向かつて後退します、いいですね」

朱里の作戦に二人が頷くと二人は黄巾党に突撃した、鳴り響く銅鑼の音に黄巾党たちが気づいたときには慶次たちは間近に迫つていた。

「俺の名前は前田慶次さあ、並んで並んで順番に相手するよ、そこ退けそこ退け慶次が通る!!」

「鈴々の名は張翼徳、命が要らない奴からかかつてかるのだ!!」

「皆さんは敵一人に必ず二人で当たつてください」

慶次と鈴々が派手に暴れる中で朱里は確実に相手の兵の数を減らすため二人で一人に掛けられと命令をした。

「な、何て強さだ」

「諦めんじやねえ天和ちゃんたちのために踏ん張るんだ」

黄巾党たちも奮起して慶次たちと戦つた、その頃義弘たちは潜伏場所で策の準備をしていた、その中で愛紗はやはり鈴々のことが心配なのか、準備の手が止まっていた。

「愛紗殿」

「謙信殿、なにかご用か?」

謙信に呼ばれ慌てて愛紗は手を動かし始めた。

「鈴々殿が心配のようですね」

「流石は謙信殿、何でもお分かりだな」

「慶次はあれで中々やる男です、昔は私の軍に悪戯ばかりするやんちゃものでしたが、甲斐の虎が病に倒れた時上杉を訪れ、そして私や剣と共に越後を守ると言つてくれたのです、私はとても心強かつた、それに鈴々殿の武勇も慶次に負けず劣らずの物を持つています、大丈夫ですよ愛紗殿」

謙信は辛いときに自分を支えてくれた慶次には感謝しており、その慶次強さを一番知つているのもまた謙信だつた、なので心配は無いと愛紗に言つた。

「ありがとうございます謙信殿、さあ早く策の準備を終わらせよう」

愛紗は元気を取り戻すと策の準備を始めた、くすりと笑うと謙信も策の準備に取りか

かつた。

そして所変わつて慶次たちは黄巾党たちを相手に大立回りをしていた。

「よつと、恋つづり!!」

慶次は超刀を振り回して黄巾党たちを攻撃した。

「にや!?、兄ちゃんもやるななのだなら鈴々も、うりああ」

鈴々も蛇矛を振り回して勢いをつけると右に左に大きく切りかかつた、朱里はそれを見ながら機会を見計らつていた。

「（そろそろですね）鈴々ちゃん慶次さん、そろそろ行きますよ」

「よしきた!!」

「まだ鈴々はやれるのだ」

「今は我慢だ鈴々、お前ら!! 一旦引くぞー」

慶次は暴れる鈴々と朱里を担ぐと兵たちに撤退の命令をした。

「よし、野郎共奴等は弱氣だ追いかけろー」

黄巾党たちは何も知らずに慶次たちを追いかけた、そして慶次たちが窪地に入ると黄巾党は追い込んだと思い速度を上げた。

「窪地に入った、野郎共好機だ一気に押し潰せ」

そして程なくして全ての黄巾党が窪地に入ると入り口が木で塞がれた。

「と、閉じ込められた!? 木を登つて荒野に戻るんだ」

「ダメだ木が氷つて滑つて登れねえ」

木で塞いだだけでは登つて来ると思い謙信が木を氷付けにした、そして両側の崖から伏兵たちが現れ、黄巾党たちの目の前には義弘、謙信、愛紗、さらにおとりだった慶次と鈴々も加わった、そして伏兵たちの指揮を桃香がその補佐を朱里、雛里、かすがが受け持つた。

「さあ、こつからが本番!!」

「誰が何と言つても鈴々は止まらないのだー!!」

「奪うことしか知らぬ賊どもめ、青龍偃月刀の鎧となれ」

「凍てし刃にて眠れ」

「さあ、旭日昇天の者たちよ、おいば倒し、天を、時代を駆け抜けるがよか」

義弘たちは武器を構え、黄巾党に突撃した。

「焦がれてみせましょ、命のままに！」

慶次は超刀を朱槍に変えて豪快に振り回した。

「うりあー、豪蛇連撃!!」

鈴々も蛇矛を振り回して右に左に斬った後、最後に渾身の一撃を降り下ろした、すると敵はぶつ飛び地面が陥没した。

「青龍連逆鱗斬」

愛紗は偃月刀で右に左に斬った後下から上に切り上げ最後に渾身の一太刀を見舞つた。

「はすは〜おりのするどきよ」

謙信は周囲の敵を氷らせて居合い斬りで周囲の敵を斬つた。

「現や示さん、隼人魂！」

義弘は勢いに乗つて相対する敵を次々に叩き斬つていった、そして崖の上からその光景を見るものがいた。

「ふ〜、前田の風来坊に軍神に鬼島津、鬼も黙つて逃げ出す面子だな」

「凄い、この一言につきるわね」

その男は腰に六爪の刀を持ち、三日月をあしらつた兜を被つていた、そしてその男の隣には金髪で左右に髪を纏めそのツインテールをくるくる巻いた髪をした少女が立つていて義弘たちの戦を見ていた。

20話

黄巾党たちは奇襲に義弘たちの武も合わさりあっけなく倒された、義弘たちは窪地から少し離れた所に野営地を作り一息ついていた、その時一人の兵士が伝令を伝えにやつて來た。

「北郷様と劉備様にお目通りしたいと言う者たちが來ていますがどうなさいますか？」
「誰だろう？、通していいよ」

一刀の許可に関係なしにその者たちは一刀たちの前に現れた。

「こんにちは、私は姓は曹名は操字は孟徳、あなたがこの軍の責任者？」

（ほうこの娘つ子ただもんじやない思つどつたが曹操とはの）

（なるほど、この娘がこの世界の霸王ですか）

一刀も戦国のものたちも驚いたが、義弘と謙信だけは納得のいつた顔をしていた、すると曹操の後ろから戦国のメンバーには見知った者たちが姿を現した。

「よお、まさかあんたたちもこの世界に來てたとはな」

「お久し振りです、謙信公、鬼島津殿、前田に忍びも久しぶりだな」

そこには戦国の世界では独眼竜と恐れられた伊達政宗、そして独眼竜の右目の片倉小

十郎の姿があつた。

「おお、独眼竜に竜の右目、おまはんらも居つたとは元気そうだの〜」

義弘だけではなく他のメンバーも挨拶が終わると二人の女性が曹操に近づいて来た。

「華琳様、部隊の確認終わりました」

「そう、春蘭も秋蘭もご苦労様、来て早々だけど紹介させてもらうわ、私の最愛の従兄弟にして両腕よ、春蘭、秋蘭挨拶なさい」

「は、我が名は姓は夏候名は惇字は元讓だ」

「そして私は姓は夏候名は淵字は妙才だ」

二人は自分たちの紹介するとか一礼をしたそして一刀たちも夏候惇たちに自己紹介をした、すると夏候惇は義弘の事をじつと見つめた。

「夏候惇どんワシの顔になにかついとるかね？」

「いや、貴公の武は先程見せてもらつたが凄まじかった、ぜひともお手合させ願いたい」

「おお、手合させか！願つたり叶つたりじや、よかよかこちらこそお頼みしもす、おいは先に野営地の外に行つとるからの」

夏候惇は先程の義弘たちの戦をして体が疼いて仕方がなく、義弘に手合させを挑むと義弘も二つ返事で了承し野営地の外に向かつた。

「はあ～まつたく、春蘭！」

「!? は、はい」

夏候惇は勝手に義弘に手合せを申し込んだのを曹操に咎められるかと思つた。

「やるなら、勝ちなさい良いわね」

「は、はい!!」

曹操は止めずにふつと笑うと夏候惇の背中を押した、夏候惇が野営地の外に向かつて歩いていると小十郎が引き留めた。

「春蘭、鬼島津殿は今のお前よりも強い、俺たちの世界ではあの人は武人の頂点に君臨する方だ、胸を借りるつもりで最初から全力でいけ」

「初めてなんだ」

「何がだ?」

「お前や伊達と会つたときでさえ私はお前らに勝てると思つていた、だがあの男は違う私の体が勝てないと言つているんだ、だが今この時あの男との手合せを逃したら私は多分一生後悔すると思う、だから私は戦う」

「ああ、それが武人だ、それが分かるお前は本当の武人になる素質がある」

小十郎は夏候惇の目に怖じ気がないことを知るとふと笑つて先に外に出た、夏候惇もそれに続くように外に出た、外には一刀たちや、曹操たちも二人の戦いを見ようと集まつた。

「待たせてすまない」

「いや、かまわんよ夏候惇どんよい目じや、真の武人の目よ」

「義弘殿と呼ばせてもらうがいいか?」

「かまわんよ」

「私の真名は春蘭だ貴殿には私の真名を預けたい」

「確かに預からせてもらうど春蘭どん」

「二人は話が終わると武器を構えた、二人の戦いを見ているものたちにも緊張が走つ
た。」

「おいは島津義弘、さあよい目をする若者よおいを越えてみせい!!」

「我が名は魏武の大剣夏候元譲、全力で参る!!」

「二人の戦いが今始まる。」

21話

義弘と春蘭は互いに武器を構えて動かなかつた。

(始めてみる構えだ、私の構えにも似てゐるがあそこまで剣を高くは上げない、それにしても全く隙がない)

(ほう、流石魏武の大剣と言われとる春蘭どんじや、中々よい構えをするわ)

「来ないなら此方からいくぞー」

義弘の縦斬りを春蘭はすんでのところで右に避けた、すると義弘はにやつと笑うと落とす瞬間に刃を寝かせた。

「な、何!? 刃を」

春蘭が言い終わる前に寝かせた刃を春蘭に向けて右に斬つて春蘭を打ち上げた、さらに右に斬つた剣を素早く裏返し左にもう一度斬つた。

「ぐわあああ、何という連撃だ」

春蘭は吹き飛ばされたがすぐに体勢を立て直して剣を構えた。

〔示現流浮舟、おいの掲げる信念は一刀必殺、おいはこれまでの人生をこの太刀にかけてきた、中にはおいの一刀を交わしたもんもおつた、じゃつどんそれに対する対処法も存

在する、さあ春蘭どん手合わせは始まつたばかりじや、かかつてこんね」

「無論だ義弘殿、てりやあー」

構えながら走つた、そして春蘭が袈裟斬りの体勢に入ると義弘は構えた剣を盾のように構え防御の体勢に入つた、すると春蘭もにやりと笑うと袈裟斬りを突然やめて剣を下にたてながら下から上に剣を振り上げた、義弘の防御が上に弾かれ春蘭は振り上げた剣で得意の袈裟斬りを義弘に見舞つた。

「貰つたあああ

誰もが春蘭の剣が義弘に当たると確信していたが、義弘は不適な笑みを浮かべると春蘭の剣が当たるすんでのところで後ろに下がつた、その時義弘の肩当ての繩が切れ肩当てが落ちてしまった。

「やるのー春蘭どん

春蘭が後ろに下がつた義弘に目をやると義弘の剣から並々ならぬ氣が流れているのが見えた。

「な、何だあれは」

「示現流鬼迅!!」

義弘は防御の時から剣に雷の気を貯めており、それを春蘭に向けて放つと雷の斬撃が飛び春蘭を襲つた。

「ぐわあああ」

流石の春蘭も体勢を立て直せずに地面に転がつて倒れた。

「あ、姉者あああ」

夏候淵が春蘭の身を案じた、その声が聞こえたのか春蘭は剣を杖の用にして立ち上がりつた。

「秋蘭何を心配している、わ、私はまだ・・・やれる」

春蘭はよろけながらも剣を構え、消えてしまいそうな声で秋蘭に言つた、すると義弘が剣を担いで春蘭に向かつて歩いて來た。

「ここまでだな」

「ええ、ここまでですな」

政宗と小十郎は春蘭の姿を見て限界を感じ取つた。

春蘭の目の前まで歩いてきた義弘は剣を地面に刺して春蘭の肩に手を置いた。

「ようやつたの、春蘭どん」

義弘の言葉を聞くと、春蘭は糸が切れたように意識を手放し倒れそうになつたが、義

弘が手で支えてそのまま氣を失つた春蘭を肩に担いで夏候淵のもとまで歩いた。

「姉者」

「大丈夫じや、氣絶しとるだけよ、おまはん春蘭どんの妹じやろ」

「ああ」

「良い姉を持つたの、そしてまたおまはんも良い目をしとる、姉妹揃つて精進することじゃ」

「ありがとうございます義弘殿、貴殿のような武人にそう言つてもらえて姉者も私もうれしい、私の真名も受け取ってくれ、秋蘭だ」

「ああ、こちらこそ礼を言うど秋蘭どん」

義弘は秋蘭たちに背を向けて曹操のもとに歩いてきた。

「曹操どんおまはんの言うとおり自慢の両腕じやな」

「島津義弘・・・貴方うちへ来るつもりはない?」

義弘はポカンとした表情をした後豪快に笑つた。

「ガハハ、霸王の目においが止まつたとね?」

「ええ、貴方の武勇是非うちの軍に欲しいわ」

「すまんの、おいは一刀どんたちの天下を見てみたいんじや、じやから曹操どんの所には行けん、すまんの」

義弘は曹操の誘いを断ると、曹操もまた豪快に笑つた。

「そう残念だわ、島津義弘貴方のことは例え敵となろうとも一生覚えておきましよう、そして貴方に私の真名を預ける華琳よ」

「霸王の真名確かに預りもした」
華琳は義弘に真名を預け、義弘と硬く握手をした。

22話

義弘は手合わせが終わると政宗たちのところにやつて來た。

「政宗どん、右目、おまはんらに話しておきたいことがある」

義弘は後藤又兵衛や松永久秀に会つたことを伝えた。

「あいつらがこの世界に、Ha、面白えここで決着つけてやるか」

「政宗様!?, ご油断なさらぬように後藤はともかく、松永は危険です」

「分かつてるさ小十郎、十分なくらいにな」

政宗はそう言うと遠くを見つめた。

「松永のことじや、きつと何か良からぬ事を企んだるじやろう、おいたちも氣をつけるが
おまはんたちも氣をつけるんじや」

「T h a n k s 鬼島津、まあこれから少しの間は一緒にいるから大丈夫だと思うがな」
「どういう意味ね?」

義弘が首をかしげると政宗は一刀たちの方に目を向けた、義弘も同じように向けると
華琳と一刀と桃香が何か話していた。

「俺たちがここに来たのは、黄巾党を倒す間だけ共闘しないかと持ちかけに來たんだ」

「なるほど官軍の華琳どんたちと一緒に居れば朝廷から恩賞は貰いやすいし、糧食の心配も無くなるちゅうわけね？」

義弘がそう言うと政宗と小十郎は首を縦に振った、そして華琳たちの話し合いが終わりこれから黄巾党を倒すまでの間一緒に行動することが決まった。

「そういえば前田慶次という男が居るそうね」

「ああ、居るけど、慶次ー！」

華琳が一刀に言うと一刀は慶次を呼び慶次が天幕からでて來た。

「この前田慶次をお呼びかい？、霸王さん」

「ええ、貴方を探しているという二人がうちの軍に居るのだけど」

「まさか利と松姉ちゃんかい!?」

「ええ、今呼んで来させるから、誰がある！」

華琳は自軍の兵士を呼ぶと部隊の世話をしている利家と松を呼んだ、そして少しすると二人がやつて來た。

「まあ、まあまあ犬千代様、慶次ですほらあそこに」

「元気そうだなー」

「利ー、松姉ちゃーん」

利家と松が慶次に向かつて走ると慶次も一人に駆け寄つた。

「二人もこつちに来てたんだ」

「ええ、慶次も元気そうですね、ご飯はしつかり食べていますか?、劉備殿たちに迷惑をかけていませんか?」

「大丈夫だよ松姉ちゃん」

慶次との挨拶が終わると二人は劉備たちのもとに向かつた。

「慶次が世話になつてゐる、某は前田利家と申す」

「その妻、松にござります、この度は劉備様それに皆々様には、慶次が大変お世話になりました」

利家と松が深々とお辞儀をした。

「わ、わわお二人とも顔を上げてください、慶次さんには私たちのほうがお世話になつてますから」

劉備たちが利家たちと会話している頃華琳は謙信と相対していた。

「貴方軍神と呼ばれてるそうね」

「貴様、謙信様にたいして無礼だぞ」

「あら? 貴女中々のものを持つてゐるわね素敵よ」

「う、うん貴様、な、何をする」

華琳は悪い癖が出てかすがの体を撫で始めた。

「曹操殿、私に何か話があつたのでは?」

「そうだつたわ、中々の美女を目の前にして気が狂つてしまつたわ」

華琳は撫でていた手をさつと離すとかすがは悶えながら倒れた。

「対しただけでも分かる、貴方良い目をしてるわね全てを見透かした目を、でもなぜかしら?今はその目がくすんで見えるわ」

「!、桃香殿に続き曹操殿にも見破られるとは、さすがですね霸王殿」

謙信は桃香に言つたように華琳にも甲斐の虎の事を話した。

「なるほど、宿敵と呼べるもの不失うのは確かに辛いことね、でもそれは貴方が天下から目を背けていいことにはならないわ、私はね謙信公、貴方の目が元に戻る時を心から待つわ、その時また話をしましょう」

華琳は小十郎から話を聞いていて、是非上杉謙信という男と話をしてみたかった、だがいざ会つてみればその男の目がくすんでおり華琳は心底がつかりした、だがくすんでいる謙信を見て、尚更本当の軍神の姿を見てみたいと思つた華琳はその言葉を残して謙信の前から去つた、そして立ち去る中で華琳は思つた、軍神と謳われた彼をあれほどにしてしまう甲斐の虎、武田信玄にも会つてみたいと、だが華琳は病に伏している彼に会うのは叶わぬ願いと思うと会いたいと考えた自分がバカラしくなりくすつと笑つた。

23話

華琳たちとの一時的な同盟で黄巾党の本体を叩く事になつた一刀たちは黄巾党の本拠地から少し離れた林道で軍議を始めた。

「本拠地に居る黄巾党はざつと見積もつて二万といつたところだな」

「へえ、貴方は隠密だつたのね、こちらも斥候に確認させたから兵数はまちがないわね」

華琳はかすがの隠密能力を高く評価した。

「二万? やけに少ないな」

「あんたバカなの?、張角率いる本体がいないから私たちは今のうちに本拠地を落とそうとしてるの、そんなこともわからないの?」

一刀の言葉に華琳の軍師を勤める荀彧が辛辣な言葉を一刀に浴びせた。

「貴様!、ご主人様になんと無礼な言葉を」

「愛紗、いいから話を先に進めよう、荀彧君になら何か策があるんだろう?」

「あるに決まつてるでしょ、ねえ隠密ならあの本拠地数ヶ所から同時に火をつける事も出来るでしよう?」

「ああ、簡単な事だ」

「ここに本拠地の見取り図があるわ、この砦数ヶ所から同時に火が出ればまとめる者はない黄巾党たちは焦つて砦から出てくるはず、そこを両軍で突撃すれば被害を最小限にして勝つことが出来るわ」

「劉備軍はこの策で良いの？」

華琳が朱里に目を向けると、今まで黙つて考えていた朱里は顔をあげて頷いた。

「荀彧さんがそうするだろうと思いまして、さつきあの砦に食料を運ぶ荷台隊に扮して酒を多めに運ばせました」

朱里もまた、荀彧が火計をすると踏んで火種の酒を部下を黄巾党の荷台隊に扮して運ばせていた。

「やるわね貴女、華琳様いかがでしようか」

荀彧は華琳の指示を仰ぐと席から立つた。

「ならそれでいきましよう、これにて軍議を終える各軍準備が出来たら狼煙を上げろ、かすがは狼煙が上がつたら火を着けろ」

両軍のメンバーは頷くと戦の準備を始めた。

「私の美しき剣よ氣を付けていくのですよ」

「は、はい謙信様」

「かすがちやん、気を付けてね」

「謙信様のお言葉だけで良かつたのだ、お前に言われども気を付ける」

かすがはそう言い残すと謙信たちの前から消えた、両軍は戦の準備が整い両軍共に狼煙をあげかすがに合図を送った。

「よし、これで火計の準備はできた、狼煙も・・・上がつたな、よし」

かすがは火種の全てに火を着けると謙信たちの元へ戻ろうとした。

「おやおや火計ですか？、この火を見ると思い出しますね、あの方との一時を、フフフ」
かすがが声のした方を振り向くと一人の男が二つの鎌を引きずりながら現れた。

「き、貴様は、明智！」

現れたのは本能寺で信長を殺し豊臣軍に殺されたと思われていた、明智光秀だつた。

「上杉のくの」ですか、クフフフ貴方は運がいい、私はこれを取りに来ただけ

光秀の手を見ると何か書のような物を持っていた。

「それでは失礼します」

「お、おい待て明知!!」

光秀はそう言い残すと炎の中に消えた、かすがは光秀の事も気になつたが、脱出が先と判断し砦から抜け出した。

かすがが脱出し一刀たちの元に戻る頃には本拠地の黄巾党は敗走し追撃の兵が出た後だつた。

「お、かすがちゃん遅かつたね～、今じつちゃんと謙信が鈴々連れて追撃に行つたよ」

「ああ、途中で邪魔が入つてな脱出が遅れた」

「邪魔？」

「ああ、お前たちが狼煙を上げたから火をつけたんだ、その時どこからともなく明智が現れた、そして奴は何かの書をあの砦から持ち去つた」

慶次は自分の世界で信長を殺した後死んだとされた光秀が現れた事に驚きはしたがあの男はただでは死なないとも思つてもいた。

（まさか、生きてたとはね、この世界で何かしようとしてるのか？）

慶次が考えていると伝令の兵が追撃が終わり義弘たちが戻つてくると慶次たちに伝えた、そしてその日の夜皆が寝静まつた頃野営地では戦国のものたちが集まつていた。「明智か、アイツまでこの世界に来てるとはな、いよいよ面白くなつてきたぜ」

「政宗様！」、ご油断は

「分かつてゐるつて、油断なんかしちやいねえ、しかしこのままだと魔王のオッサンまで出てきそうだな」

（政宗がけらけら笑うと利家が神妙な面持ちでなにかを考えていた。）

（信長様・・・いや、信長様は死んだんだ某がしつかりしなくてどうする）
「犬千代様、いかがなされました？」

「ん？い、いや何でもない」

利家の顔を見れば何を考えているかは松にもそして慶次にも分かつた。

(利・・・無理もねえ、利にとつて魔王さんは)

利家は主君である信長の事を尊敬もしていたが逆に怖がつてもいた、信長が死んでからは豊臣にも従わずに任されていた加賀の地を豊かにすることそして松や慶次を守ることだけを考えていた。

「犬千代様、松めはどこまでも犬千代様に付いていきます」

松はそう言うと利家の手を自分の手で包み込んだ。

「松・・・」

(信長どん、あん男がまたこの世界に現れればまた、多くのわかもんが犠牲になる、それだけはさせん)

(毘沙門天の名に懸けて、この世界で好きにはさせません魔王よ)

各々の覚悟を胸に夜は更けていく。

24話

華林たちと一緒に張角、張宝、張梁不在の黄巾党本体を攻めて蓄えられていた糧食を断つたことにより、黄巾党たちの抵抗も鎮静化されてきて、半年の間は義弘たちは華林と共に黄巾党と戦い完全に鎮圧した、そして義弘たちは目当ての恩賞である平原の相の地位（日本でいう県知事の地位）を頂き、義弘たちと一刀は相の地位に誰が座るかを話し合い、結果桃香が座ることになり城も与えられた、そんなある日、一刀は城下の見回りに慶次と共に城下町を歩いていた。

「平和だな、なあ慶次ほんとによかつたのか？利家さんたちと一緒に行かないで」

慶次は華林たちと別れたときに利家と松は華林に拾われた恩を返したいと言い華林の元にとどまる事を選択した、だが慶次は一刀たちの事が気に入り一刀たちと一緒にいることを選んだのである。

「いいんだよ、利や松姉ちゃんとは元の世界でまた会えるし、それより俺は一刀たちと一緒に居たいんだ、迷惑か？」

「へへ、そう言つてくれると嬉しいね、そだ一刀に聞きたいことがあるんだ、野暮な

ことだけどあの中で誰が好きなんだい？」

「え?」

「だつてよ実際取り取り見取だろ、桃香ちゃんだろ愛紗姉さん、小さいのが好きなら鈴々や朱里や雛里しかも皆一刀の事が好きときてる、まさか?!かすがちゃんが好きなのか？」

「今は誰が好きかなんて、決められないよ」

すると後ろから走る音が聞こえてきた、二人が後ろを向くと朱里がパタパタ走つてきた。

「ご主人様ー!!急いで戻つて下さい、お客様がいらしてます、慶次さんも一緒に」

「お客様?誰だろう分かったよ朱里、今すぐ戻る」

一刀たちは走つて城に戻つた、走りながら慶次は一刀に話した。

「なあ一刀さつきの答え、決まつたら俺に教えてくれよ」

「ああ」

城に戻ると白い服を着た見慣れた女性が玉座の間に居て、その回りに全將軍が揃つていた。

「星（姉さん）!!」

「おお、一刀殿、慶次久しぶりですな」

「半年ぶりぐらいか、今日はどうしたんだ」

星は一刀と別れてからの事を話した、白蓮の所から暇をもらい各軍を回り、自分の槍を預けても良い主君を探していた。

「へえ、それでいたのか？」

「曹操、孫策、色んな王と会いましたがどれも私とは合いませんでした、それで約束通り一刀に会いに来たのですが」

「じゃあ？」

「ええ、良ければ私を仲間に入れてはくれませんか？」

「もちろんさ、なあ皆」

皆は首を縦に振り賛成した、そして星と別れてから仲間になつた朱里と雛里を紹介した、そして星が来た夜は皆で宴会をして騒いだ、慶次はまた一刀を取り巻く女性が増えて一刀の恋がまた面白くなりそうだと思つていた。

25話

新たな仲間が加わり、初めての内政ではあつたが、朱里や謙信たちのお陰でなんとかやっていた、そんなある時歴史が動く事が起つた、漢の皇帝靈帝の死である、この国の支配者が死んだことにより、朝廷で燐つていた権力争いが具現化し、朝廷内を牛耳る宦官の十常侍と軍部を握る軍人などが、自分達の懷中にある皇太子を即位させようと、血で血を洗う権力闘争が起つた、まず靈帝の死にともない、妻の何大后とその姉である大將軍の何進により擁立された少帝弁、そして宦官の一派と靈帝の母である董太后擁立された聰明と名高い劉協、この権力争いは呆気なく決着がついた、大將軍の何進が妹の息子である弁を即位させたのである、しかし十常侍たちはその事を黙つてはおらず何大后的名前を騙り何進を暗殺、そして守る盾を無くした何大后も程なくして暗殺された、そしてこれを聞いて動いたのは何進の部下の將軍たちであつた、彼らは十常侍を急襲し數名を殺した、だが十常侍の筆頭の張讓はこの襲撃を予感し少帝弁と劉協を連れて都を脱した、逃亡の途中に実行部隊の必要性を感じた張讓は涼州の董卓を味方にしたが、所詮張讓は皇帝を手に入れているだけの文官程なくして董卓に裏切られ掌中の皇帝まで奪われた、張讓の変わりに権力の中核に居座つた董卓は少帝弁を廃位し劉協を王座につ

かせた、獻帝と名乗つた劉協を傀儡にして董卓は現在である總理大臣の位相国位をつけ、朝廷を牛耳るようになつた、だが何進の配下の將軍は黙つてはおらずそれぞれの任地で軍を割拠させた、世にいう反董卓連合が組まれようとしていた、一刀たちは桃香、鈴々、愛紗が董卓の専横に憤りを感じ直ぐにも軍をあげて反董卓連合に参戦しようと言つたが、歴戦の武士の義弘と謙信そして星や知謀を持つ朱里や雛里は参加するのを待つたほうがいいのではと言つた、だが一刀は最初から何があると分かつていれば転ばぬ先の杖になるだろうと義弘たちを説得し一刀たちは反董卓連合に参加するのを決めた。

「うわー、凄い広い陣だね」

反董卓連合の陣に着いて桃香が言つた率直な感想だつた。

「これだけの軍勢が一同に揃うとは壮観ですね」

謙信も驚嘆を禁じ得ない。

「中央の大天幕には河北の雄、袁紹さん、横には荊州南陽の太守の袁術さん、曹操さんの旗や江東の麒麟児として名高い孫策さんの旗もあります」

雛里が掲げられている旗を見て参戦者の確認をしていた。

「あつ、白蓮ちゃんの旗もあるよ」

「震えてくるの〜」

「えっ？」

「おお、すまんの一刀どん聞こえとつたか？別に怖じ氣づいとる訳じゃなか、只嬉しいのよ、袁紹、袁術、曹操、孫策皆おいの世界では書物の上でしか見たことが無いもんたちじゃ、そんなもんたちと肩を並べて戦うとは武人冥利に尽きるとね」

義弘や謙信は自分の中の武人のちが騒いでいた、が謙信はやけにキヨロキヨロしていった。

「どうしたんですか？謙信さん」

「いえなんでもありません、気のせいでしょう」

一刀の問いには答えずに謙信は天幕に入つた、すると袁紹軍の兵士が近づいて来た。
「長の行軍お疲れさまです、貴殿のお名前と兵数をお聞かせください！」

兵士は筆記用具を取り出した。

「平原の相の劉備です、兵を率いて只今参陣しました、連合軍の大将のさんへお取り次をお願いできますか？」

「はつ、しかし恐れながら現在連合軍の大将は決まつておらぬのです」
兵士は申し訳なさそうに答えた。

「じゃあ諸公たちがこんなとこに集まつて何をしているのだ」
皆を代表して星が兵士に聞いた。

「総大将を決める軍義をしているのさ」

「白蓮ちゃん!!」

その答えを教えたのは軍義を抜け出した白蓮だつた。

「久しぶりだな桃香、北郷、星もな」

「伯佳殿もお変わり無いようですな」

「お前を抜けた穴を埋めるのは大変だつたよ」

白蓮はクスリと星に笑いながら言つた。

「おお、白蓮どん久しぶりだの、宗茂どんも息災ね？」

「これは義弘殿もお変わり無さそうで、ああ宗茂殿も私の軍で頑張つてくれている」

「ところで白蓮殿総大将が決まつていないとは誠ですか？」

「じゃあ、誰もなりたくないからな、」

「いや、一人やりたがつてはいるんだが、立候補しないんだ」

「つまり、やりたそうにしてる人はいるけど立候補せず、他の人たちはその人に押し付けようとしてはいるけど自分の発言には責任を持ちたくないからなにも言わない、そういう事ですか？」

雛里が白蓮に聞くと頷いて答えた。

「この世界の英傑たちが揃いも揃つて情けないですね」

「全くじや、こんなことしとる間も董卓軍は準備を整えとるかもしかんちゅうのに
「私、軍義に乗り込んでくる」

謙信と義弘の言葉を聞いて桃香が言つたが一刀がそれを止めた。

「ちょっと待つて、桃香が行つたつてどうせ取り合つてくれないよ」

「じゃあ、ご主人様はこのままで良いつて言うの？」

「そうは言つてない、これはつまり腹の探り合いなんだだから正攻法でいく」

一刀はニコッと笑うと自分の考えを話始めた。

26話

「正攻法ってどうするの？」

「簡単だよ早く決めてーつて言うだけ」

「それだけ〜？」

「腹の探り合いをしてるときはこういう直球の方が効果があつたりするんだよ、それに皆腹の探り合いにこれだけの時間を使つてしまつたんだ、自分の発言で軍議が終われば自分の責任になる、それを皆被りたくないんだ」

一刀の言葉を聞いて謙信が異議を唱えた。

「しかし一刀殿、それでは私たちがその責任を負わねばなりませんよ？」

「当然そうなります、正直部の悪い賭けですけど、でも妙な膠着状態になるよりか、その方が良いと思いました」

「なるほど良い目ですね、一刀の覚悟は分かりました、皆も同じ意見でしよう」

謙信が皆を見ると全員が頷いていた。

「じゃあ行きましょう、行くのは俺、桃香それに義弘さんと謙信さんもお願いできますか？」

三人は頷き、他の残りのメンバーは兵士たちの面倒を見てもらうことにして一刀たちは白蓮を連れて軍義の場に向かつた。

軍義の場に入つた瞬間義弘と謙信は驚いた、なんとそこには、華林が政宗と小十郎を連れてきたことは想像できたが、金髪の袁紹を小さくしたような女の子の後ろにはピンク色の長い髪をした女性と黒髪で眼鏡を掛けた女性その後ろには日ノ本一の兵と称される真田幸村、さらにはその主君であり病床に伏していたとされた武田信玄が仁王立ちしていた、更にボニー・テールの女の子の後ろには関ヶ原の戦いで義弘が負かした徳川家康が控えていて、白蓮座つていたであろう席には宗茂が立つており、ついでに袁紹の後ろには文醜と顔良おまけに義光が後ろに立つていた。

(甲斐の虎・・・貴方の回復待つていてましたよ)

(謙信、待たせたな)

(家康どん、やはりおまはんもこつちに)

(鬼島津殿・・・)

家康は義弘の方を向いてペコリとお辞儀をした、幸村も尊敬する義弘に挨拶をしようと思つたが信玄に止められお辞儀をした。

「さて皆さん、兵力、軍資金、装備どれをとつても一級品のこの軍に一つ足りないものがありますわね、それはなんだと思います？曹操さん」

「さあ、検討もつかないわね」

この瞬間一刀たちは確信した、白蓮の言つていたやりたがつてゐる人間とは袁紹であると分かつた。

「まあ、宦官の孫である貴方には分からぬでしようね、この完璧な軍の指揮官である総大将ですわ、いつたい誰がよろしいでしようね？」

袁紹の回りくどい言い方に家康も信玄も苛ついてはいたが世話になつてゐる人に迷惑をかけないため黙つていた。

「もう袁紹さんで良いんじゃないんですか？」

「あら？ 貴女はどなたですか？」

「平原の相の劉備です、こんなことをしてゐる間も民は泣いてゐるんです、一刻も早く大將を決めて董卓を倒しましょう」

桃香はしごれを切らしたように袁紹に言つた、すると他のものたちも続々と賛成して連合の大将は袁紹がやることになつた、そして集まつてゐた将たちが続々と天幕から出ていった、桃香たちも出ていこうとした時、袁紹が桃香を呼び止めた。

「劉備さん、貴女の一言で私が総大将となれましたわ、そこで貴女には名譽ある役目である、汜水関で先陣を任せましよう、聞けば貴女の軍には猛者が揃つてゐるとか、なら貴女たちだけでも楽勝でしよう、それでは頼みましたわよ」

袁紹はそう言うと天幕から出ていった。

「見え透いた、嫌がらせだの！」

「ど、どうしようご主人様」

「まあ、帰つて皆と相談して考えよう」

桃香たちも天幕から出て最後は義弘が出ようとした。

「武田の忍じやな、もう誰もおらんよ」

すると義弘の影から武田軍の忍びである、猿飛佐助が現れた。

「流石は鬼島津、親方様からの伝言で今夜陣の中で俺たち集まろうって言つてるんだけどどうする？独眼竜たちは来るつてさ」

「もちろんおいたちも行くと伝えてくれんね」

義弘はそう言うと天幕から出ていった、同時に佐助も消えていた、一刀たちは自分の天幕に帰りことの次第を皆に話すと最初は驚きはしたが桃香の気持ちも分かるので皆は戦いの準備をした。

「そうじや桃香どん、すまんが夜はおいたちの世界のもんたちと集まることになつとるんで少し抜けるど、そうじや桃香どんと一刀どんも一緒にこんね？」

義弘の言葉に異世界の英雄に興味もあつたので桃香と一刀は付いていくことにした、そして夜になり信玄の天幕には戦国人間だけではなく、現在自分たちが世話になつて

いる勢力の王も集まっていた。

「皆よく集まつてくれた、まずは儂たちから紹介させてもらう、儂は甲斐の虎武田信玄」「某は真田源二郎幸村と申します」

「俺様は真田の旦那の忍で猿飛佐助つて言うんだよろしくね」

「俺は西海の鬼神の長宗我部元親だ、よろしくな」

「んであたしは姓は孫名は策字は伯符よろしくね」

「儂らは縁あつて今は孫策の所に身をおいておる」

次に喋つたのは政宗だつた。

「俺は奥州の独眼竜、伊達政宗、んでこいつは俺の右目の片倉小十郎だ」

政宗に紹介された小十郎が頭を下げた。

「某は前田利家だ」

「その妻、松にございまする」

「私は姓は曹名は操字は孟徳よ」

そして次に喋つたのは家康だつた。

「ワシはの名は徳川家康、皆に出会えたこの縛に感謝したい、そしてワシの隣にいるのは徳川第一の家臣の本多忠勝だ」

「アタシは姓は馬名は超字は孟起、母さんである馬騰の変わりにこの連合に来たんだよ

ろしくな」

「最後はおいじやな、おいの名は島津義弘、皆からは鬼島津と言われとるよろしくお頼みしもす」

「私は越後の軍神、上杉謙信よろしくお願ひいたします」

「私は謙信様の剣のかすがだ」

「俺は前田慶次、よろしくな」

「私は姓は劉名は備字は玄徳です」

「俺は北郷一刀って言います、皆さんたちの来た日本とは別の日本から來ました」

別の日本という言葉に孫策の元にいるものたちは疑問を持つたが、一刀が別世界の日本から來たことを信玄たちに話し、信玄たちも自分たちの置かれた状況を見て一刀の話に納得した。

「次は手前ですね、立花宗茂と申します」

「私は姓は公孫名は贊字は伯佳と言う」

一通りの紹介が終わると元親が家康に近づいた。

「久しぶりだな!!、元親」

「家康・・・」

元親の声は何か怒つて いるようなそんな声だつた。

「家康、一つ聞かせろ何故だ何故四国を攻めて野郎共を殺した
元親の言葉に一同が騒然となつた。

27 話

「ど、どういうことだ元親、ワシが四国を攻めた？」

「そうだ、俺が戻ると野郎共の死体の回りには徳川軍の旗が落ちていた」

元親が武器を握る手に力を込めた。

「元親、誓つても良いワシは四国を攻めてはいない」

「本當か？お前の名譽に誓えるか？」

「ワシの名譽などどうでも良い、お前との縛に誓う」

元親の問いに答える家康の眼には嘘を言っている目ではなかつた。

「そうか、分かつたすまねえ家康」

「いいんだ元親」

家康と元親は固く握手をした、すると今度は華林が信玄に近づいた。

「貴方が武田信玄ね、是非会いたいと思つていたわ」

「ほう、曹孟德にここまで言つてもらえるとはな、儂もまだまだ捨てたものではないな」

(謙信公と同じぐらい凄いものを感じるわね、それにこの男と会つてから謙信公の眼が
変わつた、あれが本当の軍神の目なのね)

華林と信玄が握手していると謙信が近づいて来た。

「謙信……」

「信玄……」

「御主との決着は必ずつける、どんな世界でもな」

「ええ」

謙信は信玄と短い言葉を交わすと離れていった、次に信玄に近づいたのは義弘だつた。

「おお、島津の」

「おいは、心配ばしちよらんかつたよ、虎が病に負けるはずなか」

「ふつ、しかし島津の、御主が劉備に付くとはな」

「まあ、桃香どんもそうじやがおいはあん男が気になつたのよ」

「あの、別世界の日本から來たと言う小僧か？」

義弘の言葉を聞いて信玄は一刀に近づいた。

「おい、小僧」

「は、はい」

「名は確か北郷一刀だつたな」

「はい、武田信玄公ですね御逢いできて光榮です」

「なるほどその眼、島津のが興味を持つわけじや、小僧精進する事を忘れるでないぞ」
信玄も謙信や義弘と同じで一刀に何かを感じ挨拶を終えると一刀から離れた、信玄が

離れると家康が一刀に近づいた。

「やあ北郷殿、ワシは徳川家康だよろしくな

「俺は長宗我部元親だ、よろしくな北郷」

家康と一緒にやつて来た元親も一刀と握手をした。

「慶次から聞いたぜ面白い奴だつてな、ダチのダチはダチだ一刀つて呼んでもいいか?」

「構わないよ、じやあ俺も元親つて呼ばせてもらう」

「ならワシも一刀と呼ばせてもらうよワシの事は家康で構わない」

同じ年頃で妙に気が合う三人だつた、戦国の者も三国の者も時間を忘れて語り合い、
気がつけば夜はふけ皆は解散しそして次の日の朝になつた。

「さあ、桃香様ご主人様はお下がりください、先鋒は私と鈴々と星で請け負います」

愛紗たちが先陣を切ろうとすると義弘が待つたをかけた。

「頼みがあるんじや」

義弘の言葉に劉備軍の誰もが驚いたが、義弘は決意を曲げなかつた、所変わつて汜水
関の前には連合軍が揃つっていた、すると先陣を任されていた桃香の軍から義弘が一人で
出てきて汜水関の目の前で止まつた、汜水関の中では指揮官の華雄が義弘を見ていた。

「何だ？あの老人は」

桃香は祈るように義弘を見ていて義弘の頼みを思い出していた。

「頼みってなんですか？」

「この戦、このままいけば多くの犠牲を出すのは明白よ、じゃどんおい一人でいかせてくれんね」

「な!? 島津殿正気か？一人で汜水関を落とすと言うのか？いくら貴殿でもそれは愛紗の言葉を遮つたのは一刀だつた。

「義弘さん」

「一刀どんおいを信じてくれんね」

一刀は義弘の目を見るとコクリと頷いた。

「汜水関に籠る将兵よおいの名は島津義弘、今から一太刀で汜水関を斬らせてもらうぞ」
義弘が汜水関の中にまで聞こえるくらいの大声で言つた、すると汜水関に籠る兵士たちはそんなことができるわけ無いと笑つていたが華雄だけは真剣な表情で義弘を見ていた。

（何時もなら私も笑うところだが、何故だろうあの老人嘘を言うようには見えない）

連合軍の者たちも義弘の言葉に驚きを隠せない。

「忠告はしたど」

義弘は最後にそう言うと自家製の焼酎を飲み剣の柄に吐き掛けた、そして青嵐を力強く握り青嵐を高く上げ剣に闘気を込めた、それを見た華雄は部下の兵士たちに叫んだ。「お前らー、今すぐ反対側の虎牢関側の出口から出るんだ!!上にいるものは虎牢関側に飛び降りろ!!」

華雄は義弘の眼と剣に集まる闘気を見て、この太刀を受けてはならないと判断し兵士たちを撤退させようとした、兵士たちも華雄の表情を見て即座に汜水関から撤退した。

〔示現流、断岩〕

義弘が勢いよく青嵐を降り下ろした、砂塵が舞いその砂塵が晴れるとそこに立つていたのは一匹の鬼と縦に真つ二つに斬られた汜水関だつた。

28話

汎水関が義弘により真つ二つに斬られた事は、直ぐに洛陽の城にも伝わった。

「た、大変です賈駆様!! 汎水関が一人の男に斬られました」

兵士は大慌てで軍師である賈駆に報告した。

「あんたねえ、汎水関を斬れるわけ無いでしょ、情報は正確に持つてきなさいよ」

「しかし華雄將軍からの伝令ですので間違いないかと」

「はあ!!」

すると玉座の間の奥で座っていた老人が槍を杖のようにして歩いてきた、北条氏政である。

「まあ、待つのじや詠、もしかしてその汎水関を斬つたというのは髭を扇状に生やした、儂ぐらいのじいさんじやないかの?」

「は、はいその通りでござります」

「なら詠よそれは正確な報告じや」

「ま、まさかあんたのところの世界の奴?」

「うむ、そんなことができる奴は儂の世界にも数人しかおらんが、そのうちの一人の島津

の仕業じやな」

「全く、あんたの世界の人間は常識を知らないの？」

「鬼島津か、相手にとつて不足はない」

更に奥から拳銃を持った雑賀孫市が言つた。

「月ちゃん大丈夫ですよ私がついてますからね」

鶴姫が手を合わせて祈つていた。

「ともかく孫市と貴女のところの黒い奴借りるわよ」

「風魔か？ よからう風魔ー！！」

氏政が呼ぶと後ろから風魔小太郎が突如現れた。

「孫市、風魔、虎牢関にいる恋たちの援軍に行つて」

「フフ、月には世話になつた雜賀衆は受けた恩は必ず返す」

孫市は走つて扉を出でいき風魔は命令を聞くと姿を消した。

虎牢関では撤退してきた華雄たちを呂布と張遼が迎えていた。

「あははは、まさかあの汜水関を斬つてしまふじいさんがいるとは、驚きやな

〔霞・・・笑つてる場合じやないぞ〕

華雄と張遼が話していると呂布は汜水関のある方を見つめた。

「恋殿、何かあつたのですか？」

呂布の軍師である陳宮が聞いた。

「・・・・その人戦つてみたい」

「恋そらざるいで、うちが戦いたいのに」

呂布たちは義弘のやつたことを聞くと大層やる気をだし義弘たちを待ち構える準備をした、連合軍側でも興奮は収まつていなかつた。

「圧巻の一言ね、ねえ祭？」

「本当ですな策殿、儂も武人の血が騒いできましたぞ」

「全く、雪蓮も祭殿も何を呑気なあの力が敵に回つたらどうするの」

「まあ、落ち着け冥琳そうなれば儂らの出番よ、のう幸村」

「勿論でござります、お館さまああーこの幸村早く暴れとうござります」

「へつ丘の鬼があれだけやるんじや、俺は大地でも割つて見せるか」

「はやるな、元親」

「お前こそはやつてるよう見えるぜ思春よ」

孫策たちは義弘のやつたことに武人の血をたぎらせていた。

「流石は義弘殿だ、よーし私もやるぞ秋蘭!!」

「まあ、待て姉者、華林様の命はまだだ」

「やはり島津は欲しかったわね」

「H a、流石だぜ鬼がそこまでやるなら竜はもつと上を目指さなくちゃな」

「肌が焦げる、これぞ鬼島津」

「それにしてもよ、小十郎董卓のやつも運がねえな、華林に孫策それに劉備、加えて武田のオッサンに真田、西海の鬼に越後の軍神、三河の虎に青天の立花、鬼島津にこの俺独眼竜に右目のお前、どんな事したら竜や鬼から攻め立てられるんだろうな」

「しかし政宗様これだけのものたちが共に戦うことはもうありますまい、よい経験になるかと」

「ああ、俺もM a xで行かせてもらうぜ」

「松一、某もあんない様になるぞー」

「はい、犬千代さま」

「信じらんない」

魏の陣営では荀彧が一人義弘のやつたことに頭を抱えていた。

「よ、義弘さん凄すぎ」

「流石は義弘殿だな我々も負けてはいられない、鈴々戦の準備だ」

「応なのだ」

「ふつ、義弘殿次は常山の趙子龍の武勇を見ていただこう」

「流石じつちやんだなよし、おれもやるとするかー!!」

「島津殿次は私も行きましょう」

桃香たちも義弘のやつたことを見て盛り上がりつていた。

「あのじいさん、凄いなあ」

「そうだろ、だが島津殿の武勇はあんなもんぢやないぞ翠、なあ忠勝」

義弘の武勇を見て忠勝も次は自分の番だと言わんばかりに張り切つていた、そして義弘が桃香たちの所に戻つてきた、そして連合軍は虎牢関まで部隊を進めた、連合の部隊を待ち構えるように呂布、張遼、華雄率いる部隊も虎牢関の前に展開していた。

「お、来よつたで」

「よし、汜水関では遅れをとつたが今回はそうはいかんぞ」

張遼と華雄は強敵と戦えることに武人の血が騒ぎ、呂布も黙つてはいるが戟を握る手に力が入つていた。

「行く・・・」

呂布の言葉で戦の火蓋が切つておとされた、謙信が兵を連れて斬り進んでいると目の前に張遼が現れた。

「あんたか？ 汗水関斬つたちゅうんわ」

「いえ、それは私ではありません」

「そうか・・・でもあんた強いなあ、仔まいでわかるわ、うちは神速の張文遠や」

「なるほど張遼殿ですか、私は越後の軍神上杉謙信、奇遇ですね、私は神速聖将とも呼ばれています」

「ほんならどつちが早いか勝負着けずにはおれんな！」

その頃義弘も部隊を連れて進んでいた、すると目の前に陳宮を連れた呂布が味方を斬つて進んでいた。

「死ね」

呂布の容赦の無い攻撃が兵士の命を奪おうとしていた、すると義弘が兵士と呂布の間に剣を降り下ろした、呂布はヒラリと義弘の攻撃を交わし義弘の方を向いた。

「汜水関斬つたのお前」

「そうじやおいは島津義弘、皆は鬼島津と言ちよる」

「鬼島津・・・」

「おまはん、呂布じやな」

「そう」

「がははは、おいはついとるのゝ鬼神呂布と戦えるとは・・・腕がなるわ」

義弘は豪快に笑うと不敵な笑みをした。

「恋もお前と戦いたい、音々下がる」

呂布がそう言うと陳宮は下がった。

鬼島津と鬼神呂布、そして神速の張遼対越後の軍神上杉謙信二組の闘いの火蓋が切つておとされた。

29話

張遼と謙信はにらみ合いを続けたが先に動いたのは張遼だつた。

「行くでええ、はあ」

張遼は一瞬で謙信の前に移動し下から上に切り上げその刃を降り下ろした二連撃を決めた、だが謙信はそれを防御で受け止めた。

「どないしたんや、受けてばつかじやおもんないで」

「そうですねそれでは、神斬！」

「うあああ」

謙信は張遼からの攻撃をすべて防御した後瞬時に踏み込みの居合いを張遼に放つた、張遼は吹き飛んだが地面につく前に体勢を立て直した。

「神速言われるだけの事はあるなあ、楽しくなつてきたでえ、うちの本気はこつからや」

張遼は自分の頭の上で飛龍偃月刀を回転させて勢いをつけて突いた、すると謙信は鞘を振り上げた、張遼はこれを謙信が防御するととり攻撃した、すると謙信はカウンターで居合いを張遼に食らわせた。

「ぐわあああ」

「神鏡、もうおよしなさい張遼殿」

「へつ、そう言われてハイそうですかなんて・・・言えるかいな」

張遼はふらふらになりながらも立つて武器を構えた。

「良い覚悟です、ならば次で終わりにしましよう、神陣」

謙信ジヤンプして剣を前方に降つた、すると張遼の足元から氷柱が出現し張遼を打ち上げようとした、だが打ち上げられたと思われる張遼の体が無いことに謙信は気づいた、張遼は足元から氷柱が出現するのを読んで後ろに退いて交わしていた。

「もろたでええ」

張遼は右から左に偃月刀を降つて氷柱を碎いた後、返す刃で謙信の体を狙つた。

「流石は張遼殿、神陣を交わすとはですが、神燕!!」

ジヤンプから着地した謙信は宙返りをしながら真空の刃を飛ばした、立つのもやつとの張遼は交わすすべもなく当たり倒れた、倒れた張遼に向かつて謙信はゆっくり歩いて近づいた。

「へへへ、負けてしもたうちの人生もここまでか」

「ええ、貴女の敗けです」

謙信が刀を降り下ろすと思った張遼はゆっくり目を閉じた、だが何時までたつても斬られないことをおかしいと思い目を開けると謙信は手を伸ばしていた。

「今日は貴女の敗けです、ですが貴女はよき武人ここで死なせるにはおしい、私のところに来ませんか？」

「軍神のあんたにそこまで言つてもらえるとうれしいわ、エエであんたのところに降らせてもらうわ」

張遼は謙信の手をつかむと一気に立ち上がり、肩を貸した。そして時は少し遡り義弘と呂布の鬭いも始まろうとしていた。

「お前強い、だから恋も全力でいく」

「そうかね、おいも手を抜く気はなか」

両者は構えを崩さずに相手の出方を伺っていた。最初に攻撃したのは呂布だった。戟を右から左に全力で振り抜いた。ガードをした義弘だったが呂布の力のまえに吹き飛ばされてしまった。すると着地点に呂布が先回りして落ちてくる義弘に向けてジャンプして全力で縦に戟を降り下ろした。義弘はすんでのところで剣で戟を受け止めたが地面に叩きつけられた。

「ぐわあああ」

呂布は叩きつけられた義弘に追撃で戟を突き刺したが、義弘は体を回転させて交わした。

「恋の攻撃ここまで交わしたのお前始めて」

義弘は立ち上がりと剣を再び構えた。

「呂布どんおいは嬉しいど、この世界の若きはほんとに面白かー!!」
すると今度は義弘が攻撃を始めた、まず剣を降り下ろしたが呂布に防御で受け止められてしまつた。

「連撃いくどー、示現流連獄!!」

義弘は剣をもう一度降り下ろした、呂布はまたかと思わんばかりに防御で受け止めていたが、今度の義弘の攻撃はさつきとは比べ物にならなかつた、受け止められた剣を目にも止まらぬ早さで連続で降り下ろした、だがすべての斬撃を呂布は受け止めてみせた。

(くつ、手が)

しかしその代償は大きく呂布は自分の手を見ると皮が剥けて血が出ていたが呂布は戟だけは離さなかつた。

「れ、恋殿ー!?

その光景を見た陳宮が呂布に近寄ろうとしたが呂布は陳宮を止めた。

「音々来ちやダメ」

「でも、恋殿!」

「二度は言わない・・・」

それでも近寄ろうとした陳宮を眼で威圧して止めた。

「どのみち次で終わる」

呂布はぼそりと独り言を呟くと戟を上に振り上げて構えて氣を貯めた、戟を見ると赤色の気が集まっているのが見えた。

「呂布どん本気ちゅうわけね、ならおいも、ぶあー」

義弘は剣の柄に焼酎を吐き掛け剣を高く上げて氣を貯めた青い雷撃が義弘の剣を包んだ、両者はにらみ合いをしばらく続けると、両者は氣を貯めきり技を放つた。

「鬼神豪断！」

「示現流、断岩！」

両者の武器がぶつかった瞬間氣と氣がぶつかり爆発が起こった、両者を光が包み込み次の瞬間二人は吹き飛ばされた。

「くっ」

「ぐおおお」

「やるのー呂布どん」

義弘と呂布は受け身をとれずに地面に叩きつけられた。

義弘はゆっくり立ち上がりと呂布の元へゆっくり歩いてきた、義弘が呂布の前に来ると陳宮が泣きながら義弘の服を掴んだ。

「お、お願ひするのです!!、恋殿を、恋殿を殺さないで下さい、お願ひするのです!!」

「音々やめる、戦に負けたなら、殺されるの当たり前」

「でしたら、音々も一緒に斬り下さい!!、恋殿のいない世界に未練は無いのです」

陳宮は呂布の体をぎゅっと抱きしめて目をつぶった、呂布ももう言つても無駄だと思
い片手で陳宮を抱き締めて目を閉じた、その光景を義弘はずつと見ていた。

「呂布どん、生きんしやいおまはんを思つてくれとるもんがおるなら、それにおまはんは
まだやることが残つとるはずじや、そうじや一先ずおいたちの軍にこんね?」

呂布は少し考へるとコクリと領き意識を手離し気絶した、義弘はにこりと笑うと呂布
の体を抱き上げた。

「おまはんも来るがよか」

「お、お前に言われなくとも行くのです!」

陳宮は悪態をつきながらも義弘に付いていつた、各軍が奮戦したこともあり董卓軍は
孫市たちの増援を待たずして洛陽の城に退却していき、洛陽の城では籠城の準備をして
いた、そして虎牢関の戦いに勝つた義弘たちは呂布と張遼のもとに集まつた。

「軍神どんが張遼どんを連れ帰つとるとは思わんかったの()」

「鬼神と謳われた呂布を破るとは流石島津殿」

謙信と義弘は互いの戦功を讃めあつた、だが目の前の張遼の顔色があまりよろしくな

いことを桃香が気づいた。

「張遼さん、何か心配なことでもあるんですか？」

「ん？ ああ月、じやなかつた董卓のことが心配でな」

「分かんないね、何で董卓の奴が心配なんだい？」

「あんたら何て言われてうちら攻めてきたんや？」

桃香たちは都で暴君となつた董卓を討伐するために来たことを張遼に話した。

「やつぱりな」

「張遼殿、貴殿の口ぶりだと事実はそうではないみたいですね」

「ああ、実際董卓は帝にそんなことをしたことあらへん、ある男のせいや」

「誰じや？ そん男とは」

「名前は松永久秀ちゅう男や」

「？」

松永を知るものたちは全員が驚いた。

「松永は董卓を人質にしてこの戦を起させたんや」

「軍神どん、おまはんの剣に言つて皆をここに集めてくれんね？」

「その方がいいですね、ですが曹操殿や孫策殿は立場もあります呼ばない方がよい
でしよう、剣頼みましたよ」

「はっ！」

義弘と謙信はかすがに命じて戦国の面子を義弘の天幕に集め、そして張遼の言つたことを話した。

「許せぬ、董卓殿を人質にとり戦を起こすなど、この幸村がだんじて許さぬ」「松永・・・あのときに殺すべきだつたな」

幸村は熱く政宗は静かに怒つていた。

「しかし政宗様、松永の狙いはなんでしょう？」

皆が考えていると今まで黙っていた信玄が口を開いた。

「張遼の目を見てもこの者が嘘を言つていないことは分かる」

「もちろんやうちはそんなつまらん嘘はつかん！」

「よし決まりじや、佐助!!」

「ここに」

「事態を詳しく知りたい、お主は城に潜入してくれ」

「御意！」

「剣、お前にも頼めますか？」

「ええ!? 佐助とですか・・・分かりました」

「おつ、久しぶりに一緒に行動できそうだね」

「うるさい!! 無駄口を叩くな」

佐助はかすがのことが好きだが、どうのかすがは謙信にゾッコンなので、実らない恋ではあるがでも佐助はかすがと共に任務ができて嬉しかつた。

「ほんまにありがとう」

張遼が涙声で礼を言うと佐助とかすがは城に侵入するために天幕を出ていつた、ここに董卓救出作戦が幕を開けた。

30話

「せや、謙信はんあんたら別の世界から来たねやろ?」

「何故その事を」

「うちの所にも居るんや、槍を杖みたいにつく氏政つちゅうじいさんと気配がせえへん

小太郎それに孫市後鶴つちゅう姫さんや」

「ほう氏政ですか、しかし妙な取り合わせですね」

「氏政たちは松永に従つておるのか?」

「いや放浪しとつたのを月が面倒見たんや、そやら月の為に戦をしとる」

氏政たちはこの世界に着いたはよいもののお金も無くどうしようもなくなつたときに董卓に拾われたのだ。

「ならば事情を話せば協力するでしよう」

謙信に言われて二人は頷くと姿を消した。

「ならば我らは潜入が松永に気づかれぬように攻城戦に集中する、帰るぞ幸村」

「承知しましたお館様、それでは皆様お休みなさいませ」

「なら俺たちも帰るぜ、行くぞ小十郎」

「はつ、政宗様」

「なら、おいたちもこの事を一刀どんたちに知らせるとするかの、張遼どんは呂布どんと一緒に休んどれ」

「ありがとう、それどうちのこととは真名の霞呼んでくれ」

「了解しもした、それじやあの」

義弘は一刀たちにことの次第を話すと董卓救出に快く手伝ってくれると言つてくれた、その頃佐助たちは無事に洛陽に忍び込んでいた。

「いやーまさかかすがと一緒に任務ができるとは思わなかつたわ〜」

「無駄口を叩くな与えられた任務を」

二人は微かだが気配を感じ一人で背中合わせに武器を構えた。

「かすが」

「分かつて いる、 おい出てこい！」

かすがが言うと闇の中からゆっくり姿を表したのは風魔小太郎だつた。

「やはり風の悪魔か、貴様何を企んでいる」

かすがの言葉には答えずに小太郎は城の方に向かつて走つた。

「追うぞかすが！」

「お、おい」

佐助は小太郎の意図をくんで小太郎を追いかけた。

「付いていって大丈夫なのか？ 佐助」

「ああ、あいつなら姿を消すこともできるのにわざわざ消さずに走るつてことは俺たちを誘つてるんだ」

「バカそれじや罠の可能性もあるだろ」

「ああ、でも罠ではない気がする」

「お前の勘が外れたらただでは済まさないぞ」

佐助とかすがは小太郎を追いかけ洛陽の城に忍び込むと玉座の間の扉の前に佐助とかすがを誘導すると小太郎は消えて玉座の間の扉が開いた。

「武田に上杉の忍、久しぶりじやな」

中では氏政たち董卓軍に拾われたものたちが集まつており小太郎もその中に加わつていた。

「なるほど俺様たちをここに呼ぶために風魔を」

「そうじや、風魔から戦場で武田や上杉や島津のを見たと言わされての、霞たちもお主らに捕まつたようじやし、霞ならこの状況をお主らに伝え、お主ら二人を送るじやろうと風魔がの、ワシの風魔がの!!」

氏政はどうどうと胸を張つて情けないことを言つた。

「まあ、それは良いけどさどうしてこうなったの？」

「それはの「それは私からお話しします」

その声は玉座の間の奥から聞こえると二人の少女が現れた一人は緑色の髪をして眼鏡をかけ、もう一人は着ている服や佇まいから姫のような雰囲気を醸し出していた。

「私は姓は賈名は駆字は文和」

「そして私は姓は董名は卓字は仲穎です」

かすがと佐助は驚いた、今まで出会った三国志のものたちは全員女性だつたこともあり董卓も女だとは思つてはいたがこんなに小さく純粹な目をしていたからである。

「ほ、本当に前が董卓なのか？」

「はい」

「信じられないやろうが眞実じや」

「どころでさ俺様たちは董卓が捕まつてゐるつて聞いてきたんだけど？」

「それがな虎牢関で負けた後松永の奴が来ての、もうこの娘はよう済だからと言つて返したんじや」

「でその松永本人は？」

「消えよつた」

佐助が考へてゐるとかすがが話した。

「さて、どうやつてこいつらを連れ出すか」

「それは問題ないわこの洛陽には地下水道があつて、そこを抜けると外に出られる、でも外に出たとしてあたしたちには帰る場所が・・・」

「まあその事も含めて取り合えずお館様たちに聞いてみるか、はつ！じゃこの事をお館様に頼むよ」

佐助が印を結ぶともう一人の佐助が現れて信玄たちに報告に行つた、佐助の分身が陣に到着すると信玄は義弘と謙信そして一刀さらには政宗を自分の天幕に呼んだ。

「また呼び出しますの、佐助！報告せい」

佐助は松永が逃げたことや董卓たちが逃げ場が無い状況に陥っていることを話した、すると一刀が手を上げた。

「董卓たちは俺のところで面倒を見ます」

「ほう」

「♪♪C○○Iな目だ覚悟も決めてるようだな一刀」

「可愛い女の子は見捨てられないからな」

「はつははは、おもしれーなお前、オツサンどうするよ？」

「うむ、なら一刀お前に任せるとどうやって董卓を救う？」

「まずは攻城戦をして折を見て洛陽の門を開けてもらい袁紹に俺たちが先に城に入る事

を容認させます」

「そう簡単にいくか?」

「袁紹の性格上高貴な貴女が城に入る前に安全を確認してきますと言えば高い確率で〇Kすると思うんだけど」

「あのバカならやるかもな」

「うむ」

「それにそう言わなくても危ない役目は俺たちのような弱い勢力が担うことになるでしょうし」

「よし佐助、この事を董卓たちに伝えるのだ」

佐助は了承すると目の前から消えた、そして一刀たちも自分の仲間たちへ董卓の事を知らせに行つた。

「北郷一刀か、おもしれー奴だな」

政宗はそう言い残すと信玄の天幕から出て華林の元に帰つた、一刀が桃香たちの元に戻ると董卓たちを保護することを皆に話した。

「どうかな?」

「私は良いよ」

「主の決めたこと異存はありません」

「仲間が増えるのは鈴々も嬉しいのだ」

「孫市が来るのか、楽しみだね！」

桃香たちがよしとする中愛紗は複雑な表情をしていた。

「愛紗ダメかな」

「異存はありませんが……」

「主、愛紗は主の回りにこれ以上おなごが増えることを危惧しているんですよ」

「せ、星何を勝手なことを」

「あれ違うのかい？俺もそうだと思つてたんだけど」

「慶次まで」

「愛紗大丈夫だよ俺はみんな好きだから」

「ジ、ジ主人様……」

一刀は愛紗の肩に手を置いて目を見合つた。

「一刀いつか女に刺されるぞそんなこと言つてると」

「でも、事実なんだけど」

「お兄ちゃんは節操が無いからな！」

「がははは、英雄色を好むと言うからのー」

義弘は豪快に笑うと愛紗も董卓を救うことに首を縊に振った、その次の日の朝連合は

城に攻撃を始めると半日で城の門を開けた、そして一刀たちの予想通り袁紹をおだてずとも城の様子を見てこいと命じられた。

31話

義弘たちが洛陽の中に入ると董卓たちとかすがが町の中で待っていたが一刀は佐助がいないことに疑問を感じた。

「あれ佐助さんは?」

「あやつならもう帰ったぞい」

「孫市久しぶりだね、元気だつたかい?」

「慶次か、久しぶりだなまあ元気だな」

「上杉の久しいの」

「氏政、お前がここにいるとは思いませんでしたよ」

「うわあ神様お久しぶりです!!」

「巫殿も息災のようですね」

謙信たちと氏政たちの挨拶が終わると一刀はその中にいる小さな女の子の前にしゃ

がんだ。

「君が董卓だね」

「あんたがあの忍が言つてた北郷一刀?」

董卓が喋らず賈駆が一刀に聞いた。

「ああ、君たちを保護するために来た」

「一つ疑問があるわ、あんたあたしたちをどうする気なの」

賈駆が董卓を隠すように一刀の前に立つた。

「あたしたちは松永の奴に散々酷いことをされたわ、貴方たちが松永と同じ事をしないって言い切れる？信じられないのよ、あたしたちを匿つて貴方に何の得があるの!!」

「得なんかないよ、ただ俺は君たちを救いたいんだ、俺がこの世界にやつて來た時も桃香たちが助けてくれて俺は生きてる、その後もいろんな人達に助けてもらつた、俺はそんな人達に恥じないように生きたいんだ、それに君たちみたいな可愛い女の子は見捨てられないからね」

一刀の最後の言葉に顔を赤くする賈駆と董卓だった、だが一刀の目は嘘をついてないことが董卓には分かつた。

「詠ちゃん、この人は嘘をついてないよ」

「でも月・・・」

賈駆の言葉を遮つて今度は董卓が一刀の前に立つた。

「董卓ちゃん俺に君たちを救わせてくれ」

「はい、お願いいいたします」

「さて取り合えず董卓ちゃんと君は……」

「賈駆よ」

「董卓ちゃんと賈駆ちゃんには死んでもらわないといけない」

「なつ!? あんた今助けるつて」

「違う違う、名前を捨ててもらうんだよ、だからこれから董卓と賈駆の名前が使えなくなるから新しい名前を考えないとな」

賈駆は最初の一刀の言葉に驚いたが最後まで聞くとほつとし一刀に言った。

「簡単よあたしたちの真名をあんたに預ければいいのよ」「でもいいのか?」

董卓と賈駆は揃つて頷くと自己紹介を始めた。

「私は姓は賈 名は駆 字は文和 真名は詠」

「私は姓は董 名は卓 字は仲穎 真名は月です、あのう氏政さんたちは……」

「もちろん氏政さんたちがいいならかまわないよ」

「ならワシはお主らに付いていくかの北条氏政じや、それとこの者は風魔小太郎じや」

氏政に紹介されると今まで姿を表さなかつた風魔が突然氏政の隣に現れた。

「よろしくお願ひします氏政さん、小太郎さん」

「私は雑賀孫市お前に私を使いこなせるか見物だ」

「使いこなそなんて思つてません、これからよろしくお願ひします」

孫市は一刀の態度に少し驚いたがクスリと笑うと握手をした。

「私は鶴姫ですよろしくです一刀さん!!」

「げ、元気な子だな、よろしく鶴姫ちゃん」

そしてお互に自己紹介を済ませると早速袁紹たちに董卓たちは逃げたと報告をし最初は袁紹もイラッとしていたが洛陽の都を取り返した事もあり直ぐに董卓の事を忘れた、董卓たちが一刀たちの本陣に行くと霞たちと再会し涙を流して喜んだ、この後呂布や陳宮からも真名を預かり、董卓たちがいなくなつたことで反董卓連合は解散し一刀たちも自分の城に帰つていった。

32話

董卓連合での戦いが終わり一刀たちは自分の領地に帰り内政に励んでいた、董卓連合から一月がたつたそんなある日の深夜朱里は全ての将軍たちを起こして玉座の間に集めた。

「皆さん夜遅くにお呼びだてして申し訳ありません」

「構いませんよ軍師殿、それで用向きはなんですか？」

謙信や義弘、愛紗や星等は夜遅くの召集にもちろんとしているが桃香や鈴々や慶次等はまだ眠い目を擦っていた。

「小太郎さんに各地の動向を調査してもらつていて報告がありました、公孫賛さんの軍が攻撃を受けています」

「白蓮ちやんが!？」

今まで眠くて船を漕いでいた桃香が目を開いて驚いた。

「で、軍師殿伯桂殿はご無事なのか?」

星も今回ばかりは真剣に朱里の話を聞いていた。

「戦が始まつたのは一週間くらい前だそうです、まだ敗走したという報告はありません」

「朱里どんちなみに白蓮どんは何処に攻められるとね?」

「袁紹さんです」

「前々から袁紹どんは白蓮どんの領地にちょつかいを出しとったからの」

「しかし白蓮殿の所には立ち切り花殿も居られるはず、簡単には敗走しないでしよう」

「まあ横についてるのが最上さんだからね、立花さんが遅れをとるとは思えないね」

「桃香様どうしますか?」

「白蓮を助けにいこう!!」

すると今まで黙つていた一刀が朱里に答えた。

「白蓮は俺達が力をつけるまで面倒を見てくれた、今の俺達がいるのも白蓮達のおかげだ、俺は一人でも助けにいく」

一刀はそう言うと玉座の間を出ていこうとした。

「待たれい一刀殿!!」

出でていこうとした一刀を止めたのは氏政だった。

「氏政さん・・・」

「お主一人で行つても結果は目に見えとるぞ」

「それでも俺は」

「皆を見てみい公孫賛殿の事を諦めてる顔の者が一人でもいるかのう?」

一刀が周りを見回すと皆が一刀の方を向いて力強く頷いていた。

「そうだよご主人様氏政さんの言うとおり、私たちも白蓮ちゃんを助けたいだもん」「皆・・・」

すると廊下を駆ける足音が聞こえてきた。

「た、 大変です!!」

「どうした」

一刀は兵に駆け寄った、すると兵士は乱れた息を整えて報告した。

「大変なのです公孫贊様の城が落ちたとの報せが」

「!? 公孫贊はどうしたんだ」

「ゆ、 行方も知れません」

一刀は崩れ落ちて涙を流したすると氏政が肩を叩いた。

「一刀殿、 まだ死んだと決まつたわけではない、 お主が諦めてはならんぞい、 風魔!!」

一刀と氏政は立ち上がると氏政は小太郎を呼んだ。

「風魔よ公孫贊殿の顔は知つとるな」

小太郎は無言で首を縦に降つた。

「よし、 落ち延びているとすれば立花も一緒じゃろう、 そして生きていれば一刀殿を頼るはずじや、 風魔お主はここから公孫贊殿の所まで行つてみてくれ、 立花は目立つから見

落とす事もないじやろう、行けえい風魔!!」

氏政が命令すると小太郎は玉座の間から姿を消した。

「一刀どん大丈夫じや白蓮どんはちやんと見つかる、宗茂どんもついとるからの」

「そ、そうですね」

その日は夜も遅いこともありそこでお開きとなつた、そして小太郎が白蓮を探しに行つて一週間がたとうとしていた、執務室では桃香と一刀が政務に励んでいた。

「はあ、ご主人様、小太郎さんまだ戻つて来ないのかな?」

「もう一週間経つんだな、そろそろ帰つてきてもいいのにな」

桃香たちが話していると走つてくる足音が聞こえてきて執務室の扉が勢いよく開いた。

「大変なのだ、お兄ちゃんお姉ちゃん」

扉を開けた鈴々が飛び込んで來た。

「どうしたんだ? 鈴々」

「小太郎が、小太郎が帰つて來たのだ!!」

一刀はそう聞くと鈴々の話を最後まで聞かずに玉座の間に走つていった、玉座の間には義弘や謙信や慶次等戦国の面々や星たちが立つていた、そしてその中には宗茂と白蓮の姿もあつた。

「白蓮!! 無事だつたんだな良かつた」

「北郷心配を懸けてすまない、麗羽があんなに早く行動に出るとは思わなかつたんだ
「今は戦国の世何が起きてもおかしくはありません、油断しましたな伯珪殿」

白蓮がそう言うと星が白蓮の危機管理の無さを指摘したが、白蓮は怒るでもなく落ち込んでしまつた。

「返す言葉もないよ」

「おやおやこれは重症のようですが、だが伯珪殿無事でよかつた」

星はそう言うと白蓮を抱き締め、白蓮も星の腕の中で泣いていた。

「度々すまない北郷、ところでこの小太郎を送つてくれてありがとうございます、小太郎がいなかつたら私たちはどうなつていたか・・・」

「小太郎さん白蓮を連れてきてくれてありがとうございます」

一刀は頭を下げる

「北郷ここに来たのはお前に頼みがあるんだ」

「なんだい?」

するとどうやら鈴々に連れられて桃香が追つ付けで玉座の間に入つてきた。

「桃香!!」

「白蓮ちやーん!!」

桃香は白蓮を抱き締めると白蓮が無事だつた事を喜んだ。

「で、白蓮頼みつて言うのは」

「そうだつた」

白蓮は桃香から離れると膝をついて一刀たちに礼をした。

「北郷、桃香!! 今回は助けてもらつて本当にありがとう、不躾な願いだとは思うがお願ひしたい、私を貴殿らの軍に加えてくれないか!!」

白蓮は土下座をして頼み込むと桃香と一刀に直ぐに起こされた。

「やめてくれ白蓮、俺達は君をそんな風に迎える気はない」

「そうだよ白蓮ちゃん、白蓮ちゃんも宗茂さんも私たちのお友だちだもん助けるのは当たり前だよ」

「しかしそれでは・・・」

白蓮が言葉を続けようとすると義弘が白蓮の肩に手を置いた。

「白蓮どん、おいたちはおまはんを臣下にするつもりはなか、仲間になろううちゅうとするのよ」

義弘の暖かい言葉を聞いて白蓮は涙ながらに頷くとプツンと緊張の糸が切れたのか

氣を失つてしまつた。

「白蓮ちゃん!」

「大丈夫じや今まで張り詰めていたものが切れたんじやろう、寝とるだけよ」

義弘の言葉に全員が安堵して、そして後日白蓮が起きると皆で白蓮と宗茂が仲間になつた宴を開いた、そして何者かが遠くからその光景を水晶玉で見ていた。

「喜んでいられるのも今のうちだせいぜい楽しめ北郷!!」

33話

水晶玉に写つた一刀たちを見るものたちがいた。

「成る程北郷一刀確かに彼は面白い」

「こいつのところには殺したいやつがたくさんいるな〜」

「ああ、早く彼の断末魔を聞きたいですねえ」

「しかしまだその時ではありませんよお三方」

三人の言葉を遮るように眼鏡を掛けた男が会話に入ってきた。

「おいおいお前程度の木偶が俺に指図するのか〜」

「どちらが木偶か証明して差し上げましょか?」

眼鏡を掛けた男と三人組の一人の男が今にも戦おうとしたその時奥から一人の少年が出てきた。

「やめろお前ら、今は身内で争っている場合じゃない」

すると二人は今まで剥き出しにしていた鬪気をしまい、そして少年は水晶玉に近づき一刀の姿を見た。

「笑つてられるのも今のうちだ北郷一刀」

その空間に少年の高笑いが響いた、所代わり一刀たちは白蓮を加えて一月が経とうとしていた、そんなある日一刀の元に兵士から報告が届いた。

「え、村で怪しいやつを見つけた？」

「ええ実は村で無銭飲食で捕まえまして」

「無銭飲食？ それの何が怪しいんだ？」

「ええ実は身なりが金色の鎧を着た女性でして」

「金色の鎧……！」

一刀は金色の鎧を着た女性に心当たりがあつた、誰あろう白蓮を攻撃した袁紹である、袁紹は華林と戦いで敗走し以降は行方が知れなかつた。

「それと……」

「まだ何かあるのか」

「ええその人以外に二人の女性と変な髪をした男と大きな手枷をつけた男も一緒に捕らえたそうです」

(女性二人は顔良と文醜だろう、そして変な髪をした人は鈴々が言つてた最上つて人のことだろう、手枷をつけた人は心当たりがないな)

一刀は皆に相談しなければならないと思い玉座の間に将軍全員を集めて先ほどの兵士の報告を皆に話した。

「一刀どんおいがその村まで行つてくる」

「義弘さんが？」

「手枷をつけた男には心当たりがある」

「ならワシも行くとしよう」

「氏政さんもですか？」

手をあげたのは以外にも氏政だつた。

「北条どんおまはんが来るとは以外じやな」

「手枷のついた男きつと官兵衛殿じや、官兵衛殿には無血開城の恩義があるからの」

「成る程暗の君ですか、ならこの兵士の報告も暗の君の考えかもせんね」

「考えとはなんですか謙信さん？」

「たまたま桃香殿の領地で無銭飲食をした、暗の君らしからぬ行動です、しかし私たちの所に来るのが目的なら」

「成る程官兵衛どんならやりかねんの」

「三國のものたちは分からなかつたが一刀は自分の世界の黒田官兵衛を知つてゐるの
で少し会つてみたくもあつた。

「じゃあ俺もいきますよ、籬里も来ないか？」

「ふえ!」

「官兵衛さんが俺の知つてゐる通りの人なら軍略の天才と言われてる人だ、籬里と話が合うかもしれないよ」

「は、はいお供しましゅ、いた」

「留守を頼むよ桃香」

「まつかせーなさーい」

桃香は胸をポンと叩いて了解した、そして皆に見送られて義弘、氏政、一刀の三人は袁紹がいる村へと出発した。

34話

一刀たちが村に着くとすぐに袁紹たちが捕らえられている牢屋に案内された、義弘たちは馬を繋ぐため一刀と雛里が先に牢屋に向かつた。

「あらあなたは確か連合にいた・・・」

「北郷一刀だよ袁紹さん」

「姫忘れるなんて失礼ですよ、スミマセン北郷さん」

袁紹は捕らえられていても相変わらず横柄な態度をとりそれを顔良がフオローしていた。

「いや構わないよ貴女は顔良さんだよね？じゃあ隣にいるのは」

「あたいか？あたいは文醜だ」

「袁家の二枚看板に会えて嬉しいよ」

顔良も文醜も自分たちを褒められて少し嬉しくなった、そして次一刀が目をいつたのは枷を付けた男だった。

「お前さんが北郷一刀か？」

「ええ貴方は黒田官兵衛さんですね？」

「小生の事を誰から聞いた」

「それは」

「おいたちじや官兵衛どん」

「久しぶりですの〜官兵衛殿」

「鬼島津に北条殿か妙な取り合わせだな」

「官兵衛どん、おまはんおいたちが一刀どんの所にあるのは知つとつたんじやなかね?」

「なぜそう思うんだ?」

「おまはんがいて無錢飲食などなるわけがなか、おいたちをここに呼ぶのが目的じやなかと?」

「流石の読みだな鬼島津、だがその目的までは分からぬだろ?」

官兵衛はしてやつたりとした顔でニヤリと笑つた。

「袁紹どんに付いていけなくなつたんじやなかね?」

「うつ」

「おまはんの事じやこん世界に来ても天下の夢を追つたんじやろう」

「くううう」

「おまはんは袁紹どんなら与し易いと考えた、じやが袁紹どんはおまはんが考えとる以上のおな〜じやつた、ちゅう所じやなかね?」

官兵衛は図星を突かれてしまい顔をしかめ、その後諦めたようにあぐらをかいて義弘に答えた。

「そう、その通りだよ小生はまたしくじったのさ、凶王も刑部もないこの世界なら天下を取れると思ったんだ、そしてこの三国の戦をすべて記憶している小生が軍に入ればどんな軍だろうと勝てると思い、袁紹の所に入つたんだ、だがな今回曹操の奴に負けたのは小生のせいではないぞ」

官兵衛は立ち上がりと枷を上げて袁紹と最上を指差した。

「コイツらのせいだ」

「何ですって!? 聞き捨てなりませんわね官兵衛さん、何で私のせいなんですか!!」

「俺はちゃんと兵糧を守るように忠告したはずだなのにお前さんたちは、華林さんのようなものに策など要りませんわ、等と言つて小生の忠告を無視して勝手に突撃した、そのせいで負けたんだ!!」

官兵衛の悲痛の叫びを聞いていた一刀たちはその光景が簡単に浮かび官兵衛の事を氣の毒に思つた、その後も官兵衛と袁紹は口論を続けたが一刀がその二人を止めた。

「ケンカはやめてください!!、で官兵衛さん貴方は何で僕たちを呼んだんですか?」

「戦いに負けて投降することも考えたが霸王と呼ばれている奴は好かなくてな、それで流れ着いたこの村が劉備殿の領地だと聞いて、この惨めな暮らしからおさらばするため

にお前さんたちを呼んだのさ」

「でもおさらばするつてことは仕官するつてことですよね？貴方を知らないものが来た
ら仕官はできないんじや……」

「劉備殿の所には鬼島津がいると聞いていたからなそれに小生の格好は目立つから特徴
を伝えれば鬼島津は来ると思つたのさ」

「なるほど……」

「それだけじや腑に落ちないか？北郷一刀、ならもう一つ」

官兵衛は一刀の近くまで近寄り一刀たちにしか聞こえないように話した。

「立花と公孫賛を逃がしたのも小生だ」

「白蓮を！、なぜ逃がしたんですか」

「何、簡単なことさ小生は用心深くてな袁紹の手綱を取れなかつた時のための保険だ、立
花たちをお前さんの所に逃がしておけば俺を知るものが増えるからな、それに……」
「それに何ですか？」

「北郷一刀、お前さんの事も小生は気になつていたからだ」

「何で俺の事を？」

「鬼島津に軍神小生の世界でもこの二人に認められた男は多くない甲斐の虎か権現位だ
ろう、その二人が認めている男だ氣にならないはずがない、でだ北郷殿どうだろう小生

を使ってみる気はないか?』

官兵衛はニヤリと笑つて一刀に申し出た。

35話

「要するに官兵衛さん、貴方が仲間に入つてくれるつてことですか？」

「仲間？ うーんまあそんなようなところだな、でどうする？」

「是非お願ひします官兵衛さん」

一刀は官兵衛の目を真っ直ぐに見て手を出した、それを見た官兵衛はフツと笑つて手を出して握手をした。

「ちよつと貴女方、何を二人だけでいい空氣を作つてますの？」

「そうだよ、我輩たちもいるのだよ？」

「はあ～麗羽、最上お前さんたちはほんとに空気が読めん奴らだな」

官兵衛はため息を付いて首を振つた。

「まあ、官兵衛さんのくせに生意氣ですわ」

「そうだよ、素敵紳士たる我輩に失礼だよ白田君！」

「黒田だ!! まずは人の名前から覚えるようにしろ最上！」

袁紹と官兵衛はまたケンカを始めそれを少し離れたところから見ていた顔良が二人のケンカに割つて入つた。

「姫今そんなことしてる場合じやないですよ!!」

「まあ斗詩さんそんな事とはなんですか！」

「姫それよりここから出してもらいましょうよ～」

「顔良の言葉を聞いて袁紹は一刀に近寄ってきた。

「ねえ北郷さん貴方に私たちを助ける名譽をあげてもよろしくてよ」

「は、はあつまりはどういう事ですか？」

「まあ、そんなこといちいち説明しないと分かりませんの？つまり私たちをこの牢から
出す権利をあげてもいいと言っているんですわ！」

一刀たちはこの状況でこんなにでかい態度を取つてている袁紹をある意味凄いと思つ
た。

「でも袁紹さんは曹操に負けて軍もバラバラになつたんですよね？」

「負けてはいませんわ、あのクルクル小娘に勝ちを譲つて差し上げたんですの」「
よく言うな」

官兵衛はぼそりと聞こえるか聞こえないか位の声で突つ込んだ。

「姫そんな大きな態度じやダメですよ!!」

見かねた顔良が袁紹の隣に来て一刀に話そうとした。

「北郷さんお願ひします私と文ちゃんは何でもやります、姫にも頑張つてやらせるよう

にしますから、どうか北郷さんの軍に置いていただけませんか？」

「まあ麗羽に頼めばその分仕事が増えるだろうがな」

「あたいからも頼むよ、あたいはまだ戦つていたいんだ、それにあんた島津つて言うんだろ？」

「そうじやがおいを知つとるんか？」

「宗茂から聞いたんだあたいと似た武器を使う自分よりも強い奴がいるつて」「宗茂どんがそんなことを・・・」

「だからあたいはまだまだ戦いたいんだ斗詩と姫と一緒に・・・」

「一刀は顔良や文醜の目を見ると嘘はついておらず本心から言つているのが分かつた。「いいですよ、でも条件があります袁紹さん貴女の言葉を聞かせてください、文醜さんと顔良さんの言葉は聞きましたけどまだ貴女の言葉は聞いていませんから」

「私の言葉・・・」

「姫」

袁紹は少し下を向いて考えた、文醜と顔良も袁紹を見つめていた、そして意を決した

ように一刀の目を見た。

「北郷さん、文醜さん顔良さん共々貴方の配下に加えていただけますか？」

「ええ喜んで、官兵衛さんと同じ配下としてではなく仲間としてよろしくお願ひします
袁紹さん顔良さん文醜さん」

「姫!!」

「斗詩と猪々子はいいが、また麗羽と一緒に軍か・・・」

袁紹の言葉に文醜と顔良も笑顔になり袁紹に抱きついて喜んだ、官兵衛はまた袁紹と一緒にすることを少し嫌がっていた。

「私は姓は袁 名は紹 字は本初 真名は麗羽ですわ」

「私は姓は顔 名は良 真名は斗詩です」

「あたいは姓は文 名は醜 真名は猪々子だ」

三人は一刀たちに真名を預けると今まで何も言わなかつた最上が大声を出した。

「ちよーっと待つてくれまえ」

「貴方は最上さんでしたつけ?」

「そう我輩は羽州の狐、凄くて、賢い、狐であらる」

「はあ、それで何ですか?」

「よく聞いてくれたね南郷君」

「北郷です」

「我輩も君の軍に加えてくれないかな?」

北郷は考えていた、官兵衛は頭もよく武力もそこそこで戦力になると思つていたが、鈴々から最上は小狡い戦術をする男だと聞かされていたからである。

(でも義弘さんの世界の人だからそれなりに強いかもしれないからな)

「分かりました、最上さんもよろしくお願ひします」

「おお、流石上に立つものだね我輩の凄さが分かつてくれたかい?」

「ははは」

一刀は義光の言葉には苦笑いを浮かべたが義光は気づかずに握手をした、これにより一刀の軍に新たに5人の仲間が加わった、そして5人を牢屋から解放し一刀たちは桃香たちが待つ城まで帰つていつた、その最中義弘は官兵衛に話をかけた。

「官兵衛どん」

「ん? 何だ鬼島津」

「おまはんにしてはすんなり一刀どんに力を貸すことを決めたの、どうゆう心境の変化ね?」

「いやなに、お前さんや軍神も認める男がどの程度か調べてみたかったのは本心だよ、認めた理由も何となく分かつたしな」

「ほーう」

「確かにいい眼をしてるなだが・・・」

「だが？」

「誰でも彼でも信用しすぎだ、あれじやまだ危ういと小生は感じたね」

「まあ一刀どんは優しいからの、一刀どんの時代では戦もないようじやし」

「まあ、小生も面白いことは好きだからな向こうに帰るまでの間一刀に力を貸してやる

さ」

「ふつ、そうかね」

義弘と官兵衛はそんな話をしながら城まで帰つていった。

36話

桃香が麗羽たちを仲間にしていた頃南では孫策たちが袁術を倒し一つの勢力として名を挙げていた、そして麗羽たちを倒した華琳たちは北の国々をたいらげていた、そんなある日北の国境からボロボロになつた兵士が桃香たちの元に現れた。

「ど、どうしたんですか!?」

「りゆ、劉備様ご報告申し上げます北方の国境に突如大軍団が現れ、関所を突破し、我が国に雪崩れ込んでおります！」

「大軍団て何処の!?」

「桃香どん北方には今勢力は一つだけじゃ

「あの子、曹操が動いたんだな」

「流石は霸王の名を持つ者、北方だけではたりませんか」

「謙信殿、そんな悠長な」

愛紗が謙信に言うと続いて軍師たちが言葉を続けた。

「曹操さんは霸王として大陸を統一して己の理想、天下統一を成すためでしよう」

「あの人人が再び本腰を入れて動き出せば、大陸はまた再び戦乱の渦に巻き込まれるで

しょう

「朱里や雛里の言うとおりだ、それに霸王のところには独眼竜や槍の又左たちもいるしな、小生なら戦うなんて馬鹿なことはしないで逃げるね」

官兵衛の発言に愛紗は怒りに満ちた声をあげた。

「官兵衛殿、なら貴殿は戦わずして逃げろと申すのか？」

「此方の軍神は馬鹿なのか？」

「何!!」

「おいお前さん」

「は、はい」

「敵の兵力はどのくらいだ？」

「およそ、ご、50万くらいです」

兵士の言葉に愛紗たちは驚きを隠せなかつた。

「ご、50万!」

「はい、地平線を埋め尽くすほどの人の波が、あつという間に閥所を覆い尽くし、瞬く間に閥所を破壊しました」

「分かつたか軍神、対して此方の軍の規模は三万、義勇兵を募れば五万ぐらいにはなるだろうが、それも焼け石に水つてやつだ」

「愛紗、官兵衛殿の言うことは正しい」

「星・・・」

愛紗も兵力を聞いたときから分かつていて、兵法の基本は敵よりも多くの兵を準備する事だからである、だが愛紗は勇気を振り絞つて言つた。

「しかし、我が国の住民を守るため曹操軍を止めなくては・・・」

「確かに愛紗の言うことにも一理ある、でもまともにぶつかつても勝ち目はない、何か策を考えないと」

一刀がそう言うと全員がこの戦況をひっくり返せる策を考えていた、すると官兵衛はゆっくりと桃香たちの方に歩いてきた。

「おい桃香」

「は、はい」

「小生に策がある」

官兵衛の言葉にこの場にいる全員が驚いた。

「官兵衛さん策とはいつたい何ですか」

「それはな一刀、小生が最初に言つたとおり逃げるのさ」

「な!?、貴殿はまだそんなことを」

「まあ待ちましよう愛紗殿暗の君にも考えがあつての事でしょう」

「軍神どんの言うとおりじや、待ちんしゃい愛紗どん」

「この戦いは誰が見ても勝てんなら逃げるしかないだろう」

「なら民たちは誰が守るのだ!!」

「曹操さ」

「?」

「曹操軍の軍律は厳しいと有名だ、無益な殺生や略奪などといったことはないだろう、ただ兵がいては戦いになる兵たちさえ引き上げさせておけば戦にはならんはずだ、さあどうする桃香」

官兵衛が言うと今まで黙っていた桃香が口を開いた。

「逃げましょう」

「桃香様!?!」

「私は勝ち目の無い戦いに住民の人たちを巻き込みたくないの、戦つて勝てるなら私は私たちのやり方が正しいと信じて戦うこともできる、でも今回は違うでしょ?」

「これだけ先手先手を打たれていたら、五分の戦い持つていくことも出来ませんからね」

「それらを含めての逃げる作戦か・・・」

「一刀がそう言つて考えると、愛紗が手を震わせて悔しがりながら言つた。

「でもそれでいいんでしようか? 折角この国を発展させてきたのに・・・」

「気持ちはわかるけど、俺たちがこの国に居ることの方がこの國の人たちには迷惑になる可能性が出てきたんだ、だつたら再起を図るために逃げるっていう官兵衛さんの策は良い策だと思うよ」

「再起を図るための退場ですか」

「そういうこと」

「でも北には曹操、南には孫策が居て再起を図る場所なんてあるのかなあ？」
鈴々の言葉にみんなが黙ると朱里が沈黙を破った。

「南西に向かつたらどうでしよう」

「南西・・・荊州とかの方?」

「荊州の更に西に行くと蜀と言われる地方がありそこは劉焉さんという方が治めていましたが先頃継承問題がこじれて内戦が起きる兆候があります」

「その隙をついて入蜀するのがよろしいかと」

「でも気が進まないなあ・・・」

「桃香どん内戦が起こればより多くの血が流れる難里どんの考えなら流れる血は少ない

「じゃろう」

「それに太守の劉璋さんも評判が良くありません」

「例えば?」

「税が高く、人々の暮らしに困窮しているのにも関わらず貴族は豪勢な暮らしにうつつを抜かしているのだとか」

「なら攻めることに些^くかの躊躇も必要ありませんね」

謙信の言葉に攻めることを躊躇していた桃香が攻めることを決意して頷いた、そして一刀は兵を引き上げさせる伝令を出し関所等に備蓄してある食糧や資金などを住民に分け与えるように命令した、その姿を見て戦国から来たものたちは一刀の成長に喜んでいた。

「なあなあ官兵衛」

「何だ鈴々」

「何で民に施すのだ?」

「関所に備蓄してあるものは攻め込まれて落とされた時に相手の物になつちますが、住民に配つておけば霸王に徴収されないからだ」

「成る程^く」

鈴々は納得するとニコッと笑った、桃香と朱里は城下の長老に事情を説明しに行き、かすがと小太郎は伝令に走り、ほかの将は自分の兵をまとめて向かつた。

37話

桃香たちは逃げることを決めるに一日で逃げる準備を整え、そして今桃香たちは蜀の地へ向かって行軍を開始した、その一番後ろを義弘と官兵衛たちが行軍していた。

「しかし驚いたね」

「何がじや？」

「こんなにもあの町の住人が桃香に付いてくるとは、俺にはない人徳というやつか」

「桃香どんは不思議な魅力のある娘つ子じやからな」

そう桃香が町の長老に話をしにいくと城下町の殆どの人が家財道具を持ち桃香に付いてくることを選んだ、時は少し戻り桃香たちはどう逃げるかを城で軍議していた。

「あれだけの住民を全て連れて行く気なのか!?」

「うん官兵衛さん、私に付いてきてくれるって言つた人たちを見捨てては行けないもん」

「やれやれ人徳がありすぎるのも考え方のだな、なら誰かが殿をしなくてはならなくななるぞ」

「その役目おいが引き受ける」

「なら鬼島津が戦いに集中出来るよう、兵を動かすのは小生がやろう」

「では手前も島津殿と共に殿を」

「駄目じゃ、宗茂どんおまはんにはやつてもらいたい事がある」「やつてもらいたい事?」

「おまはんには桃香どんの護衛を頼みたい、入蜀も簡単に行くとは限らん、それに行軍するときが一番危険なのは宗茂どんおまはんもわかつとるじやろ?」

「分かりました桃香殿は手前が命に変えても守つて見せましょう」

「じいちゃんが行くなら鈴々も行くのだ!」

「じい様が行くなら恋も・・・」

「恋殿が行くなら音々も行きますぞ!!」

「危険じやぞ」

「鈴々たちはじいちゃんを助けたいのだ」

鈴々の言葉に恋も音々も頷いた、すると義弘の後ろから一刀が声をかけてきた。

「桃香が先頭に立つて行くなら俺は殿に加えてください」

「駄目だよご主人様危険だよ」

「桃香様の仰る通りでご主人様が行かずとも」

「桃香は入蜀の時にいなければならない、じゃないと向こうの民も不安だろう、そして殿も桃香と同じくらい重要な人物がいないと曹操に相手にされないとと思うんだ、戦じや役

に立てないけどこれくらいはやらせてくれ

「良い覚悟ですね一刀殿」

「一刀無事に帰つてこいよ」

「謙信さん慶次ありがとう頑張るよ」

「すまんの一刀どん、じゃが安心せいおまはんはおいたちが必ず守る」

義弘たち力強い目を見て一刀も力強く頷いた、そして今現在一刀、恋、音々、官兵衛の四人は蜀の国境近くの橋を渡つた先に陣を構え、義弘と鈴々は橋を渡らずに橋を守るよう陣取りをした、義弘たちの陣取りが終わると程なくして義弘たちが来た方角に砂塵が上がっているのが見えた。

「来たの鈴々どん」

「腕がなるのだ!!」

義弘と鈴々は遠くに見える砂塵を見て武人の血を騒がせながら敵が来るのを待つた、程なくして敵兵が義弘たちに突撃を仕掛けてきた。

「劉備を逃がすなあああ」

敵兵たちは逃走する桃香たちを追つているため士気が上がっていた、だがそんな状況でも義弘と鈴々は笑つていた。

「大戦久しぶりね、血がたぎりおる」

「鈴々もなのだ!!」

「決戦の始まりじゃ（なのだ）」

義弘と鈴々は二人で大軍を迎え撃つた、それを後方で見ていた一刀も自然と腕に力が入る。

（始まつた、義弘さん鈴々無事に戻つてきてくれ）

一刀がそう考へていると義弘たちのいる方から兵士が悲鳴が聞こえた、その時義弘と鈴々は次々と敵をなぎ倒していった。

「もつとじや、もつと強か武人ば、出て来んしやい!!」

「うりやややや、まだまだ鈴々は暴れ足りないのだ!!」

鈴々と義弘は橋を背にしながら敵兵たちをどんどん斬つていった、すると曹操の兵たちも義弘と鈴々の武勇を見て段々と弱腰になつていった。

「な、何て奴等だ、たつた一人なのに我軍の兵を次々と」

「当たり前だ」

司令官と思われる兵士が義弘たちに臆した声をあげると後ろから一人の男が現れた。

「ま、政宗様！」

「兵を引かせろお前らじやあの二人には勝てねえ、行くぞ風」

「はっ」

司令官は政宗の言葉通り兵たちを引かせた、義弘も鈴々もあえて深追いはしなかつた、すると引く兵士を搔き分けて政宗と体に傷を負つた女の子が出て来た。

「よお鬼島津、張飛」

「独眼竜か・・・」

「眼帯の兄ちゃん・・・」

「そうだ、紹介しとくぜ、こいつは俺の部隊の副長の」

「樂文謙と言います」

樂進は義弘たちにお辞儀すると政宗が腰の剣を抜いた。

「殿に鬼島津とは劉備もえげつないことを考えるもんだな」

「おいが志願したのよ」

「なるほど、さてあんたが相手だお喋りはこのくらいにでいいだろ」

「そうじやな、おいの相手はおまはんかね?」

「いや樂進が勤める、俺があんたの話をしたらどうしても戦いたいと聞かないんだ、俺の相手はお前がしてくれよ張飛」

「構わないのだ、鈴々は誰が来ようと倒すだけなのだ」

政宗は抜いた刀を鈴々に向けて威圧したが鈴々はものともせず政宗をニヤリと不適な笑みを浮かべた、その鈴々の姿を見て政宗もニヤリと笑つた、政宗と鈴々が対峙して

ると義弘と楽進も向かい合つて対峙していた。

(あん娘が魏の五大将軍の一人楽進が、なるほど良い目をしとるわ)

「島津殿ですね？」

「そうじやおいを知つとるのか?」

「汜水関の出来事は見ておりました」

「あん時か」

「その時義弘殿の勇姿を見て、隊長と小十郎様から話を聞き、いつか戦つてみたいと思つておりました」

「なるほど、なら楽進どんおいたちもこつから先は互いの武で語るとするかの」「ええ」

義弘は青嵐を構え、楽進は格闘家なので拳を構えた。

(素手か、ある男を思い出すの)

義弘は関ヶ原で対峙した家康を思い浮かべていた。

「おいの名は島津義弘次代の若きよおいを越えてみせい!!」

「我名は姓は楽 名は進 字は文謙、島津殿!! 我武總身で受けていただきます!」

「さて張飛、俺も最初からトップギアで行かせてもらうぜ!!」

政宗は抜いた刀を一度戻し今度は一度に六本の刀を抜いた。

「はあー兄ちゃんやつぱり六本の剣使うのかー、始めてみるのだ、でも六本でも十本でも
鈴々はこの蛇棒一本で充分なのだ!!」

鈴々は頭上で蛇棒を何回か振り回した後蛇棒を構えた、張飛対政宗、義弘対楽進二つ
の戦いが今幕を開ける。

38話

政宗が六爪を構えて鈴々との距離をじわりじわりと詰めてきた。

(あんな武器の構え方見たことないのだ)

(流石は三國志の中でも武で有名な張飛の名を持つだけのことはあるな、闘気が尋常じゃねえ)

「ごちやごちや考えるのは性に合わねえ、俺から行かせてもらうぜ、DEATH BIT E!!」

政宗は一瞬で鈴々との距離を詰めると左側の爪で鈴々を上に打ち上げようとしたが、鈴々は政宗が武器を振るうのと同時に後ろに下がり躲した。

「ほう初見でこれを躱すたあな、流石は張飛だな」

「速くて強いな兄ちゃん、でも鈴々は一步も引けないのだー!!」

鈴々は連續で突きを繰り出した、対して政宗は六爪で迎え撃つた。

「いい突きだ、だがな甘え」

政宗は連續突きを六爪でいなしていたが最後の突きはいなさずに鈴々の蛇棒の上に乗り政宗は蛇棒の上を走つて鈴々に近づこうとした。

「鈴々の武器の上を!? そうはさせないのだ!!」

鈴々は渾身の力で武器に乗つている政宗を上に打ち上げた。

「何て力だ俺が上に乗つてのに打ち上げるとわ、だが上に上げたのは間違いだつたな、HEEL DRAGON!!」

政宗は雷でできた球体を鈴々に向かつて飛ばした、鈴々は渾身の力を使つた後で動けずにもろに食らつてしまつた。

「ぐわあああ

鈴々は吹き飛ばされ、政宗は着地して鈴々に近づいた。

「張飛お前は良くやつたぜ、たがこれまでだな」

政宗が鈴々に間近に迫ろうとした時、倒れていた鈴々が横になりながら蛇棒を振りその蛇棒に当り少し飛ばされた。

「バカなあれを受けておいてまだこんな力が」

「り、鈴々はま、まだまだやれるのだこんな雷、じいちゃんのに比べたら・・・大したことないのだ!!」

鈴々はよろよろと立ち上がり天に向かつて吠えた、政宗はそれに驚いた。

「真田とはまた違つた力だな、だが面白え!!」

政宗は張飛の力を見てニヤリと笑うとまた六爪を構え、鈴々も蛇棒を構えた。

「お前鬼島津の雷撃をいつも食らつてんのか、なるほどな強いわけだ」

(正直危なかつたのだじいちやんと戦つてなかつたら今ので倒れて終わりだつたのだ)

「なら俺も少し本氣で行くか、はああああ」

政宗がそう言うと場の空気が代わり、にやけていた政宗の顔が代わり鈴々を睨み付けて、そして六爪を鞘に戻して一本だけ抜き刀に雷を貯めていった。

(ヤバイのが来そうなのだ、まだ練習中だけど仕方ないのだ、じいちゃん・・・後は頼むのだ)

鈴々も蛇棒を振りかぶり政宗を睨むと、蛇棒の刃の部分から炎が出て來ていた。

(俺たちの世界の技を!、張飛お前の覚悟見せてもらうぜ)

二人は互いに武器に炎と雷を溜め込み時を待つた。

「行くぜ張飛これで終わりだ、TESTAMENT!!」

「はああああ、鈴々もこれで終わりにするのだ、猛虎粉碎撃!!」

二つの武器がぶつかり合つたその瞬間爆発が起こり政宗と張飛を包み込んだ、爆発の中でも政宗と鈴々は互いに一步も引くことはなかつた。

「奥州筆頭伊達政宗、推して参る!!」

「鈴々はどんなことがあつても負けないのだあああ!!」

やがて爆発が収まるとボロボロになつた一人が真ん中に立つていた。

「へっ、張飛大した奴だぜお前は
「り、鈴々は・・・」

二人は同時に倒れた、だがその表情は二人ともスカッとした顔で笑っていた、時は少し遡り義弘と楽進の戦いが始まろうとしていた。

「行くどー楽進どん!!」

義弘は剣を振り下ろしたが楽進は横に避けた、すると義弘はニヤリと笑った。

「かかつたの、示現流瞬激、浮舟!!」

義弘は剣を振り下ろす際に剣を寝かせて振り下ろし、更に追撃で右と左に横廻ぎを放ち楽進は吹き飛ばされたが、受け身をとつて見せた。

「そんな剣の振り方があるなんて」

「がはははは、楽進どんまだまだこんなんじやおいは倒せんど」

「流石です島津殿!!」

楽進はまた拳を構え義弘も剣を構えまた硬直状態になつた。

(流石春蘭様を倒しただけの事はあるな、私ごときが勝てるか?)

「楽進どんおまはんの心に雑念が見える、何を考えとるとね?」

「流石の実力だと思つていました、春蘭様を倒した実力、戦に出て傷ばかり増やしている

自分が勝てるかと」

「それは違うぞ楽進どん」

「え？」

「おまはんの傷は民を守るためにつけたものじやろ？ならその傷を誇りに思いんしゃい」

「誇りに・・・」

「そうじや、弱い事と傷が多いことは関係なか」

「・・・ありがとうございます島津殿、心が晴れたような気がします」

「そうか、そりやよか事ね」

「それでは島津殿最後に私の全身全霊の攻撃を受けていただきます、はああああ」

樂進はそう言うと右足に気を溜め込み始めた、義弘はそれを見てニヤリと笑った。

「そうかねならおいもそれに答えられるだけの技で迎え撃つとすつど、示現流天雷!!」

義弘が叫ぶと空から雷雲が現れその雷雲が義弘の愛刀青嵐に向かつて雷を落とし刀に雷を纏つた。

(雷が島津殿の刀に!?)

「楽進どん気を散らすでなか」

「!?」

「おいの技はこれで終わりじやなか」

義弘は雷を纏わせた刀に更に自分の気を込めた、そして二人の武人が互いを見やつた。

「島津殿行きます!!、飛べ我内に燃える炎よ猛虎襲撃!!」

「鬼の太刀しかと見んしやい、示現流鬼刃!!」

（くつ、流石は島津殿すごい威力だ猛虎襲撃を放つてなかつたらやられていた）
砂塵が舞つた。

（くつ、流石は島津殿すごい威力だ猛虎襲撃を放つてなかつたらやられていた）

（くつ、流石は島津殿すごい威力だ猛虎襲撃を放つてなかつたらやられていた）
砂塵が舞つた。
（くつ、流石は島津殿すごい威力だ猛虎襲撃を放つてなかつたらやられていた）
砂塵が舞つた。
（くつ、流石は島津殿すごい威力だ猛虎襲撃を放つてなかつたらやられていた）
砂塵が舞つた。
（くつ、流石は島津殿すごい威力だ猛虎襲撃を放つてなかつたらやられていた）
砂塵が舞つた。
（くつ、流石は島津殿すごい威力だ猛虎襲撃を放つてなかつたらやられていた）
砂塵が舞つた。

「猛虎襲撃中々の技ね、じゃどんおいはその上を行かせてもらうぞー」

義弘は叫ぶと鬼刃を放つた、樂進は大技の反動で動けなかつた。

（凄い、春蘭様たちが島津殿を武人の頂点に立つと言うのも分かる、武人の頂点に立つ者に認められた、人生に悔いはない）

樂進は自分の死を覚悟して眼を閉じて笑つた、その樂進に容赦なく鬼刃が直撃し、また砂塵が舞つた、義弘は剣を担ぐと樂進の元まで歩いた、すると砂塵が晴れて見えてきたのは倒れた樂進とそれを庇おうとする二人の女性だった、一人は倒れた樂進に呼び掛け

け一人は武器を構えて義弘に向けていた。

「凧ちゃん!!起きるの凧ちゃん」

「・・・・・」

「おまはんらは誰ね?」

「うちの名は姓は李 名は典 字は曼成、此方は姓は于 名は禁 字は文則、凧が吹つ掛けた勝負やとやかくは言わへんでもこれ以上やるつもりやつたら」

すると今まで楽進を揺すつていた于禁が李典の隣に立つて武器を構えた。

「うち等が黙つてへん!!」

「そうなの!!」

すると義弘はゆつくりと李典たちの方に歩いてきて、于禁の頭にポンと手を置いた。

「大丈夫じや楽進どんは死んどりやせん」

「え?」

「おいの役目は追撃してくる曹操軍を止めること、それにこん若者は死なせるには惜しい」と義弘は李典たちの目を覗きこんだ。

「おまはんらも楽進どんとは違う意味でいい目をしとるな」

義弘がそう言うと鈴々たちが戦っていると思われる場所から爆発が起きたのが義弘

には見えた。

「ん？ 鈴々どんか、こりや急がんといかんな」

義弘は鈴々に向かおうとして李典たちに背を向けた。

「そうじや楽進どんが起きたら伝えといてくれんね」

「な、何をや」

「何時でも挑戦は受ける、またかかつてきんしやいとな」

「敵わんな、凧こりやえらい奴に目をつけられたで」

すると義弘は鈴々の元に走つて向かつて行き李典たちは氣絶した楽進を連れてその場を後にした、義弘が鈴々のいる場所に着くと倒れた政宗と鈴々がいた。

「鈴々どん随分無茶したの」

義弘は鈴々を担ぐと政宗がよろよろと立ち上がつた。

「見事に引き分けられちまつたぜ」

「独眼竜・・・」

「うまく鍛えてやれよ、そいつまだまだ強くなるぜ」

政宗はそう言うと義弘に背を向けた。

「帰るんかね？」

「ああ俺はな、まあ華琳はどうだか知らないがな」

政宗はそう言うと曹操軍の中に戻つていった、すると少しして華琳が春蘭と秋蘭を連れて鈴々を担いでいる義弘の前に立つた。

「ごきげんよう鬼島津」

「華琳どんどうとうおまはんらと戦うことになつたの、でどうするね？おいを倒して桃香どんを追いかけてみるかね？」

すると義弘は氣絶した鈴々を地面に寝かせて鈴々を守るように立ち、まさしく鬼の様な闘気を華琳たちに向けた。

「凄まじい闘気ね」

「さあ、どうするね？」

「春蘭、貴女今島津と戦つて勝てると思う？」

「・・・華琳様には申し訳ありませんがおそらく無理でしょう」

「あら、貴女にしては随分弱気ね」

「今の義弘殿の闘気は私が戦つた時以上です、華琳様の命なら喜んで戦いますが、良くて相討ち私と秋蘭はいなくなると思います」

「私の天下に必要な貴女たちをこんなところで失うわけにはいかないわ、島津今回は劉備は追わないわその代わり伝えなさい、私たちが雌雄を決する場は必ず訪れる、それまでにせいぜい強くなりなさいとね」

「分かりもした必ず伝えよう」

「それではね鬼島津、貴方とも次会うときは必ず倒させてもらうわ」

「そりや楽しみね、おいを倒す若きが出てきてくれるとは願つたり叶つたりじや
華琳は兵士たちに撤退の命令を出すと自分も馬に乗り退却していくた。

（桃香どん、もう後には引けんど）

「さて鈴々どん、待たせたの帰るとするかね」

華琳たちが撤退したのを見届けると義弘は悠然とした足取りで一刀たちの待つ陣に
帰つて行つた。

39話

義弘が鈴々を担いで橋を渡り一刀たちの陣に戻ってきて、一刀たちがぐつたりしてい
る鈴々を心配して駆け寄ってきた。

「鈴々大丈夫か!!」

「安心せい一刀どん気絶しとるだけじや」

「そうか、よかつた」

「鬼島津これをやつたのは誰だ?」

「独眼竜じや」

「結果は?」

「引き分けよつた」

(?!独眼竜と引き分けるとは、張飛の名は伊達ではないと言うことか)

「さて此方はうまくいつたど、桃香どんそつちはどげんね?」

義弘が桃香の事を心配し空を見上げた、その頃桃香たちは蜀の地益州の外れの城に着
いていた、そこでは城の指導者を民が追い出し、逃げてきた桃香の評判を聞き民たちは
桃香を城に迎え入れる準備ができていると使者が桃香に伝えに来ていた。

「何かうまいこと話が進むね」

「事前に官兵衛さんと私で桃香様の事を伝えておいたんです」

「流石は雛里と官兵衛殿だなでは桃香様、私が先行してきましょう」

「頼んだぞ星」

星が城に危険がないか先行して見に行つた、すると兵士が桃香の元にやつて來た。

「劉備様北方から砂塵が上がっています」

「ご主人様たちじゃないよね？」

「ええ、もし、ご主人様たちなら東方から砂塵が上がるはずです、どこの部隊のものでしょ
う？」

「分からんが全軍警戒しろ!! 先行する星にも伝令を出せ」

「はっ」

「桃香様はこのまま城に、私は雛里を連れて北方に軍を移動させて状況を確認してきま
す、宗茂殿桃香様を頼みましたぞ」

「承知しました、お気をつけて」

「俺も行くよ愛紗」

「ああ頼む慶次、雛里行くぞ」

「はい」

愛紗と雛里と慶次の三人は軍を率いて北方の軍を偵察に向かつた。

「みんないなくなつちやつた……」

「桃香様、大丈夫皆必ず帰つてきます、手前はそう信じています」

「宗茂さん……そうだねアタシも信じてる」

愛紗たちは北方に向かうと、部隊を展開させて謎の部隊を迎える準備をした、斥候に謎の部隊の確認をするように命令し斥候が確認から戻つてきた

「報告します、旗は馬ともう一つは見たことが無い旗です」

「北で馬と言うと涼州の馬騰さんでしようか?」

「進攻して来たと言ふことか?」

「いえそれにしては兵が少な過ぎます」

二人が考へてゐると慶次が話に入つてきた。

「とりあえず会つてみたらどうだい?ここで唸つても仕方ないだろ」

「お前な、もし戦うことになつたら」

「大丈夫確か向こうには家康がいたし、それに何があつても俺が一人を守つて見せるよ」

そう言うと慶次は馬騰の軍に歩いて向かつた、愛紗たちも仕方なしに慶次についていった、そして少し歩くと軍隊が慶次たちにも見えてきた。

「やつぱり徳川の旗もあるな」

「慶次気を抜くなよ」

二人が身構えていると部隊から一頭の馬が走ってきて慶次たちの前で止まり二人の男女が降りてきた。

「慶次！久しぶりだな」

「やつぱり家康か」

「慶次そつちの女性は？」

「関羽と申す」

「貴女が関羽殿、某は徳川家康会えて嬉しいよ」

家康は愛紗に手を差し出し握手をした。

「家康そつちの人も紹介してくれよ」

「アタシは馬超だ」

「しかしお前が益州にいるとは思わなかつたぞ」

「まあ色々あつてさ、お前こそ涼州の馬騰つて人のところにいたんじゃないのかよ？」

慶次がそう言うと家康は顔色が悪くなり、馬超が代わりにしゃべつた

「馬騰は死んだよ・・・」

「曹操の奴が攻めてきたんだ、もちろんアタシたちも戦つたが多勢に無勢だつた、そして瞬く間に涼州を平定され、母さんはアタシたちを逃がすために城で討死したんだ」

「なるほどそれで益州まで流れてきたんだな?」

「ああ、関羽殿突然こんなことを言うのは心苦しいが頼みがある糧食を少しでも良いんだ、分けてくれないか?」

「それはできない、我々も流浪の身だこれからどうなるかわからないからな」「そうか、そうだよな突然変なことを言つてすまない」

「・・・・馬超、徳川殿二人とも我主に会つてみないか?」

「あなたのところに来いつて言うのか?」

「そうなつてくれれば嬉しいが」

「・・・・安売りはしないぜ」

「お主たちのような才能あるものを安く買おうなどとは思わない」

「じゃあとりあえずあんたについて行くよ、家康もそれで良いか?」

「ワシは翠の決めしたことなら構わない、劉備殿とも話してみたいしな」

「なら部隊を連れて私たちについてきてくれ」

家康と馬超は領くと部隊に帰つて愛紗たちについていった、そして夜になり桃香は義弘たちと愛紗たちを城門の上で帰つてくるのを待つていた、すると宗茂が城門の階段を上つてきた。

「桃香様夜風は体に毒です中に入られた方がよろしいかと」

「ごめんなさい宗茂さん私ここで待つていいんです」

「分かりました、ではこれを」

手に持っていた肩掛けを宗茂は桃香に掛けた。

「宗茂さん」

「手前も桃香様と一緒にここで待ちましょう」

宗茂も隣に座り込み桃香と共に義弘たちと愛紗たちの帰りを待つた。

40話

桃香と宗茂が座っていると、誰かが城門の階段を上がつて来る音がした、桃香たちが後ろを振り返ると兵士が上がつて來た。

「劉備様ご報告申し上げます、北郷様がお戻りになりました」

桃香たちはそれを聞くと玉座の間に走つていった、桃香が玉座の間に入ると一刀たちが立つていた。

「ご主人様」

桃香は泣きながら一刀に抱き付いて、一刀の胸で泣いて喜んだ。

「ご主人様良かつたー無事だつたんだね」

「桃香心配させてごめんよ」

「ううんアタシ信じてたもん」

「島津殿たちもご無事で何よりです」

「おお宗茂どん、おまはんたちも無事で何よりじや」

「ご主人様今の状況を説明してもよろしいですか？」

「ん、朱里よろしく頼むよ」

「はい、現在私たちは益州の国境近くにあるこのお城に入城しています、入城は速やかにかつ穏やかに進みました、思つた以上に州牧である劉璋さんから人身が離れているということでしょう」

「戦うことはなかつた？」

「城内の住民が諸手をあげて歓迎してくださいました（我君もやり過ぎるところとして民に見捨てられるんだろうな）」

「なるほど」

朱里からの現状報告を受けていると玉座の間に愛紗たちが入ってきた。

「桃香様ただいま戻りました、ご主人様もおかえりなさいませ」

「ただいま約束通り帰ってきたよ」

「はい信じております」

「愛紗が信じてくれたから戻つてこれたありがとう」

「そんなことは、ご無事で何よりです」

「恋してるね！」

「いいな・・・」

潤んだ瞳を浮かべた愛紗が一刀の胸にコツンと額を当てた、一刀は愛紗の肩を抱いた、それを見て雛里は羨ましく、慶次はニヤニヤとした顔を浮かべた。

「愛紗は何処に行つてたんだ？」

「北方に現れた謎の部隊を確認してきたんです」

「それはご苦労様」

「あ、肝心な報告を忘れていました」

「接触は出来たのか？」

「ああ出来た部隊を率いていたのは馬超、世に名高い錦馬超だ」

「おおつ？錦馬超つて、その槍白銀の流星の如く、とかつて言われてるあの錦馬超？」

「ああ鈴々その錦馬超だ」

「しかし何で馬超どんが益州に居るんじや？確かに馬超どんは涼州の州牧馬騰どんの娘
じやなかつたかの？」

「馬騰は死んだ、曹操に殺されたんだ」

「お、おい翠！」

「馬超、待つていってくれと言つたはずだが」

「悪いな遅かつたからさ揉めてんのかと思つてさ」

「馬超と家康が入つてくると桃香がニコツと笑いながら馬超に近づいて手を出した。

「貴女が馬超さんだね私は劉備字は玄徳よろしく♪、貴方は確か討伐軍の時の」

「某は徳川家康という」

「アタシが馬超だよろしく」

「馬超どん、家康どんおまはんらがここにいる事の説明をしてくれんね?」

「ああ、戦いに負けて行く先も無く流浪しているところで関羽に会つたんだ」

「勝手ながら我らの仲間にならないかと勧誘しました、そのために一度我らの主に会つて欲しいと」

「そつかー・・・つてええ!? 私に!? 私に会つてどうするの?」

「どうつて自分の主に相応しいか判断するためですよ、ですから桃香様少しあはしゃんとしてください」

「う、うん」

愛紗の言葉に反応した桃香は直ぐに背筋をシャキッと伸ばした。

「今更遅いと俺は思うけどな〜」

「だな」

慶次と愛紗の言葉に桃香は落ち込んだ。

「まあそれも含めての桃香どんじや、仕方なかね」

「そうですね、俺は北郷一刀桃香たちのまとめ役みたいなものをしてるんだ、よろしく」

「・・・・あ、あ、あ」

「よろしくな一刀」

家康は一刀と討伐軍の時に打ち解けていたが馬超は顔を真つ赤にして照れていた。

「お姉様お顔真つ赤にして恥ずかしがつちゃてえゝ♪」

「蒲公英余計なことを言うな」

「蒲公英あまり翠をからかうな」

「はゝいごめんなさゝい」

「おまはんは誰じや?」

「こいつはアタシの従妹の馬岱だ」

「それでお姉様仲間になるの、ならないの?」

「先走つた事を言うな蒲公英」

「アタシもうお腹すいちゃつたよ」

「軟弱な事を言うなそれぐらいの氣合いで我慢しろ、それが西涼の武将の心意気だろ」

「馬岱ちやんお腹が空いてるんだねじやあすぐにご飯の用意するね」

「やつたー」

「蒲公英勝手なことを」

「翠どうだらう?劉備殿の所に居させてもらわなかいか?」

「家康まで」

「この先どうなるかも分からんし、劉備殿は信用できると思う」

「そうだそうだ!!」

「うーん」

「家臣というわけでなく仲間として、理想を叶えるために手を貸してほしいんだ」「理想?」

馬超は一刀の理想という言葉が引っ掛けた。

「みんな仲良く平和に暮らせる世の中を作ること、それが私たちの理想だよ」「でも力でその理想を実現するなら傍から見たら他の奴等と一緒にだろ?」

「それは重々承知のうえだ、だけど一緒に見えるからとなにもしないなんておかしいだろ?俺たちは自分のやり方が力尽くだつて理解している、でも自分たちの目指すところがみんなのためになると信じている、独りよがりかもしれないけど世の中がおかしいと思うから傍観せずに行動してる、世の中が変わらないと言っただけじゃ何も変わらないから」

「あんたらに何の得があるんだ?」

「満足だと思うよ」

「後、私は笑顔、みんなの笑顔があれば他に何にもいらないよ」

「家康どん馬超どん、おいはこの一刀どんと桃香どんの理想を現実にしてやりたいんじや、他の者も一刀どんや桃香どんに何かを感じたからこそここに居るんじやなかとね

？」

義弘がまわりを見ると戦国のものたち全員が首を縦に振った、すると馬超が笑つた。

「まさかこの乱世にそんな夢物語を思い描いていいるとはね」

「だがそんな理想をワシ等は忘れてはいかんと思う、夢物語と言つて諦めてしまつては真の民のためとはならないだろう」

「確かにそうだな」

「頼む馬超、家康あなたたち二人の力を貸してくれ」

一刀は馬超と家康に向かつて頭を下げた、馬超と家康は少し考えると二人は納得した
ように互いを見ると頷き、一刀の肩に家康が手を置いた。

「一刀頭を上げてくれ、一刀たちのその理想ワシ等にも手伝わせてくれ」

「アタシにも手伝わせてくれ」

「蒲公英も手伝う」

すると馬超たち三人はみんなに見えるように横に並んで立つた。

「アタシは姓は馬 名は超 字は孟起 真名は翠だよろしくくな」

「某は徳川家康まだまだ未熟者だがよろしくお願ひする」
「アタシは姓は馬 名は岱 真名は蒲公英よろしくね」

「そうだ劉備殿ワシの家臣を呼んでも良いかな？」

「は、はい良いですよ」

「忠勝!!」

家康が呼ぶと重い足音を響かせながら忠勝が玉座の間に入ってきた。

「おお、忠勝どん久しぶりね」

「紹介しよう、ワシの第一の絆徳川の生ける紋所、本多忠勝だよろしく頼む」

「宗茂殿」

「何ですか？ 愛紗殿」

「義弘殿と忠勝殿はやけに親しそうだが」

「当然です島津殿と本多殿は宿敵ですから、まさかあの二人の武を間近で見る日がくるとは」

「忠勝どん、まさかおまはんと一緒に戦うことになるとは、対決したことは何度もあつたが協力して戦つたことはなかつたの・・・よろしく頼むぞ忠勝どん」

「忠勝も島津殿と共に戦えて嬉しいようだな、ワシ共々よろしく頼む」

翠たちが紹介を済ませると他のものたちも自己紹介をし、その日は皆で翠たちを歓迎する宴をして盛り上がった、その夜義弘は一人城門の上で酒を飲んでいた。

「馬超どん、やはり良い日をしどつたわ、揃つてきたの、関羽　張飛　趙雲　馬超、蜀

の五虎将がそしてここは益州ちゅう事は最後の一人にも近いうちに会えそうじやな』
義弘は馬超という良い目の若者に会えた事と新たに会える武人に心を踊らせながら、
酒を飲んだ。

41話

一刀たちは益州と荊州の国境沿いにある城の一つの諷陵城に入城した、そして諷陵城の城下町の長老が桃香に謁見を申し出でてきた、長老の話では益州の内政はボロボロで国民たちは大乱に巻き込まれるのではないかと恐怖しているという、今の太守の劉璋に治められるよりは評判の良い桃香に太守になつてもらい安心して暮らしたいと言うのだ、一刀たちはその話を聞くと益州平定に乗り出し諷陵城を出撃した。

「ねえ朱里ちゃん成都までいくつの城を落とせばいいの？」

「そうですね諷陵は益州の端ですから、二十ぐらいでしようかね」

「そんなにあるの!?」

「安心しろ桃香、内乱が起きてるこの状況で小生たちを阻む城はいくつもないだろう」

「しかし官兵衛殿その中で我らを阻む城の城主はかなりの実力を持つてているということだろ」

「星の言う通りだが、だからこそ小生たちについてしてくれる可能性がある、なあ朱里」

「ええこれから向かう城にも実力のある方が治めていらっしゃいます」

「朱里どんその者の名はまさか」

「黄忠さんと仰る方です」

（五人目が揃つたか）

「その黄忠さんてどんな人なの？」

「将としての有能はさることながら仁慈に満ちて徳望に厚い方です」

「そつか仲間になつてくれるといいね」

「ええ黄忠さんの城までは後一日で着きます、夜襲に警戒しつつ進軍しましょう」

全員は黄忠の待つ城に進軍した、そして次の日桃香たちが黄忠の城の前に着くと兵士が城の前に並び野戦を始める準備をしていた、すると兵士を搔き分けてくる一人の女性が出てきた。

「私の名は黄漢升、劉備軍よ益州を荒らすつもりなら許しません、勇気ある者がいるならば私と勝負しなさい」

黄忠が高らかに名乗りをあげると官兵衛が鉄球に腰を掛け腑に落ちない顔をしていた。

「分からんな、何故黄忠は野戦をしようとしている？」

「え？ どういう事官兵衛さん」

「黄忠といえば知勇に優れた良将、この状況で野戦を仕掛けるとは思えん」

「数ではこちらが有利、なのに籠城ではなく野戦を仕掛ける、確かに暗の君の言うとおり

「腑に落ちませんね」

「桃香、一刀頼みがある」

「何ですか?」

「この戦小生に仕切らせてくれないか?」

「俺は構いませんよ」

「私も良いよ」

官兵衛はその言葉を聞くと鉄球から立ち上がった。

「軍神、北条殿!!」

「何ですか? 暗の君」

「なんじや? 官兵衛殿」

「風魔を借りたいのと軍神お前さんの剣も頼む」

「良いでしよう」

「お安いご用じや、風魔!!」

氏政が呼ぶとかすがと小太郎が官兵衛の前に現れた。

「風魔と剣、お前さんたちには黄忠の城の中に潜入してもらいたい」

「潜入だと? 謙信様の命だから従うが何故だ」

「あの黄忠が勝てない戦をしようとしているそれには理由があるはずだ、小生は町の中

にあると踏んだ、それを調べて来てくれ、」

「分かった」

「一人の忍びは音も無く消えると官兵衛は次の策を考えた。

「時間稼ぎが必要だな・・・」

「その時間稼ぎ、ワシが引き受けよう」

「権現か・・・よし任せよう」

家康は単身で黄忠軍の前に立つと高らかに名乗りを上げた。

「某の名は徳川家康、黄忠殿その勝負ワシが受けてたつ」

黄忠の言葉に家康が応えると家康も軍を搔き分けて黄忠と相対した。

「徳川家康さんと仰いましたね」

「ああ、歴史の中の偉人の黄忠殿の前に立ててワシは嬉しい」

「歴史の偉人?」

「失礼したそれはこっちの話で、さあ黄忠殿やろうか」

家康は拳を構えると黄忠も弓を構えた、その頃場内ではかすがと小太郎が潜入していた。

「潜入は簡単だつたな、だが何も変わりはなさそだが?」

かすがたちは回りを見回したが普通の賑やかな城内だつた、だが小太郎は何かを感じ

とり裏路地に入つていつた。

「お、おい風魔?! 何処に行く!、全く勝手な奴め」

かすがも裏路地に入ると小太郎は一軒の古い建物の窓から中を覗いていた、かすがもそつと覗くと中には後藤又兵衛が小さな女の子と共にいた。

「後藤だなあの小さな子は誰だ?、助けるにしても辺りを調べてからだな」

するとかすがと小太郎は回りに又兵衛の仲間がいないか探したが誰も見つからず、かすがたちは突入の機会を伺つた。

「よし、行くぞ!!」

「あーん?」

かすがは窓から煙玉を投げたすると瞬く間に建物の中は煙が充満したのを見計らうと女の子を又兵衛の手から奪つた、かすがたちは逃げようとして外に出た、すると煙で充満した建物からかすがたちの行く先に向かつて執行刃が飛んできて地面に刺さつた、そして又兵衛もすかさずかすがたちの前に現れた。

「まゝてゝよ上杉のくノ一!!」

「くつ、後藤」

「お前を殺して上杉にお前の首を届けてやる、でも安心しろ、すぐに上杉も後を追わせてやるからさ〜」

「貴様!!、貴様だけは生かしてはおけない」

かすがと小太郎は武器を構え、又兵衛も地面から執行刃を抜いて構えた、家康対黃忠、かすがと小太郎対又兵衛二つの戦いが今始まる。

42話

家康と黄忠は互いに対峙したまま膠着していた。

(徳川家康何ていう人、構えに全く隙がないわ)

(黄忠殿は弓の神曲張に匹敵すると謳われた弓の名手、迂闊には動けない、だが)
家康は膠着を破り黄忠に向かつて走り出した、だが黄忠は家康の足を見て次に家康が足を踏む場所に矢を放った。

「うわつとと」

家康は間一髪のところで矢を避けた、だが体勢を崩し転んでしまつたがすぐに体を起こした。

「流石は黄忠殿すさまじい弓の腕前だ」

「・・・貴方本気で戦つてはいませんね?」

「ワシは元から戦いはそんなに好きじゃないし、それに貴女が悲しい目をしておられるから」

「私の目?」

「そう貴女は何か迷っているそんな目だ」

黄忠は少し驚いたような顔をするとフツと家康に向かつて笑つた。

「貴方は面白いがたです、ね!!」

黄忠はそう言うと家康に向かつて突撃した、家康もそれに対抗すべく拳を構え、黄忠と家康は弓と拳でつばぜり合いをした、すると黄忠の方から家康につばぜり合いながら話かけてきた。

「家康さん貴方は悪い方には見えません、なのでお話ししますが私の娘が人質に捕られています」

「な、なんと娘さんが!?」

「ええ、娘を拐つた男の名は後藤又兵衛という男です」

「ま、又兵衛!?（そういえば島津殿が又兵衛と会つたと仰つていたな）」

「知つておられるのですか?」

「昔同じ軍で働いていました、そうですか又兵衛が」

「ええ、要求は貴方たちと戦えということでした、劉備殿はこの益州にも噂が届いており、情に厚く民の事を考えるお方だと、本当ならその理想に手を貸したいと思つていた

矢先に後藤が現れ娘を・・・」

「娘さんは何処に居られるのですか?」

「多分町の中だと思いますが」

「なら大丈夫、今ワシの仲間が町の方に潜入しているんです」

「な、何故潜入などを？」

「ワシのところの軍師が黄忠殿が一騎討ちを仕掛けたことに疑問をもちまして、その答は町の中にあるとふんで二人の潜入に長けた者を送り込んだのです、それにその二人は又兵衛よりも強い、そろそろ離れるとしましよう多分敵はワシ等の戦いを見ている、なるべく時間を稼ぎながら戦おう」

黄忠と家康は互いに領いた、すると家康が黄忠の弓を叩いて少し飛ばして距離を空けた、時は少し遡り小太郎とかすがは女の子を守りながら又兵衛と戦おうとしていた。

「お姉さん・・・」

「大丈夫だ必ずお前を母の元に帰してやる」

「お母さんのところに？」

「ああ」

「分かつた璃々もう泣かない」

「いい子だ、そこの影に隠れていろ」

璃々という女の子は涙を拭くと物影に隠れた。

「お前らさあ何そのガキ匿つてんだあ？」

「うるさい後藤！、貴様は貴様だけは生かしてはおかない」

「無理だねえお前みたいな弱い奴じやあ俺様には勝てないねえ！」
するとかすがの前に小太郎が腕を組ながら立つた。

「貴様何を」

「こいつの代わりをするつてのかあ？、まあこんなカスよりか伝説と謳われたあんたの方が殺りがいがあるだろうなあ！」

「何だと！」

かすがは挑発に乗ろうとしたが小太郎が無言でそれを邪魔した、そして小太郎は手で璃々の隠れている物影を指差した。

「ここは任せろと言うのか？」

小太郎はかすがの問いに黙つて首を縦に振つた。

「分かつた、ぬかるなよ」

かすがはそう言い残すと璃々が隠れているところまで下がつた、そして小太郎は武器の対刀衝を構え又兵衛と相対した。

「退けよ！伝説の忍、お前はお呼びじゃないんだよ！」

又兵衛は執行刃を軸にして回転し土煙を起こして姿を隠した、だが小太郎は動じるごとなく構えを崩すことはなかつた、すると土煙の中から又兵衛の声が聞こえた。
「まあこんなことで動搖なんかしないよなあ、だがこれならどうだー！」

土煙が晴れると小太郎の周りを鉄でできた檻が囲んでいて、すると檻の柱の上に又兵衛が立っていた。

「どうだしのびく、これが逆上遊下の牢獄だあく」

又兵衛は自分も檻の中に入り小太郎に向かつて執行刃で横廻ぎを当てようとした、すると小太郎は執行刃が当たるすれすれにジャンプで躰し上から又兵衛の背中を両足で踏みつけた。

「ぐぎや!?、てめえく」

踏みつけられた又兵衛は小太郎を跳ね除けようとした、だが突然小太郎の重みがなくなり又兵衛は起き上がりつて周りを見渡したが小太郎が見当たらなかつた。

「クソ、あの野郎何処に・・・」

又兵衛が言い終わる前に又兵衛の周囲には手裏剣が飛び交つていた。

「あ、やべ、ぎやああああ」

小太郎は自分の体を無数の手裏剣に変えて又兵衛を斬り刻んだ、そして檻が壊れ血まみれになつて倒れた又兵衛を背に対刀を回転させて鞘に戻し腕を組んだ小太郎が立つていた、誰もが小太郎が勝つたと思つたそのとき又兵衛が目を真つ赤にしてゆらゆらと立ち上がつた。

「ケケケ、ケケケケケケ殺す殺す殺す殺す、ぶち殺す!!」

又兵衛は執行刃を背を向けた小太郎に向かつて投げた、すると小太郎は執行刃を躱して又兵衛に攻撃しようとしたその時又兵衛はニヤリと笑っていた。

「お前も上杉と同じ間違えをしゝたゝなゝ」

小太郎が攻撃をやめて後ろを見た、すると執行刃が璃々に向かつて飛んでいた、そう最初から又兵衛は小太郎に当てる気など無く小太郎が躱すのを待つていたのだ、だが小太郎は執行刃を追いかけることはしなかつた。

「これであのガキとくノ一もおゝわゝりゝだゝ、!?

執行刃が璃々に向かつて飛んだがその刃は璃々に当たること無く空中で止まつた。

「後藤、バカな奴だなお前は私の得意分野は糸だ、私と璃々の周りには見えない糸を張り巡らせてある」

「クソー!!」

あれだけバカにしていたかすがに自分の武器をとられて地団駄を踏んでいる又兵衛を見て、かすがはフツと笑つた。

「それと後藤私に気をとられている場合じやないとと思うぞ」

「あん?」

又兵衛が前を向くと小太郎が対刀を構えて突進してきた、武器もなく体もボロボロな又兵衛にそれを躱すすべは無かつた。

「ぎやああああ

小太郎は又兵衛の体を一閃して斬り裂いた、すると又兵衛の体はいつのまにか無くなつていた。

「なつ!? 後藤何処だ、何処に消えた!!」

かすがと小太郎が気配を探すが又兵衛は何処にもいなかつた、そしてかすがと小太郎は璃々を連れてその場を後にした、その頃家康と黄忠の戦いも限界にきていた、するといきなり城門の開く音が聞こえ、一番後ろの兵士が後ろを振り向くと腕を組む小太郎とかすがに手をひかれて歩いてくる璃々の姿が見えた。

「り、璃々様!? ご無事でしたか」

「うん、このお姉さんとお兄さんに助けてもらつたの」

「そうでしたか、璃々様をお救いいただきありがとうございます」

「そんなことはいいから、早くこの子を母の元へ」

「は、はい 璃々様こちらです」

かすがは早くこの戦いを終わらせようと兵士に璃々を預けた、すると兵士は璃々を抱き抱えて黄忠の元に向かつた、戦場の中央では黄忠と家康の戦いが行われていた。
(くつ、このままでは)

(まだか、ワシも黄忠殿もそろそろ限界だ)

「お母さん!!」

「!?」

一番前まで兵士が璃々を連れていくと戦場全体に聞こえるぐらいの大きな声で璃々が黄忠を呼び二人の手が止まつた、そして黄忠が後ろを見ると璃々が元気よく手を振つていた、それを見て黄忠は涙を浮かべながら璃々の元に走つて行き膝をついて璃々を力の限り抱きしめた。

「璃々、良かつたお母さんもう会えないかと・・・」

「痛いよお母さん」

「ごめんね、でもほんとに良かつたわ」

黄忠が抱きしめた手を緩めると家康が歩いてきた。

「黄忠殿良かつたな、娘さんが戻つてきて」

「はい、家康さんたちにはなんとお礼を言つたらいいか」

「礼はいらないさ、それよりこの戦いを終らせよう」

「そう、ですわね」

家康が膝をついている黄忠に手を伸ばすと黄忠もその手をつかんで立つた、ここに二つの戦いの幕が閉じた。

43話

璃々を助けたことで戦が終わり一刀たちは黄忠の城の中に招かれていた。

「私の名は姓は黄 名は忠 字は漢升 真名は紫苑と申します、そしてこの娘は我が娘の璃々です、親子共々よろしくお願ひします」

「璃々です、よろしくお願ひします」

紫苑と璃々は全員に自己紹介をし他の者も紫苑と璃々に自己紹介をした、そしてかすがは官兵衛に城下町で会つた又兵衛の事を話した。

「な、なんと又兵衛がそんなことを・・・」

「ああ間違ひなく本人だつた、ただ消えてしまつた後の事は私には分かりかねる」

「そうかすまなかつたな軍神の剣、風魔にもすまなかつたと伝えてくれ」

「分かつた」

（又兵衛、お前はいつたい何処に向かつているんだ）

官兵衛はかつての部下の事を思つた、すると紫苑が官兵衛に近づいてきた。

「黒田官兵衛殿ですね？」

「ああ」

「家康殿が貴方が私の一騎討ちに疑問を思い、密偵を放つて璃々を助けてくれたそうでありがとうござります」

「いや、小生の方こそ元部下がとんでもないことをしてすまない」

「部下だったのですか？」

「ああ、ある男に敗れてそれを小生の軍にいるせいだと言つて出奔したんだ」

「そうだったのですか、ですが助けていただいたのは事実ありがとうございます」
紫苑が官兵衛に礼を言つていると、桃香たちが集まってきた、すると朱里が紫苑にたずねた。

「紫苑さん聞きたいことがあるんですけど」

「ええ、朱里ちゃん何なりと」

「成都に向かうなら巴郡か江陽か巴東県辺りだと思うんですけど、どこから向かえばいいですか？」

「そうね、与しやすさだけなら江陽か巴東ですけど私が桃香様に勧めるのは巴郡かしら」

「紫苑殿の言いようだと巴郡には強敵がいるようですね」

「ええ謙信さん、ですが強敵だからこそ桃香様には引き合わせたいのです、巴郡城主の厳顔とその部下魏延の二人に」

「引き合わせるちゅうことは二人とも仲間になつてくれるちゅうことかね？」

「元々懇意にしていた間柄ですから、説得の仕方によつては分かつてくれるかと思いま
す」

「説得で済むなら江陽や巴東よりも早そうだな」

「いいえ、城を落とす速さで言うなら江陽や巴東の方が早いと思います、しかし厳顔と魏
延の二人を仲間にできれば成都へ向かう道々のお城は全ての桃香様の物になるでしょ
う」

「それほど人望厚き人物なのか」

「ですが一つだけ問題があります」

「問題? どんな?」

「実力、人望申し分ない二人ですが、だからこそ頑固なところもありまして、素直に説得
に応じるかどうか、多分一戦して力を示せと言うでしょう」

「根っからの武人ちゆうわけね」

「偏屈な奴なのだ」

「でも自分なりの判断基準を持つてる奴の方が信用できるけどな」

「白蓮の言う通りだな、じゃあ紫苑の提案に乗るとしようか、説得工作はよろしく頼むね

紫苑』

紫苑は頷くと武将たちは紫苑の城で休む事にした、その頃巴郡の城壁の上では一人の

女性が紫苑の方を向いていた。

「桔梗様！」

「焰耶かどうした」

「はい、紫苑様が負けたと伝令が」

「そうか（あの未亡人殿め何を考えておるのだ）」

「いかがしましよう？」

「焰耶よ、いかなる状況になつてもワシ等のやることは変わらん、劉備軍に戦いを挑み勝てばよいのよ」

「流石です桔梗様!!」

「そうと決まれば焰耶、兵士たちに戦いの準備をさせろ」

「はい!!」

「一人は来る劉備軍との戦に心を踊らせていた、そしてその日の夜義弘はまた城壁の上で一人酒を飲んでいた、すると階段を上がつてくる音が聞こえてきた。

「誰ね？」

「紫苑です」

「おお紫苑どん、おまはんもどげんね？」

「ええ、いただきますわ」

義弘は杯をもう一つ出した、二人は月明かりの中酒を酌み交わした。

「このお酒美味しいですわね」

「嬉かね、おいが作つた酒よ」

「まあ」

「紫苑どん、おいはの家康どんと戦つたことがある」

「貴方方の世界で、ですか？」

仲間となつた紫苑と璃々には義弘達が別の世界からやつて來たことなどを話していた。

「うむ、天下分け目の大戦、おいはそこで古きに終わりを告げようと思つたんじや、全ての若者に代わりおいだけが死せりとな」

「義弘殿差し出がましい事を言いますが、ご主人様も桃香様も他の皆さんも貴方を慕つています、もちろん私も若い人に次代を譲るべきというのは否定しません、でも私たちは若い人たちの手本となるべく生きなければならぬそう思うのです、そうする事での世界に何かを遺せる、私はそう信じています」

「慕われ遣すか、戦に明け暮れたおいにはもつたひない事じや・・・何かを見つけたような気がするわ、紫苑どん感謝するど」

「いえいえお役にたてたのなら何よりですわ」

義弘は紫苑の言葉で何かをつかむと杯の酒を飲み干した、そして次の日一刀たちは巴郡に向けて進軍し昼には巴郡に着いた、巴郡の城の前には野戦を仕掛ける為に兵士が整列していた。

「やつぱり紫苑の言つた通り戦で勝たないとダメみたいだな」

「一刀どんまかせんしゃい、おいが必ず厳顔どんを連れて戻る」

「義弘さんでも相手はもう一人いるんだよね？紫苑」

「ええ、厳顔の部下の魏延が」

もう一人を誰が相手にするかと一刀が考えていると後ろから重い足音が聞こえた、一

刀が後ろを振り返ると忠勝が立っていた。

「た、忠勝さんどうしたんですか？」

「一刀、忠勝は魏延の相手は自分に任せてくれと言つていて」

家康が説明をすると義弘が忠勝に近づいてきて、豪快に笑つた。

「ガハハハ、まさかほんとに忠勝どんと共に戦場の立てるとはの、長生きはしてみるもんじや」

義弘の喜びの声に忠勝も黙つてはいるが喜んでいるのが皆には分かつた。

「まさか島津殿と本多殿、武の頂点と謳われた二人が共に戦場に立つとは、では露払いは手前が勤めましょう」

「面白そうですね、私も共に参りましよう立ち切り花殿」

すると二人の武将が謙信と宗茂の前に立つた。

「謙信はんあんたが行くならうちも行かせてもらうで」

「恋も・・・」

「分かりました、ついてきなさい霞」

「応!!」

「天下の飛将軍呂布殿と共に戦えるこの幸せ噛み締めましょう」

呂布がコクリと頷くと、ここに戦国の世で武を極めし者達、島津義弘 本多忠勝 立

花宗茂 上杉謙信、更にこの世界の武を極めし 呂布 張遼この六人が戦場に武を轟かせる。

44話

その頃嚴顔の軍は現れた劉備軍を見ていた、すると魏延が嚴顔の元に走ってきた。

「桔梗様準備整いました、いつでも行けます!!」

「そうか分かつた、焰耶よこの戦い楽しもうぞ」

「もちろんです桔梗様!!」

桔梗が振り返ると兵士達が整列をしていた。

「良いか、侵略者の劉備軍等恐れるな、お主らはこの巴郡を守る強者達、戦つて勝つそれだけ考えよ!!」

「おお!!」

桔梗が兵士を鼓舞すると兵士たちは大声と槍を上げて答え、戦が始まった。

「さあ、戦を始めましょう」

「行くでーお前ら!!、突撃やー!!」

「恋殿、手前達も参りましよう（久しぶりに血が騒ぐなあ、よし頑張ろ!!）」

「分かった・・・」

戦が始まり謙信と霞、宗茂と恋は戦場に突撃をした、その後ろを義弘と忠勝も共に進

んでいた。

「神斬!!」

「おらあ!!死にたい奴からかかって来いや!!」

謙信は目にも止まらぬ居合い斬りで兵士達を蹴散らし、霞は偃月刀を頭の上で回転させて勢いをつけて敵を斬つていった。

「伏雷 震電!!」

「鬼神一閃・・・」

宗茂は雷切の雷を開放し周囲に雷を放出した、恋は方天画戟を横に振りかぶり一閃を放つた、二人の攻撃に巴郡の兵士たちは次々に倒れていき、その四人を義弘と忠勝は見ていた。

「宗茂どん達も暴れどるの、敵の将はばらけて戦つとするようだの、忠勝どんおいたちもそろそろ行くかね?」

忠勝はこくりと頷き蒸気を吐き出した。

「なら忠勝どん、行くぞー」

義弘と忠勝は敵の将がいると思われる場所に向かうため二手に別れた、忠勝は機王を右左に振り回し敵兵をなぎ倒していく。

「そこまでだ!!」

忠勝は横から打撃を受けて止まり、攻撃を受けた方を見ると鈍碎骨を持つた魏延が立ちはだかった。

「これ以上兵たちは傷つけさせんぞ」

武器を構えた魏延を見てある女性の姿が忠勝の目には重なった、武田信玄を憎む自分の友の姿に、だが忠勝は魏延の命を懸けた目を見て武人の血が騒いでいた、そして忠勝も武器を構えた。

(こいつ強いな、武器を構えてるだけなのに溢れる闘気が尋常じやない、!?)
すると魏延は自分の手を見ると震えていた。

(私は脅えているのか?、いや違う自分よりも強い武人に会えて嬉しいんだ)
「我が名は魏文長、いざ尋常に勝負してもらうぞ!!」

魏延の名乗りに更に武人の血が騒いだ忠勝は蒸氣を吐いて名乗りに答え、二人は横に武器を振りかぶった、次の瞬間二つの武器はぶつかり合い土煙が二人を包んだ、すると土煙の中から魏延が吹き飛んだ。

「うあああああ!?(私が吹き飛ばされるとは何て力だ)」

魏延は地面に身体がぶつかって倒れた、だが鈍碎骨を支えに立ち上がり武器を構えた。

「ま、まだこの勝負武人として絶対にひけない!!」

そして忠勝は諦めずに自分に向かつてくる魏延を見て思った、自分の友に似ているこの武人を死なせてはならないと、忠勝はそう思いながら武器を構えた、忠勝が戦いを始めたとき義弘も兵を斬り伏せて進んでいた。

「どっせい!! もつとじや、もつと強か武人ば出てきんしやい!!、!?」

義弘が斬つていると、前から大きな弾丸が飛んで来た、だが義弘はそれを間一髪のところで真つ二つにした。

「貴公、強い武人を探しているのか? ならワシが相手になろう」

義弘の目の前には豪天砲を構えた厳顔が立っていた。

「おまはん嚴顔どんね?」

「ほう、ワシの名を知つておるとは、お主は何者じや?」

「これは失礼したの、おいは劉備どんと天の遣いの北郷一刀どんに仕えとる島津義弘
ちゆう者じや」

「島津? 確か汜水関を斬つたものが確かそんな名だつたがお主がそうか?」

「それはおいの事ね」

「なるほどこれは武人の血が騒ぐのお」

「やはりの」

「何がだ?」

「紫苑どんに聞いたときから、おいと同じ匂いがすると思つとつたが、やはりおまはんは
おいが思つた通りの武人よ」

「ふつ、眞の武人のお主にそう言つてもらえるとは、武人冥利に尽きるのお
二人は武器を構えた、最初に動いたのは厳顔だつた。

「はああああ

厳顔は豪天砲を義弘に向けて弾丸を五発連続で放つた。

「この時代にそん武器はめずらしかね、じゃがそげな攻撃、こうじや!!」

義弘は弾丸を躱すことはせず弾丸に向かつて走り、剣で横凧ぎの一撃を決め、弾丸を
全て切り裂いてみせた。

「なるほど噂通りの武人のようじやな、なら!!」

弾丸を発射しても無駄だと思つた厳顔は、戦い方を砲身の先に付いた剣で斬るやり方
に変えて、義弘と何度も斬り結んだ、そして何度も斬りあつたのちつばぜり合つた。

「流石に鬼と言われどる武人は違うのお

「おいもおまはんような武人と戦えて嬉しいど、血が騒ぐわ」

「嬉しい言葉よ」

「じゃが・・・」

「?」

「こんな武人はおいたちの代で終わりにしたいものよ」

「島津殿、それにはワシも同意見じや」

義弘と厳顔は話終えると同時に身体を後ろに引いて距離をとつた。

「部隊も敗走したようじやな、島津殿次で終わりにさせてもらうぞ」

「望むところよ!!」

「豪天砲最大出力!!」

「示現流 鬼刃!!」

厳顔は一つの弾丸に全ての力を込めて放つた、義弘も剣に雷撃を溜めて放つた、弾丸と斬撃はぶつかり合つたが義弘の斬撃が弾丸を斬り厳顔に当たつた、厳顔は後ろに吹つ飛びすると義弘はゆっくりと厳顔に向かつて歩きだした、目の前に来ると義弘は厳顔に向かつて手を伸ばした。

「おまはんとの勝負は楽しかつた、どうね？おいの主たちに会つてみんか？」

「そうじやなお主ほどの人物が身を寄せとる軍なら面白そうだ」

厳顔は義弘の手を掴むと義弘は厳顔を起こした。

「喜んで会わせてもらおう」

「なら行くとすつかね」

義弘は厳顔を連れて堂々と劉備軍の本陣に向かつていつた。

45話

義弘が本陣に戻つてくると宗茂や謙信は先に帰つてきていた。

「おお島津殿御戻りになりましたか、後ろに居られる方はもしかして・・・
うむ、宗茂どん軍神どん、厳顔どんじや」

「なるほど厳顔殿私は上杉謙信と申します」

「手前は立花宗茂です、以後お見知りおきを」

「・・・・・」

「厳顔殿？」

「これは失礼、義弘殿だけではなくお主等二人もたいした武人だと思つたものでな」

厳顔の言葉に宗茂は少し照れ、謙信はフツと笑つた、四人が話をしていると紫苑が義
弘の元にやつて來た。

「桔梗久しぶりね」

「紫苑か、この裏切り者め！よくもわしの前に顔を出せたな」

「その言葉は本心で言つてゐのかしら」

「ふん、こうでも言わんとわしの気持ちが收まらん」

「じゃあもう気は済んだ?」

「ああ義弘殿に完膚なきまでにやられた、もう戦う気はない降参だ」

「ありがとう桔梗」

「礼を言われることではないな、わしはわしの誇りを守るために劉備に抵抗しそして負けた、それだけの事だ、しかし言われるままに義弘殿に付いてきたが、刃向かつたわしをそのまま受け入れてくれるとは思えんのだが」

嚴顔がそう言うと紫苑の後ろから桃香と一刀が歩いてきた。

「そんなこと気にしなくていいんですよ」

「誰じやお主は?」

「私は劉玄徳、よろしくお願ひします嚴顔さん」

「このお嬢ちゃんが劉備か」

「わし等の主の一人よ」

「ではその隣に居るのが」

「俺は北郷一刀です、皆からは天の御遣いなんて呼ばれてますが気にしないで下さい、よろしくお願ひします」

「お主が大陸に降りた天の御遣いか、まさか劉備と一緒にいたとはな」「あれ知らなかつたんですか?」

「ご主人様益州は都から距離がありますから、情報に疎いの仕方ありませんわ」

「どういうことだこの大陸で今何が起つておるのだ、反董卓連合が集まつたのは聞いたが、その後のことはわしのところにまでは伝わつておらん」

「その後董卓は敗北しそれを皮切りに各地で諸侯が群雄割拠を始めた、反董卓連合に参加した諸侯の半数がすでに領地を失つてしまつてゐる、董卓を筆頭に袁紹、袁術、公孫賛それに西涼の馬騰」

「なんと袁紹と言えば三公を名門、その袁紹が滅亡したのか？」

「いや、滅亡はしてませんね袁紹は今俺たちと一緒にいますから」

「分からんなどういう事だ？」

「曹操に負けた袁紹が俺たちの領地でうろついていたのを保護したんです」

「なるほど、ところでさつきからそこで飯をかぶりついているのは誰じや？」

嚴顔が指を指した方向には恋が一心不乱に小動物のようにご飯を食べていた、そして恋は厳顔に気付き立ち上がりつてご飯を持つて近づいてきた。

「恋は呂奉先・・・よろしく」

「な、なんどこの娘が天下の飛将軍と謳われる呂布か、呂布までもが劉備殿に力を貸しているとは」

「呂布だけではないわ、董卓、袁紹、公孫賛、皆自分の領地を失つた後、劉備様の元に集

いその理想の手助けをしているわ」

「今大陸の群雄割拠は徐々に集約していつてはいる、北方を後一步で平定しかけている曹操と東方で虎視眈々と勢力を伸ばしながら機会を待つ孫策、後は『益州の田舎に籠り安穏としている劉璋のくそボウズか、しかし奴では國は守れんだろう』

「だからこそ私は益州の未来をいえ、大陸の未来を劉備様に賭けたの、あなたはどうする？」

「決まつどるわ、曹操や孫策等わしは知らん!!、だが刃を交えた義弘殿・・・いや劉備殿の心根は分かつておる、劉備殿の方が助け甲斐がありそうだ」

「じゃあ」

「うむ我が魂と剣、共に劉備殿に捧げよう」

「ありがとう厳顔さん」

「ああ、我が名は姓は嚴　名は顔　真名は桔梗よろしく頼みますぞ、主殿、御館様」「お、新しい呼び方だな」

「桔梗が自己紹介をすると桃香たちも真名を預け合つた、すると義弘たちの後ろから忠勝が重い足音を響かせて歩いてきた。

「忠勝さん!!、無事でよかつたです」

(この者も強いな、凄い威圧感だ)

厳顔は忠勝にも自己紹介をすると、忠勝は自分の後ろにいる者にも自己紹介をさせようと身体をどけて道を作った。

「おお焰耶よ、お前も無事だつたか」

「桔梗様・・・すみません負けてしまいました」

魏延は肩を落として桔梗に報告すると桔梗は魏延の肩に手を置いた。

「よい焰耶よお主が生きておつただけでいいのだ、ところで焰耶よわしは劉備殿に降ることにしたよ」

「桔梗様・・・」

「劉璋のボウズに使われるよりか、劉備殿の方がいいとわしは感じた、お主はどうする？」

「私は・・・」

魏延が考えていると桃香がニッコリ微笑みながら魏延に近づいてきた。

「魏延さんここでもし断つたとしても私たちは貴女に危害をくわえる気はないですからね」

「あ、貴女は」

「この御方こそ劉備殿じゃ」

「自己紹介が遅れました、私の名は劉備字は玄徳です」

「・・・桔梗様私は劉備様の僕になります!!」

「し、僕にはならなくていいんですけど」

魏延の勢いに桃香が圧されていると、一刀が桔梗に耳打ちした。

「ねえあの子はそう趣味があつたの?」

「いや、無いはずじやが、おおかた桃香様に一目惚れしたというところじやろう、焰耶よ
お前の主は桃香様だけじやない、こちらにおられる北郷一刀様もじや」

「ああ、よろしく」

「ハハハ、淡白な返事だな、まあいいけどさ」

「まつたく・・・」

「じゃあ魏延さん仲間になるということでいいんですか?」

すると桃香が魏延に仲間になるかを確認した。

「はい!!、自己紹介が遅れていました、姓は魏 名は延 字は文長 真名は焰耶と申します」

すると皆も焰耶と自己紹介をした、そしてその夜は桔梗の城に泊まつた、翌朝皆が目を覚ますと他の益州の城から使者がたくさん来ていた、桔梗が劉備軍に降つた事を軍師たちが喧伝したためである、そして劉備軍に反抗するのは劉璋のいる本城のみとなつ

た、そして桃香は劉璋の待つ城に進軍しようとした、その矢先に一人の兵士が伝令を伝えに来た。

「報告します劉璋が本城から逃げたとの報告が」

「ええ!」

「あのくそ坊主め民を捨てたのか?、バカだと思つとつたがここまでとは」

「そして益州の本城からは新しく劉備様に国主になつてほしいと続けて報告が来ていま
す」

「で、でもこんなことでいいのかな?」

「桃香どん益州の民はおまはんが立つことを望んだるんじや、大丈夫おいたちもおまは
んを支えるために尽力する」

桃香が周りを見ると全員が頷き、一刀が桃香の肩に手を置いた。

「大丈夫だ桃香、皆と一緒に益州をいい国にしよう」

「そうだねご主人様、皆もこれからもよろしくお願ひします」

桃香は全員に頭を下げた、ここに桃香たちは益州を平定した。

46話

一刀たちが益州を平定し早くも半年が経とうとしていた、一刀たちはその間に国を豊かにするために内政に力を入れさらには西方や南方からの侵略にも備えていた、しかし幸いな事に北方を拠点とする曹操は勢力を磐石なものにするために西方に手を伸ばし、東方を拠点とする孫策は南下政策をとっているという、この情報を聞いた軍師たちは一刀にある行動を起こすことを提案した南蛮制圧である、そして一刀たちは玉座の間で朱里と雛里と官兵衛から南征の説明を受けていた。

「曹操も孫策も自分の領地を増やすために行動している、ここは小生たちも領地を増やすべきだと思うね、そうだろ朱里」

「ええ、今この時機にどれだけ多くの領地を手に入れられるか、その一点が勝敗の分かれ道だと思います、そうなると私たちは南に行くしかありません」

「西方には精強な五湖がありますから、今この状況では五湖と戦うのは得策ではありません」

「なるほど・・・」

雛里の言葉に一刀が答えると朱里は南蛮がどういう国なのか話始めた。

「南蛮は未開の地です密林が生い茂り、虫がいっぱいいるそうです」

「うえー！蒲公英そんなとこ行きたくないよお」

「なら行かずにここで留守番していろいろ貴様の分の手柄は私がもらつておくから、お前はここで震えている」

「・・・誰があんたみたいな脳筋の胸ばつかでかいだけのバカ女に」「喧嘩売ってるのか貴様？」

「二人とも喧嘩してる場合じやないよ」

桃香が蒲公英と焰耶の喧嘩を止めると官兵衛が話を戻した。

「それに今回の南征の理由はそれだけじゃない、南蛮の連中が頻繁に南方の村々を襲つてている、このままだと面倒な事になるだろう、民の不満を解消するためにも南蛮を制圧するべきだと小生たちは提案するね」

「しかし官兵衛さん、勝ち目はあるんですの？」

「敵の情報は無いに等しい、この状況では勝ち負けを予想はできんが、小生たちの実力なら大丈夫だと思うね」

「官兵衛さんの言う通りだ俺たちは曹操や孫策の次ぐらいには強いんだから」

「一刀が武将たちを見ると皆が一刀に向かつて力強く頷いた。」

「ただ、自分たちの力を過信するのも良くない、考えられる状況を整理して、可能な限り

対応できるように万全の準備を整えて出陣しよう

「一刀どんの言う通りじゃな」

「じゃあ、朱里ちゃんと雛里ちゃん後官兵衛さんはご主人様の方針を基に出陣準備を整えてね」

「「御意」」

「愛紗ちゃんと星ちゃん後義弘さんと謙信さんは軍部のまとめ役を、蒲公英ちゃんも一緒に行くでしょ？」

「当然だよこんな筋肉女に負けられないもん」

「貴様など相手にもならんわ」

「相手にしてるのは桃香様だけってこと?、うわ、きしょっ」

「貴様は一回痛い目に会わないと分からんらしいな」

「やれるもんならやってみたら?」

「上等!!」

「二人ともそこまでにしなよ、喧嘩は南蛮兵にやつてくれよ」

「ご主人様は黙つてて!!」

「私に命令できるのは桃香様だけだ」

「桃香あ〜」

二人の圧されて一刀は桃香に喧嘩の仲裁をしてもらおうと泣きついた。

「二人ともご主人様の言うこと聞かないと桔梗さんが教育的指導してもらうよ?」

「応、いつでもやつてやるぞ」

桔梗が拳を鳴らしながら蒲公英と焰耶の前に立つと二人は途端に黙つた。

「きよ、今日のところは見逃してやる」

「それは蒲公英の台詞だよ!!」

二人はそう言うと自分達の仕事をしに向かつた。

「全くあのバカ共は毎度毎度つまらないことで揉めおつて」

「相性最悪だよねえ」

「どうか?なんだかんだ言つて相性は良いと思うぞ」

「どうして?喧嘩ばっかしてるんだよ」

「喧嘩って相手を信頼してないと出来ないと思うからかな?」

「なんともはや、お館様はお気楽ですね」

「これだけ個性の強い人たちの中にいれば、無個性の俺は気楽でいるしかないからね」

「ご主人様らしいね、そういう言い方」

「どういう事?」

「分を知つているようで知らないということですよお館様」

「??」

「ご主人様は十分個性的だよ」

「ああ、特に色事がな」

「そ、それを言われるとなにも言い返せないな・・・」

「さあ桔梗さんご主人様いじめも堪能したし、私たちも準備に向かおうか」

「うむ」

一刀は肩をガクツと落としている。出陣の準備をすると聞いた月と詠が一刀の準備の手伝いをしに来た。そして三日後一刀たちは南蛮に向かつて兵を進めた。

47 話

義弘たちは南蛮への進行を決めて準備を終えると成都の城を出て南蛮へと向かつた、そして今義弘たちは何日間かかけて南蛮にたどり着き、現在は南蛮の森の中を歩いていた。

「ここが南蛮かね、中々の暑さだのゝまあおいの住んどつた薩摩の方が暑いがな」

「ふへえゝここより暑いとこつて蒲公英なら死んじやうよゝ」

元々自分の支配していた土地が暑いところだった義弘は平気そうちだつたが蒲公英はやはり暑いのが苦手なのかだらだらと歩いていた。

「おい蒲公英兵の士氣に関わるからだらけたいなら帰れ」

「じやあ翠姉様は暑くないの？」

「暑いに決まつてるだろ、でもお前よりかは修行してゐからなこれぐらいなら我慢できるんだ」

「ただの瘦せ我慢じやん」

「何か言つたか」

「ううん、何でもない」

「皆止まれ!!」

翠と蒲公英の会話が一区切りすると同時に星が皆の足を止めた。

「どうした?」

「何かいるの? 星姉様」

「ああ気配がする、義弘殿たちは感じないか?」

「確かに誰かいるの・・・一人じやなかね?」

「ええ多数の視線を感じますね」

すると木の上から小さな女の子が落ちてきて星たちの目の前に立ちはだかった、すると草影からも小さな女の子たちが多数出て来て一刀たちを取り囲んだ。
「美以は南蛮の大王の孟獲にや、お前たちがしょくとかいう奴等にや?」

「ああ、そうだよ」

孟獲の問いに一刀が答えると孟獲は突如武器を取りだし一刀目掛けて降り下ろした、突然の事で反応できなかつた一刀は孟獲の攻撃を避けられないと思い攻撃を受けることを覚悟したが一刀と孟獲の間に家康が割つて入り、孟獲の武器を腕をクロスさせて止めてつばぜり合つた。

「孟獲殿いきなり何をなさるか、ワシ等はただ孟獲殿たちの力を貸してもらおうと、蜀の地から来ただけですぞ」

「信用できないにや、さつきお前等の仲間が美以たちの村から南蛮の秘薬を盗んでいつたのにや」

「それは断じてワシ等の仲間ではない、誓つても良いだから孟獲殿冷静になつてくれ」

「あの剣を持った白と黒の奴は言つてたにや、これから来る私の仲間によろしくつて」

「白と黒の奴？」

「そうにや白い着物と黒い着物を半分半分に着てる奴だつたにや」

「久秀か!？」

他の仲間たちも久秀を知つているとものはすぐに思い浮かんだ。

「孟獲殿そいつの事は知つているが、ワシ等の仲間ではない」

「にや!?にやんと、ほんとかにや?」

孟獲は驚くと武器を家康から離し後ろに下がつて距離をとつた。

「お前の話・・・ほんとかにや?」

「ワシは嘘は言わない、その者は恐らく松永久秀という者だ、孟獲殿詳しい話を教えてはくれないか?」

「そいつが美以たちの村から盗んでいったのは死者をも甦らせると言われる薬にや、ほんとかどうか美以たちは使つた事がないから死者が甦るかは分からにやいが・・・」

「死者をも甦らせる薬、何故そんなものを久秀が・・・」

皆が一斉に考えると慶次がその沈黙を破り言葉をきりだした。

「もしかして魔王さんを甦らせるつもりだつたりしてな」
「慶次、冗談でもそんな事を言うもんじやないぞ」

「でも皆も薄々そう思つてるだろ?」

そう他の戦国の世界から来たものは久秀の企みに心当たりがあつた、久秀は乱世が深まる事を望んでおり戦国の世でも秀吉を霸王に堕としたりして乱世を深めていた、そして今回は戦国の世界を支配するために天下統一を目論み、そして天下統一歩手前で明智光秀に殺された魔王、織田信長を事を甦らせれば、この三国の世界は今までにない乱世がやつて来るこれが久秀の狙いだらうと、だがそれは戦国の世から来たものたちには一番考えたくないことでもあつた。

「まあ慶次どんの言うことも一理ある、信長どんが復活すればこん世界もさらに乱れるじやろう、久秀どんはそれを狙つとるのかもしけんな」

「あの〜信長さんてそんなに怖い人だつたんですか?」

一刀は蜀の全員が聞きたかつた事を代わりに質問した、そして返された言葉是一刀たち全員が驚愕するものだつた、家康たちは今までの信長のやつて來たことを全て一刀たちに伝え、そして全て聞き終わると愛紗が言葉を発した。

「何という事だ、そんな人物がこの世界に現れるというのか・・・」

「まあ決まつたことではないが可能性はあるだろうな」

家康の返答に全員が俯いてしまつた、すると義弘は全員に聞こえるように大きな声で一喝した。

「渴!!!、ここで嘆いとつても始まらん皆のもん安心せい、信長どんが例え復活したとしてもおいが斬る、若者の未来そう簡単には奪わせたりせん」

義弘がそう言うと次に家康も拳を前に出して言つた。

「無論だワシもこの世界の為に戦う、この世界に来て多くの絆と出会えた、例え信長公といえどもこの絆は断たせん」

義弘と家康の言葉に全員が気持ちを改め信長を倒そうと決意した、すると一刀が孟獲に近づいた。

「孟獲ちやんどうだろう?、盗まれたものを取り返すためにも俺たちと一緒に来ないかい?」

「お前たちと一緒に行けば取り返せるのにや?」

「俺たちも取り返す為に頑張るから君の力も貸してくれ」

「分かつたにや、ミケ、トラ、シャム!!」

孟獲が呼ぶと三人の南蛮の兵が前に出て来た、そして孟獲の後ろに立つた。

「美以は南蛮大王の孟獲真名は美以にや、後ろにいるのは部下のミケとトラとシャム

にや

「俺は北郷一刀、美以これからよろしくな
「よろしくなのにや」

「「なのにやー」」

美以と一刀は固く握手をした、これにより新しく美以、ミケ、トラ、シャムが仲間となつた、美以との握手を済ませると一刀は義弘と謙信に近づいた。

「義弘さん、謙信さん、お願ひがあります」

「改まつてどげんしたね？ 一刀どん」

「何でしよう 一刀殿」

「俺に剣を教えて下さい」

一刀は土下座をして二人に頼んだ、一刀の言葉には全員が驚いた、普通弟子入りは一人に絞らなければならぬところを一刀は義弘と謙信の二人に頼んだからである。

「失礼な事を言つてるのは分かつています、でも俺はどちらか一人なんて出来ない二人に剣を学びたいんです、どうかお願ひします!!」

義弘と謙信は互いに顔を見合わせるとフツと笑い合つて義弘は一刀の肩に手を置いた。

「一刀どん顔を上げんね、おまほんの気持ちはよう分かる、軍神どんとおいは互いに認め

合った仲よ、おいもおまはんの立場なら同じ事をするじやろう」

「じや、じやあ」

「良かよ一刀どんおまはんに示現の太刀教えちやる」

「私も神速の剣をお教えしましょう」

「ありがとうございます!!」

義弘たちの言葉に感謝するともう一度頭を下げた、ここに天の遣いが鬼と軍神の弟子となつた瞬間である。

48話

美以たちを仲間に加えて一刀たちは南蛮から成都まで戻つてきていた、そして美以たちが来て半年ばかり過ぎた頃成都に激震が走つた、曹魏と孫吳の激突である、前々から両国は小競り合いをしていたがそれがとうとう本格化し戦にまで発展してしまったのだ、朱里はその事聞くと将軍たちを大広間に集めて軍議を始めた。

「どうどう魏と呉の争いが戦を起こすまでになつてしましました」

「朱里二国の状況はどんな感じなんだ?」

「はい曹魏の兵力はおよそ百万、対する孫吳の兵力は四十万たらず兵力差は歴然かと」

「なら俺たちの取る行動は二つあるな、このまま魏と呉の戦を見物したまゝじや、呉がやられば次に曹操は俺たちに牙を向ける、俺たちの兵力は三万、勝ち目は恐らくないだろう、なら取る手は魏に服従するか、」

一刀がそこまで言うと今まで黙つていた義弘が声をあげた。

「呉と同盟して魏を倒すか、じやな? 一刀どん」

義弘の言葉に一刀はコクリと頷いた。

「小生は魏に与した方が利点があると思うがね、朱里はどう思う?」

「確かに義弘さんたちの事もあるでしようから魏に降つてもそれなりの待遇はしてくれると思いますが、私の思惑は違います」

「ほう、天下の名軍師諸葛孔明殿はどんな案を考えているのか、小生にもご教授願いたいね」

「私の考える案は、今この大陸には勢力が三つあります、曹操さんの治める魏、孫策さんの治める吳、そして桃香様とご主人様が治める蜀、そしてこの三国が小さな勢力を倒しつたので残すはこの三国だけとなりました、そしてどの君主も国を治める器があります、よつて私は三国が手をとり三国県立をすることを提案します」

(やはりそうくるのか、小生の知る歴史では三国県立は出来ずじまいだったが、この世界なら出来るかもしねないな)

「三国が手を取り合つて国を納めるか・・・いい案じやないか朱里」

「ほんとだよ朱里ちゃん、私もその方がいいな」

一刀と桃香が乗り気などころを見て官兵衛はフツと笑いながら席を立つた。

「あ、か、官兵衛さん！」

「流石は朱里だな、なら小生もその策に乗るとしようかね」

「は、はい!!」

官兵衛が乗り気になつてくれたことが嬉しくなり朱里は大きく返事をした。

「なら一刀小生たちのやることは一つだ、今の曹操の力は均衡を保つには大きすぎる、だから」

「呉と同盟を組み魏の力を削るのですね？ 暗の君殿」

「軍神よ、小生の台詞を横取りしないでもらいたいね」

「これは失礼しました、なら呉と同盟組むためにもここは援軍を出すべきでしょう」

「謙信さんの言う通りですね、なら人選は朱里、任せていい？」

「はい、同盟を組むならこちらの誠意を見せるためにも桃香様かご主人様のどちらかに
出向いてもらわねばなりません」

「なら俺が行くよ、この時のために謙信さんや義弘さんに鍛えてもらつたんだし」

「一刀がそう言いつと義弘と謙信が揃つて立ち上がり一刀の隣にやつて來た。

「なら弟子の成長を見るためにもおいも一緒に行こう」

「向こうには甲斐の虎も居ます、私も共に参りましょう」

「なら後は愛紗さんと」

「ワシも連れていくつてくれないか？ 朱里」

「家康さん、分かりましたなら、ご主人様、家康さん、義弘さん、謙信さん、愛紗さん、

後私も一緒に行きます、桃香様たちは戦の準備をお願いします」

全員が領き、朱里は難里と官兵衛に後の準備を任せ、その会議の次の日、一刀たちは

呉の救援をするため蜀の城を出発した。

49話

一刀たちが呉に向けて出発してから五日が過ぎた頃、呉の本陣では孫策と周瑜と孫權が佐助と周泰の話を聞きながら、天幕の中で魏への対策を練っていた。

「あのお嬢ちゃんには参ったわね、まさかここまで大きくなるなんて」

「愚痴を言つても始まらないぞ雪蓮、明命 佐助、敵はどの当たりまで進行してきてる？」

「江凌の半分以上のお城は敵の手に落ちてしまつてます」

「真田の旦那や祭さんたちも頑張つてるけど圧されてるね」

「どうしたもんかしらね？」

「どうしたものこうしたもありません、姉様私が祭たちの援軍に行きます、明命ついて来て」

「は、はい」

「出でいこうとする孫權を孫策が肩に手を置いて引き留めた。

「待ちなさい蓮華、少し落ち着きなさい」

「これが落ち着いていられると思いますか！」

「落ち着け蓮華!!」

雪蓮は先程よりも強い口調で蓮華を引き留めると蓮華も観念したのか元の席に座つた。

「蓮華、心配なのは分かるわ、私も皆の事が心配よでもこんな時こそ落ち着かなくてはダメよ、貴女は私の後を継いで呉の王になるのだから」

「も、申し訳ありません姉様」

孫策たちが頭を抱えていると一人の兵士が走つて天幕の中へ入つてきた。

「なんだどうした!!」

「そ、それが蜀から使者の方々がいらっしゃいました」

「蜀の?」

(やはり来たか流石は諸葛亮、バカではないようだな)

孫策が周瑜がニヤリとした顔を見ると、孫策は一刀たちを天幕の中に入れだ。

「ここにちは孫策さん」

「あらずいぶん大人數で來たわね、なんの用かしら?」

「俺たちが何の用で來たかも分からぬなら今すぐ帰りますよ?」

「あらずいぶん挑戦的ね、それにしても貴方前に会つた時は大したことなかつたけど、今は見違えるほどに強くなつてるわね?」

「ありがとうございます、師匠がいいんですよ」

一刀の後ろで義弘と謙信が笑つてゐるのを見て、孫策は納得したように笑つた。

(あの二人に教えられたなら強くなるわね)

「話を戻しますよう孫策さん俺たちは」

「同盟の提案をするために来たのであろう?」

その声は天幕のそとから聞こえた、すると天幕の中に声を出した張本人の武田信玄が入ってきた。

「信玄公?! 貴方は江東の城に居たのではなかつたのですか?」

「うむまあ落ち着け冥琳、佐助の分身より苦戦してると報せを聞いてな、穩が気をきかせてワシを救援に回してくれたのじや」

「そうでしたか」

「それより、小僧良い顔つきになりおつたな、謙信と鬼島津がお主を変えたか」

信玄は一刀の成長を感じ大声で笑つた、すると周瑜が話を戻すために咳払いをした。

「信玄公話はそれぐらいにしてもらつていいですか? 事は急を要するので」

「そうじやなすまんかった」

「では改めて聞くが、お前たちは共に魏を倒すために同盟に来てくれたのだな?」

「そうだ」

一刀の言葉を聞いて今度は孫策が口を開いた。

「同盟の事に関してはこちらとしても願つたりよ、手を組むとしましよう」

「よろしくお願ひします、孫策さん」

「一刀と孫策はお互に手を出して握手をした、すると信玄が一刀に近づいてきた。

「同盟の件は終わつたな、なら小僧ワシと一つ勝負をせんか?」

「勝負ですか?」

「今のお主がどれ程出来るか、同盟を組むにあたつては知つておきたいのじや」

「あ!? 信玄公ズルい、アタシが勝負しようと思つてたのに〜」

「雪蓮よ、今回は悪いがお前に譲るわけにはいかん」

「分かりました、よろしくお願ひします!!」

「おいの弟子と甲斐の虎が戦うとは、面白か!!、おいが立ち会うとするかの〜」

孫策はブーブー言いながら信玄の気迫に渋々退いた、一刀は信玄に頭を下げて勝負を受けて立ち立会人は義弘が務めることになつた、すると天幕の外からこちらに向かつてくる足音が聞こえてきた。

「おい、雪蓮救援に行くなら早くしないか・・・家康?」

「み、三成・・・」

天幕の中に入ってきたのは家康のよく知つてゐる男、石田三成であつた、三成と家康

は昔豊臣軍にいた頃からの戦友であつた、しかし家康が豊臣秀吉を討つた事で秀吉を崇拜していた三成との仲は壞れ、二人は東軍と西軍に分かれ天下分け目の戦を起こすまでに至つた、だが勝敗は着かず義弘や諸公の働きで二人とも死ぬことは無かつたがその溝も埋まることは無かつた。

「久しぶりだな、三成」

「家康、やはり貴様もこの世界に来ていたのか」

「ああ・・・」

「私はまだ貴様を許してはいない、恐らく一生許しはしないだろう、貴様が秀吉様を討つたのは事実だ」

「そうか」

「だがここに来て色々な者たちに出会つた、そして貴様と会わなかつた事で考える時間も充分にあつた、そして私なりの答えを出した、家康!! 私と勝負をしてもらおう」

「分かつた、ワシもお前との勝負を断るつもりはない」

「ならその勝負立会人は私がやるわ」

「雪蓮?・・・ふん物好きな女だ、来い家康!!」

三成と家康は孫策立ち会いのもと関ヶ原でも着かなかつた決着を今着けようとしている。

「一刀ワシ等も行くぞ」

「はい」

そしてまた信玄も一刀の覚悟を見極めんと武器を手に取つた、二つの戦いが幕を開けようとしていた。

50話

信玄と三成は一刀と家康を連れて外に出る、二組は別々の方に向かって歩き出した、それを見ていた他の者は義弘 謙信 朱里 愛紗 周瑜 佐助は一刀に付いて行き、孫策 孫權 周泰は三成に付いていった。

三成と家康は陣地の外に出ると互いに向かい合い武器を構えた、その二人の間に孫策が立会人として立ち、他の者は少し離れた場所から見守った。

「二人とも用意はいいわね？」

「ああ」

「いつでも」

「いざ尋常に、始め!!」

孫策の声と同時に二人は動き出した、そして互いに力の限り武器をぶつけ合った、だが二人の戦いは静かなもので、聞こえるのは武器と武器がぶつかり合う鋼の音のみ、見ている者も三成も家康もただひたすら黙つて戦っていた。

（流石は三成、この世界でも鍛練を続けていたのだな）

「・・・・・家康」

その沈黙を壊したのは意外な事に三成だつた、三成は武器を振るいながら話を続けた。

「先に言つておく、私はこの戦いでお前の命を取ろうとは思つていない」
「!?

家康は驚きのあまり力を込めて三成に拳を入れてしまつた、だが三成も剣で防御したので三成が吹き飛ばされ強引に距離を取る形となつた、すると三成は武器をしまい話を続けた。

「この世界に来て私は孫策に拾われた、拾われた時は私は貴様を殺すことしか考えていなかつた、だがいくら探しても貴様は見つからず、刑部もいないこの世界に段々嫌気がさしてきていた、そんな時左近がこの世界に現れ私と一緒に孫策に世話になることになつた、左近はすぐに孫策と気が合つた、そして左近から聞いたのだろう、孫策は私が憎しみを抱いて生きていることを知ると、私のところに来て言つた」

（三成貴方はいつまで後ろを向いて生きてるつもりなの?）

（何?、貴様に私の苦しみの何がわかる!!）

（分かるわ、私も貴方と同じく大切な人を殺されたことがあるから、私は母様を殺されてちょうど貴方と同じ感じになつて死のうとも考えたわ、でもね親友の冥琳が私に言つたの、母をして目標となる背中を失つた気持ちは分かるわ、でも今の孫吳の将兵

や民たちは貴女に付いてきているの、そして時代を担う蓮華も貴女の背中を目標にしている、そんな貴女がこんな情けない姿を見せ続けていていいの？辛いときは私がそばにいる、だから天にいる孫堅様に見せてあげなさい孫伯符の生き様をな、てね）

（私は貴様とは違う、そんな事を言つてくれる友などいない）

（あらでも左近も居るし、貴方の主君を殺した家康つて子も昔友だつたのでしょうか？）
（左近は友ではない私の部下だ、それに家康の事にしても昔の話だ、今は憎むべき私の仇でしかない）

（あらそんなこと言つちゃつて左近が傷つくわよ、でも私は一つだけ言つておくわ、もじ家康つて子と会えたらまず話をしてみたらどうかしら？、今の貴方には見えないものが見えるかもしだれないわよ）

「そして私は今、お前と私なりの語りかけをしている」

三成は剣の柄を家康に向けた、すると家康は覚悟を決めたように拳を握りしめ三成と相対した、家康は嬉しかつた、本当は彼も三成と語り合いたいと心の底から思つていたから。

「分かった三成、存分に語り合おう!!」

二人の目には互いの姿しか見えていなかつた、そして次の瞬間三成と家康は戦いを開いた、そして三成と家康は語り合う戦いを始めた。

その頃一刀たちは三成とは逆の陣の外に出てきていた、すると謙信が目の前に歩いている義弘に話しかけてきた。

「よろしかつたのですか？」

「何がじや？」

「凶王三成殿に付いていかなくとも」

「ああ、三成どんの目を見たからの、あの目ならもうおいは必要ないじやろ」

「なるほど愚問でしたね」

「鬼島津!! こちらは準備出来たぞ」

「おう、では一刀どんも準備は大丈夫じやな?」

「はい」

一刀は腰に指した日本刀を構えて居合いの体勢をとつた、そして信玄も戦斧を構えた。

(ほう、謙信が教えるだけはあるな、あやつと構えが瓜二つよ、鬼島津はここに何を取り入れさせたのか、楽しみじやな)

(俺がどこまで通用するか全力で試すいい機会だ)

義弘は一人を見ると少し下がり二人の真ん中に立つた。

「なら二人とも行くぞ、いざ尋常に勝負!!」

「ワシから行くぞ、疾きこと風の如し!!」

信玄は斧を振りかぶると自分の体を回転させて独楽のようにして一刀に向かって来た。

(凄い風だ、信玄の方に引き寄せられる、まるで巨大な独楽だな、なら弱点は)

一刀はひらりと信玄の真上に飛び、信玄の真上に来ると回っている信玄目掛けて居合い抜きを放つた、すると信玄は突然回転を止めて斧を上に構えて防御した。

(? 今のガードするなんて)

「甘いわ!! 動かざること山の如し」

信玄は一刀の攻撃を防ぐと負けじと一刀の着地点の手前に斧を振り下ろし着地点の地面を隆起させた、流石の一刀も躊躇せずにダメージを受けて吹き飛ばされた、だが一刀もすかさず受け身を取つて地面への衝突だけは避けた。

「どつさに受け身をとるとはなやはりやるようになつたの」

「まさか今のは防御したうえに反撃してくるとは思いませんでしたよ」

「ワシもまだまだ若い者に越されるわけにはゆかぬからな」

「そんな一人を見て呉の人間は一刀の変わりように驚きを隠せなかつた。」

「あれほどの武を持っていたとは、同盟相手には申し分ないな」

「お館様にあれだけやらせるとはやるね」

そんな話が戦っている二人に聞こえる訳もなく、信玄は一刀の成長を感じて楽しんでいた。

「一刀よくここまで強うなつた、じやが勝負はここまでのようにじや」

「へ？」

信玄は陣のほうから走つてくる兵士が見えると一刀に知らせるように指を指した。
「申し上げます、また江陵の城が落とされたとの報告が」

「何!? 信玄公もう一刻の猶予もありません」

「うむ、では一刀続きはまた今度じや、今は幸村たちを救うぞ」

「はい!!」

一刀たちは勝負を中断し陣の中に走つていった。

そしてその知らせは孫策たちにも届いていた、すると孫策が兵士の言葉を聞くために少し目を離した隙に三成たちの方からから大きな音がした、孫策が急いで見るとそこには倒れた三成と家康の姿があつた。

「くつ、引き分けか」

「ああ、そうだな」

二人は起き上がりはしたが立つまでは出来ず座つたままだつた。

「秀吉様を討つたのは貴様ではないな」

「な、何を!?

「今の戦いで分かつた、貴様は確かに秀吉様を討ち行つた、だが殺したのは貴様ではない、違うか?」

「……そうだ、殺したのは松永久秀だ、だが秀吉殿の死を利用し天下を取ろうとしたのもまた事実だ」

「ああ、その事に關して私はお前を許さない、決着は日ノ本に帰つてから必ずつける! だがその前に松永久秀、奴を必ず斬滅してやる貴様も手伝え家康」

「ああ・・・分かつた」

「二人とも氣はすんだかしら?」

「ふん」

「ああ立ち会つてもらつてすまないな孫策殿、そういうえばさつき兵士が来ていたようだが何かあつたのか?」

「ええそろそろ江陵が限界みたいな、今信玄公の方にも伝令が行つてるわ、一度天幕に戻りましょう」

孫策たちは天幕に戻るために陣の中に入つていつた、そして立ち上がりうとした家康に三成の手が差し出された。

「早く立て家康」

「すまない」

宿敵と言われた友との一時の和解に、家康の目から一筋の涙が流がれた、そして家康たちも孫策たちに付いて陣の中に戻つて行つた。

51話

天幕の中には三成たちと一刀たちが集まつた。

「じゃあ信玄公も同盟に賛成なのね？」

「うむ、一刀の実力も申し分なかつたからな」

「するゝい一刀今度私とも戦いましよ♪」

「あ、ああ良いけどこの戦が終わつてからね」

孫策が一刀にじやれようと近づこうとすると周瑜の咳がそれを止めた。

「雪蓮そんなことより江陵の話を始めたいのだが!!」

「はゝい」

そして周瑜はブー垂れた雪蓮を少し睨んで江陵の地図を広げた。

「今我軍は江陵の端に追いやられてしまいました、ここからでは船を使うしか大軍を撤退させる方法はない」

周瑜の言葉に朱里が地図を覗き混むと言葉を続けた。

「なら周瑜さん私に良い策があります」

「ほう、聞こう」

「曹操軍の後方から私たちが横槍を入れます、そうすれば後方の部隊は蜀と呉が手を結んだと曹操さんに伝えるでしょう、曹操さんの性格からしてそこから呉軍への深追いはしないと思います」

「そのうちに私たちが幸村たちを船で回収するというわけだな?」

「はい、その後に両国とも体制を整えて曹操さんと決戦をしたいのですが、何処かありますか?、周瑜さん」

「大軍を布陣できるとなると赤壁辺りか」

「ならそこにしましょう」

「待つた!!」

周瑜と朱里があらかたの策を練り終わると義弘が言葉を挟んだ。

「忍、おまはんどうやつてここまで来たとね?」

「俺様は船頭に化けて川を下つた、そうすれば一日でいつたり来たりできるからな」

「なら朱里どんその策にもう一つ追加したいことがある」

「なんですか義弘さん?」

「おいが忍に手引きしてもらつて江陵に入り、そして殿を受け持つそうすればより早く

曹操どんにおいたちが手を組んでいることが分かるはずじや」

「でもそれでは攻めかかる魏軍を義弘さん一人で相手をしなくてはならなくなります、

それはあまりにも危険です」

「じゃが朱里どんの策だけでは必ず若虎たちを救う保証が無か、じゃがおいの策と合わ
せれば確実になるはずよ」

確かに義弘の言う通り後ろからつづけば一気に幸村たちを潰すという強行策に曹操
軍がでないとも限らない、やはり誰かが殿の役目をかつてでなければならなかつた、し
かしいくら鬼島津と恐れられた義弘でも曹操軍の大軍を一人で相手にさせることに皆
が不安がつっていた、その時一人の将が前に出た。

「朱里殿、島津殿お一人では心配ならば私が一緒に参りましよう」

「謙信さん!?、謙信さんまでそんなことを悪くすれば命も危ないのに」

「一つ手を間違えれば死ぬ、戦とはそういうものですよ朱里殿、それに・・・負けるつも
りは毛頭ありません」

謙信が最後の言葉を言うと剣を自分の前に出すとすると天幕の中にもの凄い冷気が
渦巻き、皆が謙信の鬪気に圧された。

「がははは、軍神どんとの共闘とは面白かね」

「ええ私も鬼島津殿との共闘を楽しみましょう」

「分かりました、もう何も言いません、ですがお二人とも必ず生きて戻ってきてください
い、佐助さん手引きの方をお願いします」

「了解」

「待てえい!!」

朱里は説得は無駄だと思い、義弘たちの策に乗ることにし、佐助は準備のために天幕を出ようとしたその時信玄が佐助を止めた。

「お館様何か?」

「佐助、その手引きの人数もう一人増やしておけ、ワシも行く!!」

その場にいた義弘と謙信を除く全員がその言葉に驚いた。

「し、信玄公本気ですか!? 貴方までいなくなつてしまつたら」

「冥琳よ情けないことを言うでない、ワシ等は元々異界から来たものいつかは元の世界に帰らねばならぬ、お主らならワシが居らずとも大丈夫な筈じや、それにワシもこんなところで死ぬつもりはない」

そう言うと信玄も鬪氣を解放した、すると天幕の中を暑い熱気が包んだ、冥琳はその鬪氣を感じるとそれ以上の言葉を言うのをやめ、そして信玄と謙信は義弘の両隣に立つた。

「軍神どんに甲斐の虎、まさかおまはんたちとともに戦場に立てるとは、まつこと嬉か

!!」

「甲斐の虎、鬼島津殿との共闘、毘沙門天の神も刮目するでしょう」

「まさかお主らとともにに戦うとはな、久しぶりに血が騒ぐわ」

皆が三人の尋常ならざる闘気に息を飲んだ、そして今鬼島津 軍神 甲斐の虎、三人の共闘が今ここになつた、皆が息を飲んでいる中で闘志を燃やしている男がいた、徳川家康である。

「間近でこの三人の闘いを見れないのが残念だな、だがワシもやらねばならぬことがある朱里、後方の曹操軍の撫亂はワシがやらせてもらう」

「分かりましたでは愛紗さん、家康さんと一緒に行つて下さい」

「心得た!!」

「では皆さん必ず生きて帰つて来て下さい」

「「「応つ!!」」」

こうして魏軍に攻め込まれている幸村たちを救うため家康の後方の撫亂、義弘 謙信の殿の二正面作戦が決行された。

52話

軍義が終わり義弘たちは殿をするために江陵の幸村たちが籠城している城まで佐助の手引きで潜入した、そして家康たちも魏軍の後方の撹乱のために軍を江陵へと進めた、そして数日後家康たちは魏軍の後方の部隊を見つけることに成功し、撹乱の作戦を起てていた。

「斥候からの報告によれば旗印は、李于樂後竹に雀の絵が描かれた旗だそうです」「竹に雀、独眼竜の旗だなだが独眼竜自身が居るとは思えんな」

「何故ですか？ 家康さん」

「補給などの細かいことはあまり得意な方ではないだろうからな」

「じゃあいつたい誰が居るんでしょう？」

「独眼竜の腹心片倉小十郎、竜の右目とも呼ばれている男だ、冷静な判断力と独眼竜にひけをとらない武力を持っている、こっちの方が独眼竜よりも厄介と言えるだろう、皆気を引き締めてかかつていこう」

家康たちは魏軍に向かつて進軍を始めた、その頃魏軍の後方部隊指揮する片倉小十郎も家康たちを発見し同じく斥候からの報告を聞いていた。

「斥候からの報告によると敵は、関 厳 魏 諸葛 そして三葉葵さらには北郷の旗もあるそうだ、間違いなく蜀の軍だやはり呉は蜀と手を結んだようだな」

「ダンナ三葉葵つてなんや？」

「俺たちの世界の旗印だ、あれを掲げてるつてことは徳川が向こうに居るんだろう」

「ダンナたちの世界の旗は独特やからなく、まあうちはかつこええと思うけどな」

「そうかな、その趣味は沙和には分かんないの？」

「真桜、沙和、無駄口はそれくらいにしておけ、小十郎様徳川殿とはどんな方なのでしょうか？」

「徳川家康、俺たちの世界で天下を手中にしようとしている男だ政宗様の同盟相手でもある、実力もさることながら器もでかい男だ、しかも凧お前と同じで武器を使わず拳で戦う」

「天下を・・・華琳様と同じ立場のお方なのですね」

「そうだな格で言うと華琳と同格と言つたところだろうな」

「沙和 真桜お前らは華琳にこの事を伝えに行け、ここは俺と凧で抑える」

「了解!!（なの）」

「凧!! 気張るんやで」

「怪我しないでね凧ちゃん」

「任せておけ、お前たちも気を付けるよ」

そう言うと李典と于禁は曹操に呉と蜀の同盟を伝えるために馬を走らせた、そして残った小十郎と楽進は蜀軍を迎え撃つため待ち構えた、そして数刻後両軍は向かいあつていた。

「まさかお前が石田を説き伏せるとはな」

「ああ、ワシもまさか三成とまた一緒に戦うことになるとは夢にも思わなかつた、だがワシはこの辯を決して切りはしない、そのために竜の右目お前を倒す!!」

「ふつ、厄介な奴がさらに厄介になつたか」

「小十郎様、ここは私にやらせてください」

「凪・・・分かつたやつてみろ」

小十郎は楽進の目を見て家康の相手を任せることを決めた。

「我が名は楽進、数多に受けた傷は戦場で一步も退いたことの無い証、徳川殿我が拳で貴殿を打ち碎いてみせる!!」

「同じ拳を使う者が相手か、楽進殿某は徳川家康!!貴殿と戦える事をワシの誇りとさせてもらう」

家康と楽進が名乗り終わると蜀の兵を搔き分けて関羽が家康の隣に立つた。

「我名は関羽雲長片倉小十郎殿、貴殿の相手は私がしよう」

「また軍神の名を持つ奴とやる事になるか、だがこの世界に来てお前は戦つてみたかつた相手だ、俺の名前は竜の右目片倉小十郎!!、軍神関羽!!その勝負受けてたつ」

関羽と小十郎も名乗り終わると家康と楽進とは別の場所で戦うため二人は家康たちから離れた、ここに徳川家康対楽進、関羽対片倉小十郎両者の戦いの火蓋が切つて落とされた。

家康と楽進は互いに相手の目を見ながら一定の距離をとりながら拳を構え、家康は足でステップを刻みながら、楽進は家康の一拳手一投足を見逃さないように家康を見て自分の中に流れる気を全身に浸透させた。

「いくぞ!!」

先に動いたのは家康だった、一気に距離を積め楽進に向かつて連続フックを浴びせた、だが楽進も家康の連続攻撃をすんでのところで躲していた。

「今だ!!」

楽進は最後の家康のフックに正面から自分の拳を当てて家康を吹き飛ばした。

「やるな、楽進殿だが」

家康は受け身を取つてすぐに楽進の方を向いた、だがすでにそこに楽進の姿はなかつた。

「なつ?」

「こつちです、猛虎炎襲!!」

樂進は家康の後ろに回り込み炎を足に纏わせた回し蹴りを首筋に放った、だが家康は樂進の蹴りを見ずに首の後ろに手を回して受け止め防御した。

「なつ!?!」

「良い蹴りだな樂進殿、ワシでなければ当たつていただろう・・・いやこの世界に来たばかりのワシでも当たつていただろうなだが!!」

家康は腕に力を入れて受け止めていた樂進の足を弾き飛ばした、そして家康も体を回転させ樂進の方を向いた。

「この世界に来てワシは新たな友、そして一度袂を別つた友とも新たに絆を結ぶことができた、悪いが樂進殿ワシはここで負けるわけにはいかない」

(なんという気迫、これが華琳様と同じ国を背負う者の気迫か)

樂進は家康の気迫に一度は圧されたがすぐに家康の目を見て拳を構えた、そして次に仕掛けたのは樂進の方だった樂進は家康に向かつて突撃し、家康の一歩手前で前転した。

「なつ!?!」

「猛虎転襲!!」

樂進は前転すると逆立ちをして足に炎を纏わせながら、体を独楽のように回転させて

連續回転蹴りを家康に叩き込んだ。

(凄い猛攻だ、だがこの程度ならまだ耐えられる)

「やはりこの程度ではダメですか、ならこれを受けていただきます、虎炎翔!!」

「?」

楽進はそう言うと回転蹴りの蹴る角度を急に斜め上に変えて見せた、流石の家康も対処出来ずに上空に飛ばされ、そして楽進は素早く自分の体勢を整え家康を追いかけるよう飛び上がった。

「まだです、虎炎落!!」

「ぐつ」

樂進は家康より上に飛び追撃の踵落としを家康に食らわせ家康を地面に叩き落とした。

「まだまだ!!」

樂進は空中で自分の右足に気を集中させ始めた。

(あれはくらうとマズイ)

家康は立ち上がり両足を開いて大地に氣を放出し自分の足元に葵の紋様を出現させた。

(何をするつもりか分からんがもう止められない、私は私の力を信じる!!)

(真っ向勝負か、挑むところだ楽進殿!!)

「ハアアア、飛べ我が内に燃える炎よ、猛虎襲撃!!」

「紋を象れ、篤き紳よ!!」

樂進は右足に集中させた気を一気に放ち氣で象った炎の虎を家康に向けて放つた、家康は足元に象られた葵紋から膨大な気をまるで家康を守るように上に解き放つた、そして猛虎襲撃と葵の極み二つの大技がぶつかり合い大爆発が二人を包んだ。

時は少し戻り家康たちが勝負を始めようとした頃、少し離れた場所では愛紗対小十郎のもう一つの勝負の幕が上がるとしていた。

(義弘殿程ではないが小十郎殿も凄い気迫だ、これは手を抜くことはできない)

(軍神を名乗る奴はどうとも凛とした佇まいをしてやがる、まるで謙信公が目の前に居るみてえだ)

二人は武器を構えながらじりじりと相手の間合いを確認した。

「俺から行かせてもらうぜ」

先に動いた小十郎は自分の刀の一本を地面に刺し落雷を刀に落として愛紗に電撃を浴びせた。

「なつ!?

愛紗は感電し一瞬無防備となつた、その隙を小十郎は逃さなかつた。

「あめえ、月閃!!」

小十郎は無防備となつた愛紗に横なぎをくらわせた、愛紗は攻撃を受けると地面を転がつた。

「何んだけは対したものだが武の方はまだまだだな・・・ほう」

立ち上がりがないと思っていた小十郎の思惑は外れ愛紗は偃月刀を杖のようにして立ち上がつた。

「ま、まだだ・・・はあ!!」

そして愛紗は両足でしつかり立つと気を全身に巡らせ氣と一緒に受けた雷を外に放出した。

(気の放出と同時に俺の雷を体の外に出したのか、気の使い方が上手いなこれは此方も本腰をいれるとするか)

「行くぞ関羽!!、月煌!!」

小十郎は愛紗に向かつて突撃しそして小十郎は愛紗の正面に立つと二段斬りを浴びせかけた、だが愛紗は小十郎の攻撃を後ろに後退しすんでのところで躰した。

「甘い!! 氷神列壊」

愛紗は技を放ち終わつた小十郎の一瞬の隙をつき氷を纏つた偃月刀で右なぎを放つた、だが小十郎はもう一本の刀を抜きギリギリの所で防御した、しかし愛紗の力に押さ

れ吹き飛ばされた。

(何て奴だ、防御したが手が痺れてやがる)

小十郎は痺れた手を少し振りながら立ち上がり一本の刀を鞘に戻しもう一つの刀を構えた、そして愛紗も何時でも小十郎に対処できるように偃月刀を構えた。

「やるな流石は軍神関羽」

「小十郎殿も流石だ、だが私は負けるわけにはいかない」

「それは此方も同じだ、俺も自分の背負うもののため負けるわけにはいかねえ、どうだ次の一撃で終わりにしないか?」

「ああ、お互にその方が良さそうだな」

愛紗は気を偃月刀に集中させ水氣を偃月刀に纏わせ始めた、小十郎も刀を振りかぶり自分の刀に全身全霊の力を溜め始めた。

「行くぞ、氷龍逆鱗断!!」

「挑むところだ、輝夜!!」

互いに渾身の一撃を振り下ろそうとしたその時家康たちが戦つてる方から爆発が起きた、二人は途中で技を止めて爆発のあつた方を向いた。

「家康殿・・・」

「風・・・関羽悪いが勝負は預けさせてもらう」

愛紗も家康の事が心配だつたので小十郎に領き、二人は家康たちのもとに走つた、そして二人が着くと家康と楽進の二人はボロボロになつて倒れていた。

「家康殿!!」

「嵐!!」

愛紗たちがふたりに駆け寄ると家康たちが息をしているのを確認し気絶しているだけだというのが分かり安堵した、そして名前を呼び続けると二人はゆっくりと目を開けた、そして二人とも体を起こそうとするが体が言うことを効かず自分では起き上がりなかつた、二人とも愛紗と小十郎に支えられながら体を起こした。

「が、楽進殿やはり貴殿は凄い武人だ、鬼島津殿が目をかけるのもよく分かる」

「島津殿が私を？」

「ああ、良い目をする武人は今まで数多く見てきたが貴女の目はその誰とも違う、まるで昔の自分を見ているようだと言つていた」

「島津殿・・・」

「樂文謙殿この勝負は痛み分けで終わつたが」

家康は愛紗に支えられながらゆっくりと楽進の前まで歩いて来た、すると自分の拳を前に出し言葉を続けた。

「必ず勝負を着けよう、ワシは貴殿と戦い紺を結びたい」

実力者である家康にここまで言われた事に楽進は嬉し涙を浮かべ、そして楽進も拳を前に出し家康の拳に自分の拳をぶつけた。

「ありがとうございます家康殿、貴方程の人にここまで言つてもらえて私は嬉しいです」二人はニッコリ笑うと意識を手放しました氣絶してしまった、それを見た愛紗と小十郎は揃つてくすりと笑うとお互いの顔を見合つた。

「すまないが小十郎殿ここは退かせてもらうがよろしいか?」

「ああ、凧がこんな状態じやどうすることもできねえ、だが必ずあんたとの勝負は着ける」

「それはこちらとしても挑むところだ」

愛紗と小十郎はそう言うと傷ついた家康と楽進を背負いながら自陣へと帰つていった。

その頃李典と于禁は馬を走らせ曹操のいる本陣に到着し蜀軍が攻めてきたことを報せるため曹操の居る天幕に入ってきた、だが天幕の中には誰も居なかつた。
「華琳様いないの?」

「筆頭も居らんな? 何処行つたんやろ」

すると天幕に一人の兵士が入つてきて李典たちに華琳は先陣に出向いているという知らせを聞いた、そして二人はまた馬を走らせ先陣に向かつた。

「でも何で華琳様は先陣に居るんだろう?」

「せやな、アカンその事聞くの忘れたわ」

「二人が馬を少し走らせ段々先陣に近づくと兵士たちがやけに騒いでいるのが二人の目に付いた。」

「何を騒いどるんやコイツら?」

「あ、真桜ちゃん華琳様たち居たの! 華琳様!」

于禁が曹操と政宗を見つけ李典も兵士たちの様子が気になつたが曹操たちの元に走つた、二人が着くと馬に乗つた華琳と政宗が崖の下を覗いていた。

「華琳様大変なの、蜀軍が」

「知つているわ、蜀と呉が手を組んだのね」

「どうして知つとるんですか?」

「お前らも見てみろよ」

政宗の言葉に李典と于禁の二人が崖の下を覗くとゆうに三百は居るであろう兵士が全員倒れていた。

「なつ!? なんやこれ敵にこんなことする余力があつたんか?」

「これはたつた三人にやられたのよ」

「さ、三人!? 大将冗談きつついで」

「そうなの沙和たちが頑張つて調練してゴミ虫から、立派なウジ虫共にしたの」「本当よ、ほらその三人ならそこに居るじゃない」

「えつ？」

李典と于禁がよく見ると倒れた兵士の中に七人が立っていた、魏軍でも一番の武を持つ夏侯惇その妹の夏侯淵更には曹操の親衛隊の一枚看板の許褚と典韋がボロボロになりながらも武器を構えている、そしてその四人の前に三人の男が立っていた、その中の一人に李典と于禁は見覚えがあつた。

「あのじいさんは凧と戦った奴やな、後は・・・」

「同じく蜀に居る異世界の武将の上杉謙信、呉で孫策と同盟を組んでいる武田信玄の人よ」

「こんなことなら浅井と前田も先陣に置くべきだつたな」

「そうねでも過ぎたことはしようがないわ、行くわよ政宗」

「ああ、おめえ等もついて来い」

次の瞬間曹操と政宗は馬と一緒に崖を飛び降りた。

「た、大将筆頭も!?、全くしゃーないな！」

「沙和たちも行くの」

李典と于禁も曹操たちを追いかけて馬で崖を飛び降りた、そして義弘たちの前に曹操

と政宗、遅れて李典と于禁の四人が飛び降りてきた、そして李典と于禁は春蘭たちのもとへ曹操と政宗は馬を降り義弘たちの前に立つた。

「お、華琳どんに独眼竜やつと出てきたとね？」

「お久しぶりですね曹操殿、独眼竜」

「独眼竜、霸王よ久しいな」

「フフフ全く敵になつてほしくないと思つていた者たちがこうも敵に回るなんてもはや笑うしかないわね」

「この状況小十郎が聞いたら悔しがるところだな」

「竜の右目も元気かねそりや良かね」

「しかしさまか貴方たちが殿に来るとは思つてなかつたわ」

曹操はボロボロの春蘭たちをチラツと見ると目線を三人に戻した。

「どげんするとね？ 華琳どん、このままおいたちとの勝負を続けるかね」

「戦いを続けるのはワシ等としては挑むところ、どうする霸王よ」

「そうね・・・政宗貴方はどう思うかしら？」

「俺なら退くな、こんなどこで劉備や孫策も出て来てねえのに決着じやつまらないだろ？」

「あら、竜の言葉にしてはやけに弱氣ね？」

「ま、俺はこの三人の強さを知ってるからな、俺たちの世界でもこの三人が同じ戦場に立ったことはねえ、それにこの三人を打ち倒すならこんな場所では相応しくないしな」「なるほど・・・義弘貴方たちは私たちが退いたらどうするの？」

「おいたちはただの殿よ、敵が居なくなれば無理には追いかけん」

義弘の言葉に謙信と信玄も頷いて答えた。

「そう、なら孫策と劉備に伝えなさい、決着は必ず魏の勝利で着ける、覚悟しておきなさいとね」

「武田のおっさん真田にも伝えといてくれどんな世界だろうと俺とお前との決着は必ず着けるとな」

「分かりもした確かに伝える」

「幸村への伝言もしかと伝えよう」

「ふつ流石は霸王に独眼竜ですね、前に会った時より一人とも霸気が増しています」

「総員撤退せよ」

曹操は撤退を告げながら傷ついた夏候惇たちに駆け寄った、それを見た三人は堂々と戦場を去っていった。

「よろしいのですか？華琳様」

「何がかしら春蘭」

「今あの三人を倒しておかなくても?」

「今貴女たちがこの状態で本陣にいる利家も長政も救援には間に合いそうもない、無茶な賭けをあの三人相手には出来ないわ、それに私の天下には貴女たちが必要なのこんなところで死なせるわけにはいかないわ」

「「華琳様」」

「申し訳ありません華琳様」

「フフ良いのよ秋蘭江陵を落としただけで良しとしましよう」

こうして江陵の戦いは幕を下ろした、そして三国志の中でも指折りの大戦でもある赤壁の戦いの幕が上がるとしていた。

53話

義弘たち殿を引き受けた三人は佐助の手引きにより、幸村たちが籠城している江陵の城にたどり着き幸村たちとの合流に成功した、そこには幸村だけではなく井伊直虎　甘寧　呂蒙　黃蓋たちもいた、だがいずれの武将たちも長い戦いで疲弊しており疲労の色が隠せていなかつた。

「お、お館様!? それに島津殿や上杉殿まで、なにゆえこのような死地にお出でになられたのですか」

「幸村よお主等をこの様なところで失うわけにもいかんからな」

「ゆ、幸村のため死地へ・・・お、おやがだざばー!!」

「泣くな幸村!! 男児が軽々泣くものではないわ」

「おまはんらは良く戦つた、ここからはおいたちが戦を預かる、安心して船で逃げるがよか」

「待て」

義弘たちの言葉を甘寧が止め言葉を続けた。

「貴殿の顔には覚えがある汜水関を斬つた島津殿、しかし貴殿等は蜀軍、なにゆえ呉の戦

に首を突っ込む?」

「この度蜀は呉と同盟を結ぶことに相成りました、そして同盟の最初の仕事として若虎たちを救うことになり、私たちが殿を引き受けたのです」

「お館様殿の役目この幸村も御伴しどうござります!!」

「幸村お主たちはお前もう限界じや、長き戦いを良く戦い抜いた、後はワシ等に任せおけ」

「そう言うわけね甘寧どん納得したとね?」

「ああ、悔しいがここは貴殿等に頼るしかないようだ」

すると直虎が信玄に近づいて来た、そしていきなり剣を信玄に向けた。

「武田、貴様に助けてもらうだと?、そんなことされるぐらいなら私はここで魏に突撃して死を選ぶ!!」

「つまらん意地よ、一国主のすることは思えんな、それと蓮華からお主に手紙を預かつておる」

「蓮華から?」

蓮華は直虎との親交が深く信玄とのことも聞いていた、だが此度は信玄たちの力がなくては直虎たちを救うことは出来ないと想い、信玄の援軍を直虎が断つた時のために一つの手紙を信玄に預けていた、そして信玄はその手紙を直虎に渡し直虎は手紙を読み始

めた。

(直虎、貴女の事だから信玄公が援軍に行くとなれば命を捨てる事をしかねないと思
いこの手紙を預けたわ、貴女は私に國主になるための大切な事を教えてくれた大切な親
友よ、私はもつと貴女と一緒にいたいの、だから信玄公との因縁は知っているけど援軍
を受け入れて欲しい)

「蓮華……」

手紙を握る直虎の手の力が強くなるのを見ると信玄が言葉を続けた。

「小娘よ蓮華の気持ちを組んでやれ、ワシを倒す事は生きてなければできんぞ」
「くつ・・・分かつたここは蓮華に免じてお前の手助けを受けよう」

信玄が直虎と話をしている横で義弘は黄蓋と話をしていた。

「貴殿汜水関での活躍は見ておった、とてつもない武を持つておるようじやな」

「呉の宿将の黄公覆にそう言つてもらえるとは嬉かね」

「お主と信玄殿の実力は知つておるが、もう一人のあの男はどのぐらいできるのかの?、
中々の実力者と見たが」

「軍神どんは強か、なんと言つても甲斐の虎の宿敵でもあるからの」

「なるほどあの男が信玄殿がいつも言つておる上杉謙信殿か・・・ふつ、これほどの武人
が殿を引き受けてくれるとは頼もしい限りじや、だが悔しいのう貴殿等の戦いを見れな

いとは

「ガハハハ蜀と同盟を組んだるんじや、おいたちの武を見る機会はまた訪れるじゃろう」

「それもそうだのう」

二人は笑い合い城内に笑い声が響いた、そして謙信は呂蒙と話をしていた。

「貴女が呂子明殿ですね？」

「は、はい」

（この人が信玄公が宿敵と仰っていた上杉謙信公、信玄公とはまた違った気迫を持つている）

「大丈夫ですか？呂蒙殿」

「は、はい、貴女が上杉謙信公ですねお会いできて光榮です!!」

「それは私も同じです、貴女は武官から軍師になつたのでしたね」

「はいよく知つておられますね、孫権様のお計らいで軍略を勉強させていただきました」「ここまで皆が無事であつたのも貴女の策によるところが大きいでしょう」

「い、いえ私など他の皆様の頑張りのお陰かと」

すると壁に寄りかかっていた甘寧が謙信と呂蒙に近づいてき話に割り込んだ。

「胸を張れ亞沙、お前がいなければもつと犠牲者が出ていたのは確実だ」

「し、思春殿」

「甘寧殿がここまで言うのです、誇りなさい呂子明、貴殿の軍略を、そして更に研鑽を積むのです」

「はい謙信公ありがとうございます、それに思春殿も」

「私は当然の事を言つただけだ礼を言われることなどない」

次に謙信は呂蒙から甘寧に目を向けた、すると甘寧も謙信の目を見つめた。

「静かな闘志ですねまさしく明鏡止水、私に近いものを感じます」

「謙信公程の方にお褒めいただけるとはとは嬉しい限りです」

「貴殿等の戦いを無駄にはしません、殿はお任せなさい」

「はっ!!」

謙信の言葉に呂蒙と甘寧は力強く頷くと撤退する船の準備が出来たと兵士が皆に知らせた。

「さあ皆のもん急いで退却するんじや殿はおいたちに任せんしやい」

城に残る将兵たちが船に乗るなかで幸村は最後まで信玄に着いていかせてくれと頼んでいた。

「お館様何卒この幸村も連れていくてくださいませ!!」

「ダメだと言つておろうがしつこいわ!!」

信玄は幸村を全力で殴り飛ばした、いつもの幸村ならここから反撃をするところだ

が、長い戦いの疲労は幸村にも出ておりそのまま気絶しました。

「見よ幸村、この程度の攻撃もたえらぬではないか」

「怪我人じや言うとるのに怪我を増やしてどげんするとね」

「まあ大人しくなつたことですしこれで良いでしよう、若虎も一緒に運んでください」

すると退却中の兵士二人が幸村の両手両足を持つて船に乗せた、そして全員を収納した船は出港し、義弘たちはその出港を見届けると城門を開け魏軍を迎え撃つために魏軍先陣に向かつた。

義弘たちが馬を飛ばし一刻が過ぎた頃先陣では夏候姉妹と親衛隊の許褚と典韋が指揮を執つていた。

「ここまで来れば後は包囲するだけだな秋蘭」

「油断は禁物だぞ姉者、敵はなんと言つてもあの精強な呉の将兵に加え真田たちなのだから」

「真田か、江陵の最初の戦いで武器を交えたが、政宗が宿敵と言うに相応しい奴だった、確かにこの戦最後まで気は抜けんな」

姉の強者に対する高揚勘を感じた夏候淵はやれやれといった表情で首を横にふった、すると先見をしていた許褚が伝令を伝えた。

「春蘭様前方から砂塵が見えます」

「籠城を諦め野戦でもする気なのか？」

「それにしては砂塵が小さい、呉の兵はまだかなり残っていたはずだが、全軍戦闘体制を整えろ!!、寡兵とて油断はするな、季衣と流琉は我らの補佐を頼む」

「はい!!」

夏候淵の一言で魏の兵士たちは武器を持ち来るべき敵に備えた、夏候惇と夏候淵も武器を構え何時でも戦える準備をした、すると少ししてその砂塵を出していた者たちが魏の先陣の前に現れた。

「な!?あの者たちは」

「凄い陣容を揃えてきたな」

夏候姉妹は目の前に現れた甲斐の虎　武田信玄、越後の軍神　上杉謙信、そして鬼島津の異名を持つ最強の武人　島津義弘の三人を見て驚愕した。

「夏候惇どん久しぶりね」

「鬼島津殿・・・」

「鬼島津殿、上杉殿貴殿等は蜀軍の筈だ、呉は蜀と手を結んだと言うことだな?」

「そうじやおいたちは呉と手を結ぶことにした、これからはおいたちもおまはんらの敵、ちゅうことになるの」

「厄介なことになつた」

「しかし島津殿とまた戦える、悪い事ばかりでないぞ秋蘭」

「姉者何を呑気なことを言つておるのだ、異世界の中でも指折りの実力者たちなのだと
ああ、ワクワクするな」

姉の顔は新しいおもちゃでも見つけたかのように笑っていた、夏候淵はその姉の姿を見て自分の中にも沸き立つ血のたぎりを感じていた。

「姉者の言うとおりかもしれないな、私もあるの者等と戦うと思つたら、少し血が沸いてきた」

「そうこなくてはな、義弘殿全力で行かせてもらうぞ!!」

「無論じや手加減などおいたちには無用よ、二人とも準備は良かね?」

「何時でも」

「準備は出来ておるわ」

「全軍戦闘準備!!」

夏候惇が全兵士に聞こえるように号令すると兵士たちは武器を構え何時でも攻撃出来るようにした。

「弓兵構えー!!」

「まずは弓兵の攻撃ですか、流石は夏候妙才、戦を知っていますね」
「ワシが行くか?」

「いや、甲斐の虎が出るまでもなかおいが行く！」

「撃てー!!」

夏候淵が弓兵に号令し百本の矢の雨を義弘たちに降らせた、それを迎え撃つべく義弘は一步前に出て剣を構えた。

「矢じやろうが砲弾じやろうが、纏めておいが斬り潰す!!」

義弘は渾身の力を込めた一振りを地面上に向けてはなつた、すると激しい風圧が巻き起こり百本全ての矢が風圧により折れ地面に落ちた、弓兵たちはその義弘の行動に驚愕していたが夏候淵は違つた。

「やはりこの程度では傷も与えられないか」

「秋蘭次は私が出る!!、季衣援護頼んだぞ!!」

「分かりました春蘭様!!」

「姉者・・・分かつた、しかし無理だけはするなよ」

「季衣も必ず帰ってきてね」

「分かつてている!!」

「勿論だよ!!」

夏候惇は馬に騎乗し騎馬隊の一番前に布陣した、そして許緒とともに義弘たちに突撃を仕掛けてきた。

「今度は姉の登場か、退け島津のワシがやろう」

そう言うと義弘と交代して前に立つたのは信玄だつた。

「ワシに騎馬で向かつてくるその粹や良し!!、じゃが千年早いわー!!、うおおおお復活の虎、猛るは必定つ!!」

信玄は全身に気を巡らせた、すると夏候惇の目に信じられないものが写つた。

「なつ!? 何だあれは・・・」

「しゆ、春蘭様・・・」

「皆の者全力で避けろー!!」

信玄は空から隕石の雨を騎馬隊に向かつて降らせた。

「これで終わりではないぞ!!」

更に信玄は隕石の雨が降る敵陣に突つ込み敵の騎馬を斧でどんどん打ち倒していくた、夏候惇と許褚は隕石を斬つたり、叩き落としたりしながら何とか交わしたりしていつが他の兵士たちは皆ことごとく信玄によつてやられてしまつた。

「流石は夏候元壌よ、ワシのあの攻撃を躱せるとわな、わっぱ主もやるのう」

「ハアハア、あれは私も危なかつた、伊達や他の異世界の者たちと戦つていなければ死んでいただろう、だが私はこの程度で終わるつもりはない!!、季衣私は死地に入るお前は秋蘭たちの所に戻れ」

「ハアハア、嫌です僕も最後まで春蘭様と一緒にいます」

「ハアハア・・・分かつた、構えろ季衣」

「はい!!」

夏候惇は許褚の目を見ると止めても無駄だと思い剣を構え自分の剣に炎を宿した、許褚も自分の武器の岩打武反魔を構え鉄球に雷を宿した、それを見て信玄はニヤリと笑つた。

(武骨ゆえに真っ直ぐ、幸村によう似ておるわ、もう一人のわっぱもあの年にして立派な武人の目をしておるわ)

(私は武人としていや、華琳様のためにもこんなところでは負けられない)

(流琉ごめん約束守れないかもしけない、でも春蘭様の為に僕は命を懸ける)

姉と親友が信玄と戦うのを見て夏候淵も典韋も武器を持った、そして一人の伝令兵に伝えた。

「おいお前この事を華琳様に伝えよ」

「はっ！」

そして秋蘭は横に立っていた典韋を見つめた、自分を慕うこの少女と共に死地に連れて行くべきではないと考え典韋に話しかけた。

「流琉お前は」

「秋蘭様、私は春蘭様たちを見捨てて逃げたりはしません」

その言葉と決意を秘めた目を見た秋蘭は姉と同じ結論にいたつた、そして姉と共に戦おうと姉の隣に立つた、典韋も許褚の隣に立ち、すると信玄の後ろから謙信が現れ秋蘭たちに話しかけた。

「夏候淵殿貴殿の相手は私がしましょう」

「願つてもないことだ」

(軍神と謳われ、信玄殿の宿敵と称される謙信殿が相手か、これは私も命がけだな)

「名に怖じることはありますん、貴殿の武を見せていただきましょう」

「分かつた、全身全霊を持ってお相手させていただく」

秋蘭が謙信と戦うことを決めると典韋は秋蘭の補佐をするために隣に立つた。

「私は姓は典名は韋、上杉さん私も貴方のお相手をさせていただきます」

「貴方があの悪来典韋殿でしたか、良いでしよう二人とも参りなさい」

ここに武田信玄対夏候惇、許褚、上杉謙信対夏候淵、典韋の勝負の火蓋が切つて落とされた。

それから少しして伝令兵は馬を走らせ曹操軍の本陣に到着していた、そして曹操たちがいる天幕に飛び込んできた、そこには机が一つあり政宗と華琳が席に座っていた。

「た、大変です曹操様!!」

「おい、落ち着けどうした」

政宗は飛び込んできた兵士に駆け寄り肩を叩いた。

「筆頭もいらつしやつたんですね、先陣に新たな敵が現れました」

「今までの呉の奴等じゃないのか?」

「はい、新たに現れたのは呉と蜀の混成軍です」

「やはり蜀が助けに入つたな・・・で数は?」

「さ、三人です、しかしその三人に先陣は総崩れとなっています」

「待ちなさい」

すると今まで座つて聞いていた曹操が立ち上がり兵士に駆け寄つた。

「三人に総崩れ?、先陣には春蘭と秋蘭そして親衛隊の季衣と流琉も一緒にいた筈よ、四人はどうしたの?」

「方々は皆はご無事です、今はその三人と戦つておられる筈です」

「その三人とは誰?」

「一人は呉の孫策と同盟を組んでいる武田信玄」

「まあ真田はいたし呉の大将と同盟組んでるならあのオツサンが出てくるのは当然か、で後の二人は?」

「はい、後の二人は蜀の二代軍神の一人の上杉謙信、もう一人は鬼島津と恐れられる島津

義弘です」

「なるほどな軍神に鬼まで来ちゃ総崩れにもなるか」

「これはマズイいわね」

「ああ、下手をすると春蘭たちが死ぬな」

「こんなところである娘たちを失うわけにはいかないわ、誰がある!!」

曹操の声に反応し外に控えていた兵士が天幕に入ってきた。

「はつ、曹操様何か」

「利家と長政を呼びなさい」

すると兵士は天幕を出て行つた、そして少しすると利家と長政が天幕に入ってきた。

「どうしたんだ華琳？」

「某たちになにか用か？」

「ええ、先陣に島津義弘 上杉謙信 武田信玄の三人が殿として現れたそうよ」

「あの三人が手を組むとはな」

「武人としては何方も立ち合つてみたい相手ではあるが、その三人が殿とはまずい展開だな」

「私はあの三人が私を呼んでいるように思うの、だから私は先陣に向かうそこで貴方たちに本陣の指揮を任せると、全ての判断を貴方たちに任せる」

「独眼竜も行くんだな？」

「ああだから二人とも頼んだぜ」

「分かった」

曹操たちは本陣を長政と利家に任せると先陣に向かつて馬を走らせた、するとほどなくして先陣に到着し華琳たちは陣の状況を判断するため見下ろせる場所で馬を降りた、下を見ると無数の兵士たちの死体があり、そしてその中にまだ余裕のありそうな義弘たちとボロボロの夏候惇たちが武器を構え立っていた。

54話

江陵での戦いから一年後蜀と吳は連合を結成し赤壁に大船団を布陣させた、対する魏の曹操も二国よりもさらに多い大船団を編成し赤壁に布陣を敷いた、ここに赤壁の戦いの幕が降りようとしていた、運命の大戦を前に義弘は三国の大船団を見ていた。

「壯觀よまさか赤壁の戦いの場においが立てるとは、長生きはしてみるもんね」

すると後ろから足音が聞こえてきた、その足音の主の信玄は義弘の隣に立ちまた船団と共に眺めた。

「全くよ、何の憂いもなくこの船団を見たかつたがお主のあの話を聞いてはそうもいかんな」

「松永の事ね？」

「あの男は危険よ、太平妖術の書や死者を甦らせると言われる薬、どれも危険な代物ばかりじや」

「確かにの、じやが奴を探そうにもまずはこの戦いを何とかせんといかん」

「そうじやな、ワシ等の面倒を見てくれた、雪蓮や劉備のためにもな」

「ええ、魔王の復活だけはなんとしても阻止せねばなりません」

二人が話していると謙信が話に加わった、義弘と信玄も謙信を見て黙つて頷いた、義弘た謙信が蜀の陣に帰ると騒がしい声が聞こえてきた。

「小生は絶対に嫌だ!!」

「官兵衛さんもう決ましたことなんですよ」

「どげしたとね?」

陣の真ん中では一刀と桃香と官兵衛が言い合いをしていた。

「鬼島津、小生は三成と組むのだけはごめんだ、小生を穴蔵に閉じ込めたのは三成と刑部だ、何故小生が三成のために力を尽くさなきやならんのだ!!」

「おまはんの言いたいことも分かるが冷静になりんしゃい、何も三成どんのために働くことはなか、今まで通り桃香どんと一刀どんのために働くと思えばよか」

「嫌だね、小生は合わん奴と組んでまで一人を助けたいとは思わん!!」

「官兵衛さん・・・」

「一刀や桃香には悪いが小生は蜀を抜ける

「官兵衛どん本気ね?」

「ああ」

二人は少しの間睨み合つた、すると官兵衛は背を向け陣から去つていった。

「官兵衛さん戻つて」

桃香がその後を追いかけようとしたが一刀が桃香を制止した。

「官兵衛さんは頑固な人だから言つても無駄だよ」

「でも『主人様』

「今は曹操との戦いに専念しよう、義弘さんたちがいるとはいえ必ず勝てるとは限らないんだから」

桃香は後ろ髪を引かれる思いではあつたがぐつと自分の気持ちを抑えて愛紗たちにこの事を伝えに行つた、官兵衛が出ていつたことを聞くと皆はショックを隠せなかつた。

「官兵衛が出ていくなんて」

「ビックリなのだ」

翠と鈴々が驚いていると氏政が黙つて席を立つた。

「氏政さん？」

「官兵衛殿が離れるのならワシと風魔もそうさせてもらおうかのう」

「氏政さんたちまで行っちゃうの!?」

「桃香殿、すまんなワシは官兵衛どのに恩義があるんじや、それを反故にはできん、それにワシと風魔居らざるともこの陣容なら勝てるじゃろ」

「でも」

「いざれは来る別れが今となつたというだけじや、桃香殿今までほんとにお世話になつた」

氏政は深々と頭を下げるに風魔と共に陣を出て官兵衛を追いかけた、桃香自分が情けないから氏政たちが出ていつたと思い顔を下に向けた、すると義弘が桃香の肩を叩いた。

「桃香どん、しつかりしんしゃいおまはんのせいじや無か、あの三人は覺悟があつて出ていつた、ただそれだけのことね」

「でも・・・」

「おらんくなつたもんはもうおらん、おまはんは君主じや今おるもんたちの事を考えんしゃい」

義弘の言葉に泣き出しそうな気持ちをぐつと抑え桃香は皆の方を向いた。

「皆、官兵衛さんたちは出ていつてしまつたけど私たちはこの戦を勝たなきやならないの、こんな私だけど精一杯頑張るから皆力を貸して!!」

「桃香の言うとおりだ俺たちはこの戦い、何があつても負けるわけにはいかないんだ!!」「ご主人様・・・」

桃香と一刀の言葉に蜀の将全員が力強く頷いた、そしてその日の夕方桃香たちは呉との合同軍議の場に赴いた。

「劉備、家臣が逃げたそうね?」

「え?、ええまあ・・・」

「全くこの子に背中預けてほんとに大丈夫なのかしら」

「それについてはほんとにすまない孫策さん」

「一刀が間に入り深々と頭を下げるとき流石の孫策もなにも言えず周瑜の言葉で軍議が始まつた。

「気を取り直して軍議を始めよう、三国が布陣を敷いた今いよいよ本格的な戦が始まる、時に諸葛亮私はこの戦を決めるのはこれしかないと思つてゐる」

周瑜は紙一枚出した、すると朱里もポケットから一枚の紙を出した。

「奇遇ですね私もこれしかないと思ひます」

周瑜と朱里が同時に紙をめくるとそこには火の一文字だけがかかれていた。

「曹操軍は我等二国を合わせても届かぬ敵として船戦となれば」

「ええこれしかないでしよう」

二人の言葉に幸村が訳もわからず信玄に耳打ちした。

「お館様お一人はなぜ紙に書いたのでしょうか、!?」

次の瞬間信玄は幸村を殴り幸村を天幕から叩き出した。

「馬鹿者がそんなことも分からぬのか!、壁に耳あり障子に目ありという言葉の通り誰

がどこで見たり聞いたりしてゐるか分からん、じゃからふたりは紙に書いたのじや」

「な、何と!? 流石は希代の名軍師に御座ります」

周瑜は咳払いをして信玄たちの方に向いた目を軍義の本題へと戻した。

「とりあえずこれを使うことに諸葛亮も異論はないな?」

「はい」

「なら後、問題は一つ」

「風ですね?」

「そうだ今は曹操の陣からこちらへ風か吹いている」

「それは私にお任せてください」

「任せろつて何、祈祷でもやるの?」

「違いますよ孫策さん、昨日この辺りの漁師に聞いたらこの時期この赤壁では夜に南東の風から東南の風へ変わるそなんです」

「なるほどそれを利用するわけだな?」

「ええ」

「可愛い顔して考えることはやはり諸葛孔明ね」

「なら事は急いだ方がいいな、今日の夜にも行動を起こそう、それでは各自隊の編成に戻つてくれ、決戦は今夜だ!!」

そう言うと全員が天幕を出て自分の隊へと戻つていった、そして信玄と周瑜そして黃蓋の三人が残つた。

「信玄公これでもまだ私たちの策はいらないと」

「ならん、此度の戦これで済むとは思えん、仲間は一纏めにしておくべきじゃ」

周瑜はこの軍義が始まる前に信玄に呼び出されていた、それは周瑜と黃蓋の二人のみでやろうとしていた、黃蓋に偽りの投降をさせ敵陣で火を着けるという苦肉の策というのだった、しかし信玄はそれを却下したのである。

「火をつけるのは佐助と謙信の剣に任せよ」

「は、はい」

「わかつたわい」

二人はまだ納得いかないようだつたが信玄が有無を言わせなかつた。

(松永が暗躍している以上まともな赤壁の戦いにはならんはず、何かしらの策を打つているじやろう、島津や謙信の考へてる通りにならねばよいのだが)

信玄はゆつくりと自分の隊へと向かつて行つた。

55話

その日の夜吳と蜀の本陣では將たちが集まつていた。

「佐助よ心して行け、向こうには独眼竜に竜の右目もおるからな、二人とも火計は警戒しておろう」

「まあ、そういうことに鼻が利くのは右目の旦那の方でしようけどね」

「剣よ武田の忍を助けてあげなさい」

「はい、謙信様」

「佐助よ一刻待つて火が着かぬようならワシ等は曹操たちに突撃をかける、よいな」

「御意、ちやちやつと着けてきますよ」

「佐助早く行くぞ」

かすがはそう言うと皆の前から姿を消した、そして佐助も遅れて自分の影に入り込み姿を消した。

佐助とかすがの二人は程なくして曹操の軍船奥へとに忍び込んでいた。

「こちら辺で火を着ければ回りにも燃え広がるだろ」

「さつさと着けて帰るぞ佐助」

「かすがはせつかちだな」

「やはり来たな」

「!?」

二人は声のした後ろを振り向くとそこには片倉小十郎と前田利家が立っていた。

「やつぱり旦那が待つてたか、槍の又座は想定外だつたけど」

「てめえが来るなら軍神の剣も来るだろうと思つてな」

「すまないな上杉殿の忍、慶次が世話になつていてるそなたと戦いたくはないがこれも曹操殿への恩義のためだ」

「気にするな」

四人は互いに武器を構えいつでも戦える体勢を整えた、すると船内の奥の暗闇から何かを引きずるような音が聞こえた。

「旦那たち以外にも誰か居るのか?」

「いや、俺たちだけのはずだ」

小十郎のその言葉を聞き四人は暗闇に向かつて武器を構えた。

「おやおや、邪魔をしてすみませんね」

「そ、その声は」

暗闇から聞こえる声を聞き利家はその声の主に心当たりがあつた。

「久しぶりですね、利家」

「暗闇から出てきたのは大きな一本の鎌を持つた明智光秀だった。

「明智、貴様!!」

「上杉の忍ですか、貴女とも黄巾党以来ですね」

「明智てめえなにしに来やがった?」

「フフフ、私はある方のために動いているだけですよ、その方を呼ぶためにはこの船に火

がついてもらわないと困るのです」

「あんたが誰かのためにつてなると一人しか思い浮かばないね」

佐助の一言で四人の頭のなかには一人の男の姿が浮かんでいた。

「しかしあいつは死んだろ!」

「でもお前の話じや南蛮で死者をよみがえらせる薬を松永が奪つていつたんだろう?、こ
いつと松永がつるんでいりとしたら」

「賢しい忍ですね」

「じゃあほんとに信長様を・・・」

「ご想像にお任せします」

「もし魔王を甦らせようとしてるなら」

小十郎は鋭い目付きで光秀をにらみ剣を構えた。

「ここ」でめえを殺してその企みを潰す、それだけだ

「貴方にそれが出来ますかね」

「そこまでにしてもらえないかね?」

その声は光秀がやつて来た船内の奥から聞こえてきた、そしてゆっくりと歩いてきた
その男は各地で不穏な動きをしていた松永久秀だつた。

「松永っ!!」

「こりやヤバイのが出てきたな」

「準備は?」

「啓が時間を稼いでくれたからね、滯りなく終わつたよ」

久秀は手を上にあげて指をパチンと鳴らした、すると船内から爆発が起き周囲が火の
海となつた。

「なつ!?

「竜の右目よ啓と殺し合うのも良いが、私たちにはやらねばならないことがあるのでね、
失礼するよ」

久秀はそう言うと光秀共々その場から姿を消した、佐助たちが気配を探つたが見つけ
ることはできなかつた。

「右目の旦那悪いけど俺たちはこれで消えるよ」

「ああ、この戦まだ何かありそうだ、俺も政宗さまの元に行く」

かすがと佐助は信玄たちの元に戻り、小十郎と利家も魏の本陣に戻つていった。

その頃蜀と呉の本陣では敵陣で火の手が上がつたのを見て両軍が突撃を敢行した。さらに魏の本陣でも突然の爆発と蜀と呉の突撃に将も兵たちも動搖が隠せなかつた、しかしこの中でも政宗と華琳はどうつしりと構えていた。

（小十郎のやつしくじつたのか？）

「皆落ち着け!!」

華琳の霸気を交えた言葉に動搖していたものたちは全員華琳の方を向いた。

「お前たちはこの曹孟徳の兵だ、落ち着いて迎撃すれば必ず勝てる、總員戦闘準備!!」

華琳の言葉に将兵たちは湧きだち蜀呉の突撃に備えた、そして程なくして一つの船が軍船に突撃しそのなかから二人の男が曹操軍の軍船に降り立つた。

「鬼島津見参!!」

「政宗どのー!!」

最初に現れたのは義弘と政宗の永遠のライバルの真田幸村だった。

56話

義弘と幸村の二人は曹操の軍船に着くと敵を斬り倒していた、そして遅れて信玄や謙信が呉と蜀の武将たちと一刀を連れてきた。

「義弘さん!!」

「おお一刀どんも来おつたか、ならどんどん斬り倒さにやいかんの」

「お付き合いしますぞ島津殿おおおお!!」

そう言うと義弘と幸村はどんどん敵を斬り倒しながら進んでいった。

「島津思つたより若いの、ん? 佐助か」

信玄が後ろからの気配に気づくとそこには佐助とかすがの二人が立っていた。

「良く大役を果たしてくれた」

「剣よ、流石の働きです」

「違うんです謙信様実は・・・」

かすがは光秀と合つたことを話した、すると信玄と謙信は一目散に義弘たちを追つた。

「ちょ、ちょっと待ちなさいよ信玄公」

「謙信さん」

孫策や桃香も信玄たちを追つて曹操の本陣に向かつた。

(明智が火をつけたのなら、この火は明智にとつても都合が良いはず)

(さらに松永まで居たとなれば、この夜襲は仕組まれていたということ)

信玄と謙信はそんな事を考えながら走つていつた、その頃義弘たちは曹操軍の本陣の間近まで近づいていた。

「華琳どん鬼島津が来たどー!!」

「政宗殿おおおお、決着を着けましょぞ!!」

「いよいよね」

「ああ、真田幸村アイツとのけりもここで着けてやるぜ」

華琳と政宗は義弘たちに立ち向かおうと声のする方に向かおうとした、すると政宗の元に小十郎と利家が戻つてきた。

「お前にしてはらしくないミスだつたじゃねえか小十郎」

「申し訳ありません予期せぬ邪魔が入りまして」

「邪魔?」

小十郎は明智との事を政宗に包み隠さず話した。

「あの野郎いつたい何を企んでやがる」

「ちよつと政宗どういうこと?」

「俺にも分からねえ、だが一つ言えるのはこの戦は仕組まれてたつてことだ」「仕組まれていた?」

「華琳が首をかしげていると義弘と幸村が目の前までやつて来ていた。
「やつとこの時が来たど華琳どん」

「政宗殿いざ尋常に勝負!!」

「華琳様お下がりください」

「まちな春蘭、鬼島津少し話がある」
そう言うと義弘と華琳の間に夏候姉妹と親衛隊の許褚と典韋が華琳を守るように
割つて入つた。

「まちな春蘭、鬼島津少し話がある」

春蘭たちを止めたのは政宗であつた、政宗の目を見た義弘と幸村はただ事ではないと思
い武器を收めた、そして政宗に頼まれ小十郎が光秀たちの事を話した。

「と、言うわけです鬼島津殿」

「明智がこの戦を仕組んだつちゆうことね?」

「はい」

「島津殿どういうことでしようか?」

「おいにも分からん、しかし一つ言えるのはここでおいたちが争つても明智が笑うだ

けつちゅうことよ」

「冗談じやないわ!!」

「華琳・・・」

「英雄同士のこの聖戦をそんなわけもわからない男に邪魔されるなんて、春蘭!!」

「は、はい」

「今すぐその男を探し首を跳ねなさい」

「は、ただちに」

「義弘悪いけれどその明智とか言う男の首は私がもらうわ」

「それは構わんが、気をつけんしやい華琳どん、あん男は不気味で何をするか分からん
ど」

「くふふふふ、そう誉めないでくださいよ」

義弘が忠告をすると何処からか不気味な声が聞こえてきた、全員が声の主を探すと、
船の高所から光秀が義弘たちを見下ろすように立っていた。

「明智貴様、市を何処へやつた!!」

「それはご心配無くお市様は丁重に扱っていますから」

長政の妻お市は赤壁の戦いが始まる少し前に光秀によつて拐われていた、そして義弘
たちを追いかけていた信玄たちが追い付いてきた。

「お館様!?」

「軍神どんも来たとね」

「佐助たちからアイツがこの戦の裏で糸を引いていると聞かされたのでな」

「甲斐の虎に軍神もいらつしやるとは」

「手間が省けましたね」

すると全員が驚いた、その声は光秀のものではなく別の人間の声だった、すると光秀の後ろから導師の服を着た眼鏡をかけた男が現れた。

「気配がせんかつた、おまはん何者ね?」

「私の名は于吉、しがない導師です」

「そうは見えんがの」

「隙のない構え、流石は歴戦の武士だな」

するとさらに光秀の後ろから導師の服を着た少年が現れた。

「おまはんもただもんじやなかね、しかも武に心得があると見た」

「そうだな于吉よりは出来るだろうな、俺の名前は左慈」

(二人ともただもんじやないのは確かじやな)

義弘たちは武器を固く握りすぐにでも戦えるように体勢を整えた。

「身構えるな鬼島津、貴様らと戦うつもりはない」

「おまはんたちに無くともおいたちはおまはんらと戦う理由がある」

「そうか、しかしそれは叶わぬ願いだ」

左慈はそう言うと左慈の後方から鎧の擦れる音が聞こえた、その人物を見た義弘たちは驚愕した、その人物はなんと自分達の世界で打ち倒した筈の魔王、織田信長であつた。

「やはり魔王を甦らせるために暗躍しておつたか」

「ああ、死骸とはいえコイツの骸をこの世界に運ぶのには苦労した、しかしそれもすべて貴様を殺すためだ北郷一刀!!」

左慈が指を指すとその先には桃香たちと一緒に信玄たちを追いかけてきた一刀が立っていた。

「軍神どん、甲斐の虎!!」

義弘の掛け声と同時に三人は一刀を守るように前に立ち武器を構えた、そして幸村や政宗たちも同じく左慈たちに向けて武器を構えた。

「何度も言わせるな貴様等と戦うつもりはないと言つていいだろう」

左慈が指を鳴らすと義弘たち日ノ本から来たものたちの足元が光った。

「なんね!? こん光は」

「喜べ日ノ本の異世界からの客人たちよ貴様等の世界に戻してやろう」「何!？」

義弘が左慈に向かつて手を伸ばそうとした瞬間義弘たちはまばゆい光に身体を包まれた、そして光が消えると義弘たちは影も形もいなくなっていた。

「そ、そんな・・・」

「ハハハハハ!!」

一刀だけではなく桃香や華琳や雪蓮も義弘たちの消失に驚愕していた、戦場には左慈の笑い声だけが響いていた。

57 話

光に包まれ眩しさで目を閉じた義弘が目を開けるとそこは自分が居た薩摩の地だつた。

「ここは薩摩か、夢じやつた言うんか・・・」
「夢ではありません」

「?」

義弘が声のした後ろを振り向くとそこには、自分を異世界に送つたであろう少女が立つていた。

「島津さんこの前はご挨拶もせず失礼いたしました、私の名は管轄と申します」

「管轄・・・確か愛紗どんたちの世界においたちが来ることを予言したと言う」

「そうです、私はあの世界で左慈が暗躍していると聞き貴方たちを送ることを決めました、ちなみこの世界はあなた方が旅立つた時から私の力を使い時間を止めておりました」

「何とそげな事が出来るとわ、おまはんは何者ね?」

「私は世界の管理者です、そして貴殿方が出会つた左慈も」

「世界の管理者?」

「世界の管理者とは、貴方の世界そして貴方が行つた世界や他の全ての世界を管理者している者たちのことです」

「一刀どんの世界もね?」

「はい」

「一刀どんと左慈の関係は?」

「左慈は以前彼に負けたのです、負けたと言つても別の世界の彼ですが」

「別の世界?」

「ええ、世界はこの世界だけではなく他にも星の数ほどの世界があります、例えば北郷一刀が魏の曹操に拾われたり、呉の孫策に拾われたりする世界もあります、左慈は北郷一刀が関羽に拾われた世界で彼に負けたのです、それで左慈は彼を恨んでいるようです」「難しい話じゃな、でおまはんがおいの前に現れたのはどげん理由ね」

義弘が話の本題を聞くと管轄は義弘に深々と頭を下げる。

「お願いがあります、貴殿方にもう一度あの世界に戻つていただきたいのです」

「そもそもおいたちをあそこに送つた訳はなんね?」

「左慈が自分の管理する世界でもないこの世界に現れ、信長の遺体を探しているのを私は突き止めました、そしてその信長を使い北郷一刀を殺そうと企んだ、そこで信長が復

活したときのこととも考え貴殿方を選んだ次第です」

「なるほど、それで戻つて欲しいとはいがなる訳ね」

「はい、貴殿方がいなくなり左慈と魔王は猛威を振るつています、それだけではあります
ん呉と魏の一部の武将たちを探り手駒としています」

「何と!? そげな事になつとるとね」

「今は蜀と呉と魏の残存勢力が集まり抵抗していますがそれもいつまでも持ちません、
お願ひですどうかあの世界を救つてください」

管輶は涙をこぼしながら義弘に懇願した、すると義弘は管輶の肩に優しく手を置いた。

「管輶どん顔を上げんしゃい、おいも魔王をあのままにしたこと悔いとる、おいに出来
ることなら力になりもす」

「ありがとうございます、でしたら申し訳ありませんが一月後関ヶ原の地にお出でくだ
さい、他の方々にもそこに集まつていただくようにお願いしますので」

「分かりもした」

管輶はそう言い残すと義弘の前から姿を消した、義弘はすぐさま城に帰り旅支度を整
え次の朝城を出発した。

義弘が薩摩を出て一月後、義弘が無事に関ヶ原に着くとそこには伊達から政宗と小十

郎、上杉からは謙信　かすが　慶次、武田からは信玄　幸村　佐助、前田からは利家
 まつ、徳川からは家康　忠勝、豊臣からは三成　左近、浅井からは長政、長宗我部から
 は元親、総勢16人が集まつておりそこには管轄の姿も見えた。

「皆揃つたようだの？（宗茂どんや官兵衛どんがおらんな）」

皆が集まつたのを確認すると管轄が話を始めるため皆の中心に立つた。

「集まつて下さつた皆様には大変感謝しております、お気づきの方もいらつしやるで
 しうが向こうの世界ではいたのにこの世界に戻つて来られてない、最上義光　北条氏
 政　風魔小太郎　お市　雑賀孫一　鶴姫　小早川秀秋　立花宗茂　黒田官兵衛、以下の
 方々はまだあの世界に残つております、あの貴殿方を戻したあの術式はとても強力な
 ため範囲的にしか効果を發揮しませんでした、なのでその範囲外におられた方々は残さ
 れたのです」

「全軍集めなかつたのが効をそしたよじやな」

管轄の話を聞いていた信玄がひつそりと義弘に耳打ちをした、義弘はこくりと頷くと
 管轄の話にまた耳を傾けた。

「ここに集まつていただいた方々は向こうの世界に行くことを了承していただきまし
 た、そして皆さん懸念しているこの世界はまた私の力で時を止めさせていただきます
 のでご安心ください、向こうでは貴殿方がいなくなつてから三ヶ月の時が経つていま

す、そして貴殿方を送る場所は泰山という山の頂上です赤壁からは離れておりそこには私の仲間がいますので頼りにして下さい、それでは皆さん私を囮るように手を繋いでください』

「少し待つてもらおう」

管轄の言うとおり皆が手をつかもうとしたその時上から声が聞こえ、次の瞬間管轄の隣に一人の男が空から降りてきた、その人物こそ戦国の世の帝である足利義輝だつた。

「管轄とやら、その異世界とやら予も連れていつてもらおう」

「これは意外な男が現れたな」

「間に合つたみたいだな、実は俺が声をかけたんだ」

そう足利義輝に声をかけたのは彼の友でもある慶次だつた、慶次は激戦を予想し実力もある友の義輝に頼み込んだのである、義輝も友からの頼みと二つ返事で了承したのであつた。

「管轄どん、こん男は腕が立つ連れていつて損はなか男ね、他の者も異論はなかね?」

すると他のメンバーも義輝の実力は充分に知っていたので全員が首を縊に振り了承

した。

「分かりました、それでは義輝公よろしくお願ひいたします」「うむ」

「それでは皆さん先程言つたように輪になつてください」

義弘たちは義輝も加えた17人で管轄を囲んで手を繋いだ、すると地面が急に光だした。

「また貴殿方に辛い役目を任せてしまいホントに申し訳ありません」

「そう気にはすることはなか管轄どん、おいたちもあの世界には拾つてくれた恩がある、そん世界を魔王の好きにはさせん」

義弘の言葉に他のメンバー全員が頷いた、そして次の瞬間まばゆい光が全員を包んだ、すると瞬く間にその光が消えると関ヶ原には官路一人が残つていた。

「戦国の皆さんあの世界の存続は貴殿方と彼の少年にかかっています、どうか平和を導いてください」

管轄は空を見上げながらそう呟くと自身もその場から姿を消した。